

持田本村遺跡

2023

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

もちだほんむら

持田本村遺跡



2023

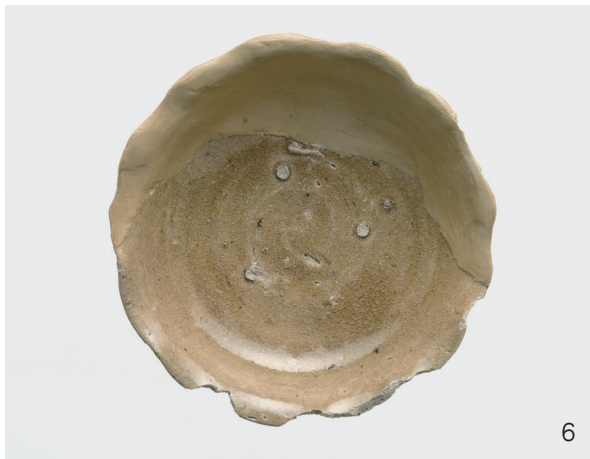
松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター



巻頭図版1. 溝 (SD101) 出土の唐津焼①



巻頭図版2. 溝 (SD101) 出土の唐津焼②

序 言

本書は平成 27 年度に、民間事業者によるマンション建設工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書です。

持田本村遺跡は松山市内でも有数の遺跡地帯として知られている道後城北遺跡群の東部域に所在し、遺跡周辺では湯築城址をはじめ、岩崎遺跡や道後町遺跡、持田町 3 丁目遺跡など数々の発掘調査が実施され、縄文時代から近世までの遺構や遺物が発見されています。

本遺跡からは縄文時代晩期の土坑 8 基や弥生時代前期の土壇墓 1 基のほかに、古墳時代の竪穴建物 6 棟と江戸時代の溝 2 条が見つかりました。このうち、縄文時代の土坑からは土器片やチップなどが数多く出土しました。また、溝からは松山市内でも出土例の少ない江戸時代前期、17 世紀初頭の陶磁器類が投棄された状態で見つかっています。今回の調査では、各時代における遺跡群東部域の集落様相を解明するうえで大変貴重な資料を得ることができました。

このような成果をあげることができたのも、関係各位の埋蔵文化財に対するご理解とご協力のたまものであり、心より感謝申し上げます。本書が文化財保護や教育文化の振興、さらには埋蔵文化財の調査・研究の一助となれば幸いです。

令和 5 年 3 月

松山市教育委員会
教育長 前田 昌一

例 言

1. 本書は公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが、2015（平成27）年4月から6月までの間に、民間事業者によるマンション建設工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた調査報告書である。
2. 本書で使用した遺構名は、略号化して記述した。
 竪穴建物：SB、溝：SD、自然流路：SR、土坑：SK、柱穴：SP
3. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は世界測地系を基準とした真北である。
4. 本書掲載の遺構埋土・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（2019）に準拠した。
5. 本書掲載の遺構図や遺物図の縮尺は、スケール下に記した。
6. 発掘調査における国土座標軸測量は、国際興業株式会社松山営業所に業務を委託した。
7. 発掘調査時の写真撮影は、調査担当者である宮内 慎一と大西 朋子（写真担当）が行った。また、報告書掲載の遺物写真撮影や図版の作成は大西が担当した。
8. 本書掲載の遺構図や土層図は宮内が作成し、遺物の復元や実測・製図は宮内の指示のもと、松本美代子、和泉 順子、平岡 直美、山下 満佐子、山之内 聖子、二宮 八咲が行った。
9. 本書の執筆・編集は宮内が担当し、浄書は平岡が担当した。
10. 本書で使用した遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査・刊行組織	2
第2章	遺跡の立地と歴史的環境	3
第1節	遺跡の立地	3
第2節	歴史的環境	4
第3章	調査の概要	9
第1節	調査の経緯	9
第2節	基本層位	10
第3節	基本層位と遺構・遺物	12
1.	1区の調査	12
2.	2区の調査	30
3.	3区の調査	54
4.	4区の調査	62
第4章	調査の成果と課題	85

挿図目次

第1章 はじめに

第1図 持田本村遺跡周辺遺跡分布図…………… 1

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第2図 松山平野の地形分布図…………… 4

第3図 周辺遺跡分布図…………… 7

第3章 調査の概要

第4図 調査地測量図…………… 9

第34図 SB202・SB203 出土遺物実測図 …… 40

第5図 土層柱状図…………… 11

第35図 SD201 測量図 …… 41

第6図 調査地区割図…………… 12

第36図 SD201 出土遺物実測図 (1) …… 43

第7図 1区南壁・西壁土層図 …… 14

第37図 SD201 出土遺物実測図 (2) …… 44

第8図 1区遺構配置図 …… 15

第38図 SD202 測量図 …… 45

第9図 SD101 測量図 …… 16

第39図 SD202 出土遺物実測図 …… 46

第10図 SD101 出土遺物実測図 (1) …… 17

第40図 SD203 測量図・出土遺物実測図 …… 47

第11図 SD101 出土遺物実測図 (2) …… 18

第41図 SD204 測量図 …… 48

第12図 SD101 出土遺物実測図 (3) …… 19

第42図 SD204 出土遺物実測図 (1) …… 49

第13図 SK101 測量図 …… 20

第43図 SD204 出土遺物実測図 (2) …… 50

第14図 SK101 出土遺物実測図 (1) …… 21

第44図 SD205 測量図

第15図 SK101 出土遺物実測図 (2) …… 22

第45図 SK201 測量図・出土遺物実測図 …… 51

第16図 SK101 出土遺物実測図 (3) …… 23

第46図 SK202 測量図・出土遺物実測図 …… 52

第17図 SK102 測量図 …… 24

第47図 SK203 測量図

第18図 SK102 出土遺物実測図 …… 25

第48図 SK204・SK205 測量図…………… 53

第19図 SK103・SK104 測量図…………… 26

第49図 2区包含層・地点不明出土遺物実測図 …… 55

第20図 SK103 出土遺物実測図 …… 27

第50図 3区土層図…………… 56

第21図 SK104 出土遺物実測図 …… 28

第51図 3区・4区遺構配置図…………… 57

第22図 SK105 測量図

第52図 SB301 測量図…………… 58

第23図 SK105 出土遺物実測図 …… 29

第53図 SB301 出土遺物実測図…………… 59

第24図 SK106 測量図

第54図 SB302 測量図・出土遺物実測図…………… 60

第25図 SK106 出土遺物実測図 …… 30

第55図 SB303 測量図・出土遺物実測図…………… 61

第26図 1区包含層出土遺物実測図 (1) …… 31

第56図 SK301～304 測量図・出土遺物実測図…………… 63

第27図 1区包含層出土遺物実測図 (2) …… 32

第57図 3区第V層出土遺物実測図…………… 64

第28図 2区南壁・西壁土層図…………… 33

第58図 4区土層図…………… 65

第29図 2区北壁・東壁土層図…………… 34

第59図 SK401・SK402 測量図・SK402 出土遺物実測図…………… 66

第30図 2区遺構配置図…………… 35

第60図 4区地点不明出土遺物実測図…………… 67

第31図 SB201 測量図…………… 36

第32図 SB201 出土遺物実測図…………… 37

第33図 SB202・SB203 測量図…………… 38

第4章 調査の成果と課題

第61図 持田本村遺跡変遷図	87	第62図 深鉢・浅鉢の器面調整	92
----------------	----	-----------------	----

表目次

第3章 調査の概要

表1 検出遺構一覧	13	表24 SB202 出土遺物観察表 (石製品)	78
表2 竪穴建物一覧	68	表25 SB203 出土遺物観察表 (土製品)	
表3 溝一覧		表26 SD201 出土遺物観察表 (陶磁器)	
表4 自然流路一覧		表27 SD201 出土遺物観察表 (土製品)	80
表5 土坑一覧		表28 SD202 出土遺物観察表 (土製品)	
表6 柱穴一覧	69	表29 SD203 出土遺物観察表 (土製品)	
表7 SD101 出土遺物観察表 (陶磁器)		表30 SD204 出土遺物観察表 (土製品)	
表8 SD101 出土遺物観察表 (土製品)	70	表31 SD204 出土遺物観察表 (石製品)	81
表9 SK101 出土遺物観察表 (土製品)	71	表32 SK201 出土遺物観察表 (土製品)	
表10 SK101 出土遺物観察表 (石製品)	73	表33 SK202 出土遺物観察表 (土製品)	
表11 SK101 出土遺物観察表 (玉類)		表34 2区第IV層出土遺物観察表 (土製品)	
表12 SK102 出土遺物観察表 (土製品)		表35 2区第V層出土遺物観察表 (土製品)	82
表13 SK102 出土遺物観察表 (石製品)	74	表36 2区地点不明出土遺物観察表 (土製品)	
表14 SK103 出土遺物観察表 (土製品)		表37 SB301 出土遺物観察表 (土製品)	
表15 SK104 出土遺物観察表 (土製品)	75	表38 SB302 出土遺物観察表 (土製品)	83
表16 SK104 出土遺物観察表 (石製品)		表39 SB303 出土遺物観察表 (土製品)	
表17 SK105 出土遺物観察表 (土製品)		表40 SK303 出土遺物観察表 (土製品)	
表18 SK106 出土遺物観察表 (土製品)	76	表41 SK304 出土遺物観察表 (土製品)	
表19 1区包含層出土遺物観察表 (土製品)		表42 3区第V層出土遺物観察表 (土製品)	
表20 1区包含層出土遺物観察表 (石製品)	77	表43 SK402 出土遺物観察表 (土製品)	84
表21 SB201 出土遺物観察表 (土製品)		表44 4区地点不明出土遺物観察表 (土製品)	
表22 SB201 出土遺物観察表 (石製品)		表45 4区地点不明出土遺物観察表 (石製品)	
表23 SB202 出土遺物観察表 (土製品)			

第4章 調査の成果と課題

表46 縄文時代晩期の土坑出土品一覧	85	表50 深鉢の施文一覧	91
表47 SD101・201 出土の陶磁器	89	表51 浅鉢の口縁部形態と施文	
表48 SD101・201 出土の唐津焼		表52 深鉢の器面調整一覧	92
表49 持田本村遺跡出土の縄文土器一覧	90	表53 浅鉢の器面調整一覧	

写真図版目次

巻頭図版 1. 溝 (SD101) 出土の唐津焼①

巻頭図版 2. 溝 (SD101) 出土の唐津焼②

図版 1 1. 1区検出状況 (北東より)

2. 1・2区検出状況 (北より)

図版 2 1. 3・4区検出状況 (西より)

2. 1区攪乱除去状況 (北西より)

図版 3 1. 1区遺構完掘状況 (北より)

2. SD101 検出状況 (北より)

図版 4 1. SK101 検出状況 (西より)

2. SK103・104・106 検出状況 (北西より)

図版 5 1. 2区遺構検出状況 (東より)

2. 2区遺構完掘状況 (北より)

図版 6 1. SB201 検出状況 (北西より)

2. SB201 カマド検出状況 (南西より)

図版 7 1. SB202・203 検出状況 (北東より)

2. SD201 完掘状況 (北より)

図版 8 1. SD201 断面 (北より)

2. SD202 断面 (西より)

図版 9 1. SD204 検出状況 (南西より)

2. SD204 遺物出土状況 (南西より)

図版 10 1. SD204・205 検出状況 (北西より)

2. SK201 検出状況 (北より)

図版 11 1. 3区・4区遺構完掘状況 (西より)

2. 3区東壁土層 (西より)

図版 12 1. SB301 検出状況 (西より)

2. SB302・303 検出状況 (南より)

図版 13 1. SK401・402 検出状況 (北西より)

2. SK402 遺物出土状況 (北西より)

3. 作業風景 (西より)

4. 現地説明会風景 (東より)

図版 14 1. SD101 出土遺物①

図版 15 1. SD101 出土遺物②

図版 16 1. SK101 出土遺物①

図版 17 1. 出土遺物 (SK101 ② : 61 ~ 79、SK102 : 80 ~ 90)

図版 18 1. 出土遺物 (SK103 : 91 ~ 107、SK104 : 108 ~ 115)

図版 19 1. 出土遺物 (SK105 : 117 ~ 123、SK106 : 124 ~ 129、1区包含層 : 131・133・134・142・144 ~ 147)

図版 20 1. SD201 出土遺物①

図版 21 1. 出土遺物 (SD201 ② : 192・193・196・199、SB201 : 148・152 ~ 154、SB202 : 155・156・160)

図版 22 1. 出土遺物 (SD202 : 203 ~ 206、SD204 ① : 210 ~ 221)

図版 23 1. 出土遺物 (SD204 ② : 222 ~ 225、SK201 : 226・227、2区第IV層 : 231・233、2区第V層 : 234・235・238、2区地点不明 : 239 ~ 241)

図版 24 1. 出土遺物 (SB301 : 242・244・245・248、SB302 : 249・250・253、SK303 : 258、3区第V層 : 261、SK402 : 264、4区地点不明 : 265)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

2013（平成25）年4月12日、松山市都市整備部住宅課より松山市南町一丁目837番外における埋蔵文化財の確認申込書が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。

申請地は、道後城北遺跡群と称される松山市内でも有数の遺跡地帯東部域にあたる。周辺では申請地の南方にて、平成5年度に財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター〔現 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター（以下、県埋文という。）〕により『持田町3丁目遺跡』として発掘調査が実施され、縄文時代晩期の土坑をはじめ、弥生時代前期の土壙墓や土器棺墓、古墳時代の竪穴建物などが発見されている。また、申請地の東方では松山東部環状線道路建設に伴い、平成8年度から9年度にかけて財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター〔現 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、市埋文という。）〕により『岩崎遺跡』として発掘調査が実施され、弥生時代前期の大溝や185基の土坑、弥生時代中期や後期の竪穴建物、古代の掘立柱建物のほかに中世の水田址や畠址などが発見されている。また、申請地北方では平成11年度から15年度にかけて、県埋文により『道後町遺跡』として発掘調査が実施され、縄文時代から江戸時代までの遺構や遺物が数多く発見されている。



第1図 持田本村遺跡周辺遺跡分布図

これらのことから、申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、事前の試掘調査を実施することになった。調査は市埋文により、2013（平成25）年4月30日に実施した。19本のトレンチを設定し、遺構・遺物の確認作業を行った結果、溝や柱穴のほかに縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器を検出した。

2015（平成27）年2月26日、セントラル総合開発株式会社広島支店執行役員支店長 下前 龍一氏（以下、申請者という。）より、当該地内における分譲マンション新築工事に伴う埋蔵文化財確認申込書が文化財課に提出された。申請地は、以前の試掘調査により埋蔵文化財の存在が明らかになっており、申請者と文化財課との間で遺跡の取り扱いについて協議が行われ、マンション新築工事によって破壊される遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

申請者と市埋文は発掘調査に関する協議を行い、2015（平成27）年3月13日付けで発掘調査に伴う委託契約を締結した。発掘調査は市埋文が主体となり、文化財課の指導のもと、2015（平成27）年4月16日より開始した。

第2節 調査・刊行組織

発掘調査は2015（平成27）年4月16日より開始し、同年6月30日に終了した。調査終了後は、松山市埋蔵文化財センター内にて出土品や図面・写真類の整理作業を行った。報告書作成に伴う整理作業は、令和4年度に実施した。調査担当職員の指示のもと、整理員による出土品の接合・復元・実測作業等を実施した後、編集作業を行い、令和5年3月15日に報告書を刊行した。

調査名：持田本村遺跡

調査場所：松山市南町一丁目837番1の一部

調査面積：約380㎡

調査期間：2015（平成27）年4月16日（木）～同年6月30日（火）

調査主体：公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：埋蔵文化財センター 主任 宮内 慎一

1. 調査組織〔平成27年度〕

松山市教育委員会	教育長	山本 昭弘	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団			
	事務局	局長	前田 昌一	理事長	中山 紘治郎	
		次長	隅田 完二	事務局	局長	中西 真也
		次長	家串 正治		次長兼総務部長	紺田 正彦
文化財課	課長	若江 俊二	施設利用推進部	部長	渡部 広明	
	主幹	篠原 昭二	埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	田城 武志	
				(調査・研究) 主査	山之内 志郎	
				主査	橋本 雄一	

主任 宮内 慎一
(調査担当)

嘱託 大西 朋子
(写真担当)

2. 刊行組織〔令和4年10月2日現在〕

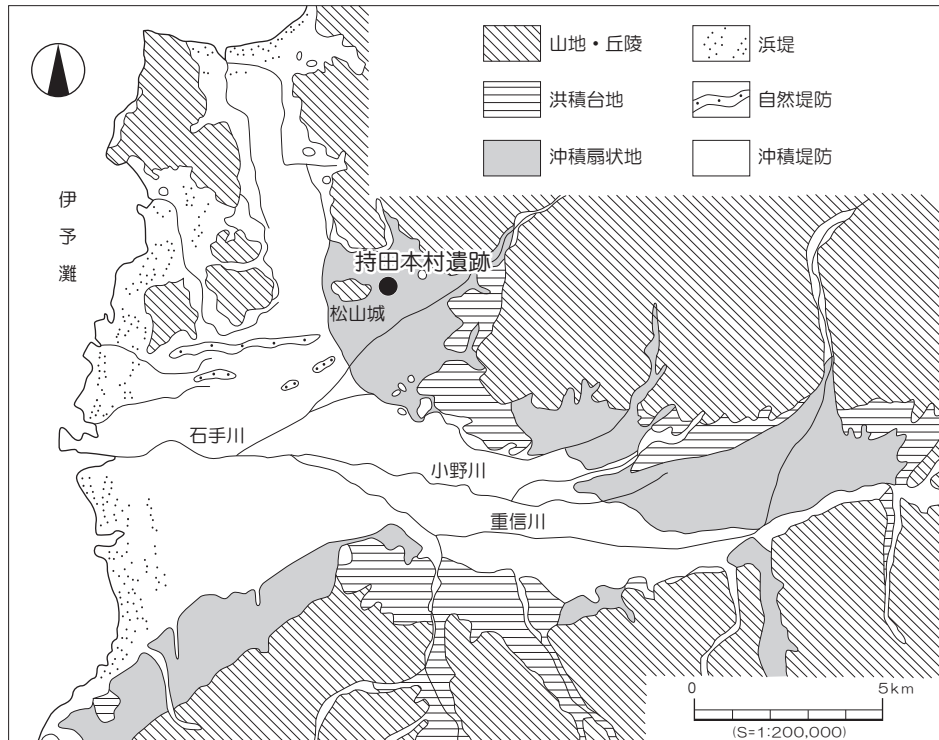
松山市教育委員会	教育長	前田 昌一	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
	事務局	局長 鷺谷 浩三	理事長 本田 元広
		次長 石原 英明	事務局 局長 片山 雅央
		次長 横山 憲	次長兼施設管理部部長
		次長 横江 茂樹	兼事業振興部長 宇高 徹二
文化財課	課長	二宮 仁志	埋蔵文化財センター 所長兼考古館館長 梅木 謙一
	主幹	高橋 秀忠	(調査・研究) 主査 吉岡 和哉
	副主幹	楠 寛輝	嘱託 宮内 慎一 (編集担当)
			嘱託 大西 朋子 (写真担当)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

松山平野は、伊予灘と燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置する。高縄半島中央部には半島の最高峰である東三方ヶ森にはじまり、北西には伊予之山・北三方ヶ森・高縄山からなる高縄山系が広がっている。高縄山系は西南日本内帯の領家変成岩帯に属しており、主に中生代に貫入した石英斑岩脈を伴う花崗閃緑岩より構成されている。松山平野は、高縄半島中央部を南北方向に流れる石手川と重信川とによって形成された沖積平野である。このうち、本調査地を含む平野北東部は石手川の氾濫に起因する半径約4kmの扇状地と、裾部に広がる沖積低地から形成されている。扇状地は石手川右岸では洪積層を基盤とし、縄文海進後に形成された沖積層が上面を覆うように堆積し、現在の地形を形成している。

持田本村遺跡は扇状地の扇央付近に位置し、分離独立丘陵の湯築城址と城山（勝山）とを結ぶ緩傾斜地上に立地している。遺跡中心部の絶対位置は、北緯33°50′46″、東経132°46′54″である。この地域は「道後城北地区」と称され、松山市内でも有数の遺跡地帯として知られている。同地区は地理的条件や遺跡の性格などから城北地区・祝谷地区・道後地区の3地区に区分され、本遺跡は地区東部の道後地区に所在している。道後地区は愛媛県民文化会館周辺の平地部と、そこから東へ広がる丘陵部によって構成されている。



第 2 図 松山平野の地形分布図

第 2 節 歴史的環境

道後城北地区には文京遺跡をはじめ、松山大学構内遺跡や道後町遺跡など数多くの遺跡が分布している。道後地区では古くは道後今市遺跡や持田遺跡などがあり、平成年間には道路整備や公共施設の建設に伴い大規模な発掘調査が実施され、貴重な遺跡が数多く発見されている。ここでは、遺跡の所在する道後地区において近年発掘調査された遺跡を中心に概観する。

縄文時代

道後地区の北方には土居段遺跡や土居窪遺跡、冠山遺跡があり、後期の遺物が少量出土している。平成 11 年度から 13 年度にかけて都市計画道路道後祝谷線整備事業に伴い、県埋文により『土居窪遺跡 2 次調査』が実施され、縄文時代晩期から弥生時代前期前半の遺物が出土した自然流路が検出されている。また、本遺跡の北側には都市計画道路東一万道路整備に伴い実施した『道後町遺跡』が存在する。平成 15 年度から 16 年度にかけて実施した道後町遺跡 2 次調査では、晩期の自然流路が確認されている。このほか、平成 28 年度には市埋文による「飛鳥乃温泉（あすかのゆ）」建設に伴い実施した『道後湯之町遺跡 2 次調査』からは、縄文時代晩期後半の土坑や遺物が検出されている。さらに、平成 16 年度から 17 年度には、市埋文が市道道後 42・43 号線道路改良工事に伴い実施した『道後湯月町遺跡』と『道後湯之町遺跡』からは明確な遺構は未検出であるが、検出した時期の異なる遺構内や包含層中より晩期の土器片が少量出土している。本遺跡南側に隣接して、『持田町 3 丁目遺跡』がある。平成 5 年度に県埋文により愛媛県総合社会福祉会館新設工事に伴い実施した発掘調査で、土坑

2基のほかに大量の縄文土器や石器が出土した。土坑は晩期に時期比定され、出土した縄文土器は後期や晩期中葉から後葉に時期比定されている。これらのことから、道後地区には縄文時代後・晩期における集落の存在が明らかになりつつある。

弥生時代

前期：本遺跡の東方には平成8年度から9年度にかけて、松山東部環状線道路建設工事に伴い、市埋文により『岩崎遺跡』の調査が実施されている。調査地は南北に長い形状をなし、道路幅16m、全長700m、約13,000㎡が調査対象面積である。遺跡北部域では、前期末から中期前葉に時期比定される幅5m前後、深さ1.3～1.5mの大型溝3条と該期の土坑185基が検出されている。大型溝のうち、2条の溝は同一溝と考えられて、内径は約100mである。松山市内では市内南東部、来住台地上でも同様の大型溝が検出されており、該期における環濠集落の存在が注目されている。一方、土坑は断面形態が筒状や袋状をなすものが多く、貯蔵穴として利用されたものと考えられている。

次に、前述した道後町遺跡では、幅2.8m、深さ0.68mの溝（前期後半）や土坑（前期後半～末）が検出されている。さらに同2次調査では、前期後半から末の土坑186基が確認され、そのうち145基は貯蔵穴、3基は土壙墓である。このほか、道後湯之町遺跡2次調査からは前期末の土坑2基が確認されている。また、平成29年度から30年度にかけて、マンション建設に伴い市埋文が実施した持田本村遺跡2次調査では前期末の土坑が検出されている。さらには、前述した持田町3丁目遺跡からは、前期後半の土壙墓17基と土器棺墓9基を検出している。土壙墓は主軸を北東-南西方向にとり、平面形態は楕円形ないし長方形をなす。調査地北東部から南西部にかけて列状に分布しており、14基の土坑内からは小型壺が埋葬され、そのほかにも管玉や磨製石剣、磨製石鏃が土坑内から出土している。なお、土器棺墓は大型壺を棺身、鉢を棺蓋とする合口式壺棺である。このことから、本遺跡や近隣地域は該期における墓域であったことがわかる。

中期：中期になると、道後地区東部に広がる丘陵上に遺跡が存在する。昭和62年度にホテル椿館建設に伴い市埋文が実施した『道後鷲谷遺跡』からは、中期前葉から中葉の遺物が包含層中より大量に出土している。また、県埋文による一般県道六軒家石手線道路改良工事に伴い実施した『道後鷲谷遺跡2次調査』では中期前葉から後葉の溝や土坑が検出され、包含層中からは該期の遺物が出土している。このほか、湯之町遺跡2次調査からは中期前葉の土坑3基が検出され、土坑内からは完形品が出土している。

中葉の遺構は、前述した岩崎遺跡にて溝1条が検出されている。また、道後湯之町遺跡2次調査からは土坑1基が検出され、土坑内からは完形の壺が出土している。さらに、土居窪遺跡2次調査からは中期中葉から後葉の土坑や中期中葉の遺物が出土した自然流路が検出され、流路内からは木製品が出土している。このほか、土居窪Ⅲ遺跡からは包含層中より中期中葉の遺物が出土している。

中期後葉では、岩崎遺跡にて堅穴建物1棟と土坑3基が検出されている。なお、土坑は断面形態が袋状をなすものが多く、貯蔵穴として機能したものと考えられている。

後期：前葉では岩崎遺跡の北部域から、直径6mの円形堅穴建物1棟が検出されている。後葉では岩崎遺跡から長形状の堅穴建物（長さ3.9m、幅2.85m）1棟が検出されており、検出状況から火災を被った建物である。また、遺跡からは3基の土坑が検出され、長形状の土坑1基は土壙墓の可能性をもつ。さらに、持田町3丁目遺跡からは終末期の土器棺墓2基が検出されている。土器棺は、複合口縁壺を棺身とする壺棺墓である。本遺跡の北方では、土居窪遺跡2次調査より後期前葉の土坑

が検出され、土居窪Ⅲ遺跡からは同時期の溝が確認されている。後葉では、土居窪遺跡 2 次調査から土坑が検出されたほか、土居窪遺跡 4 次調査では幅約 10 m、深さ 1.4 m の大型溝が検出され、溝内からは完形品を含む大量の土器が出土し、その中には分銅形土製品が含まれている。

古墳時代

前期：前期の資料は乏しく、中期から後期が大半を占める。

中期：道後町遺跡 2 次調査からは中期後半、5 世紀末の竪穴建物 2 棟が検出され、持田町 3 丁目遺跡からも同時期の竪穴建物が確認されている。

後期：後期では岩崎遺跡北部域より、溝 2 条と土坑 1 基を検出している。また、道後町遺跡 2 次調査からは 6 世紀前半と 6 世紀末の竪穴建物が検出され、持田町 3 丁目遺跡からも 6 世紀前半、6 世紀後半、7 世紀前半の竪穴建物が報告されている。さらに、道後鷲谷遺跡 2 次調査では 6 世紀代の溝が検出されて、道後湯之町遺跡からは 6 世紀代の溝と土坑が検出されている。このほか、持田本村遺跡 2 次調査からは 6 世紀前半に時期比定される幅 5 m、深さ 36cm 程度の溝や土坑が確認されている。

なお、古墳は地区東方に広がる丘陵上に櫻谷古墳群や石手寺古墳群が所在するが、全容や詳細については不明な点が多い。

古 代

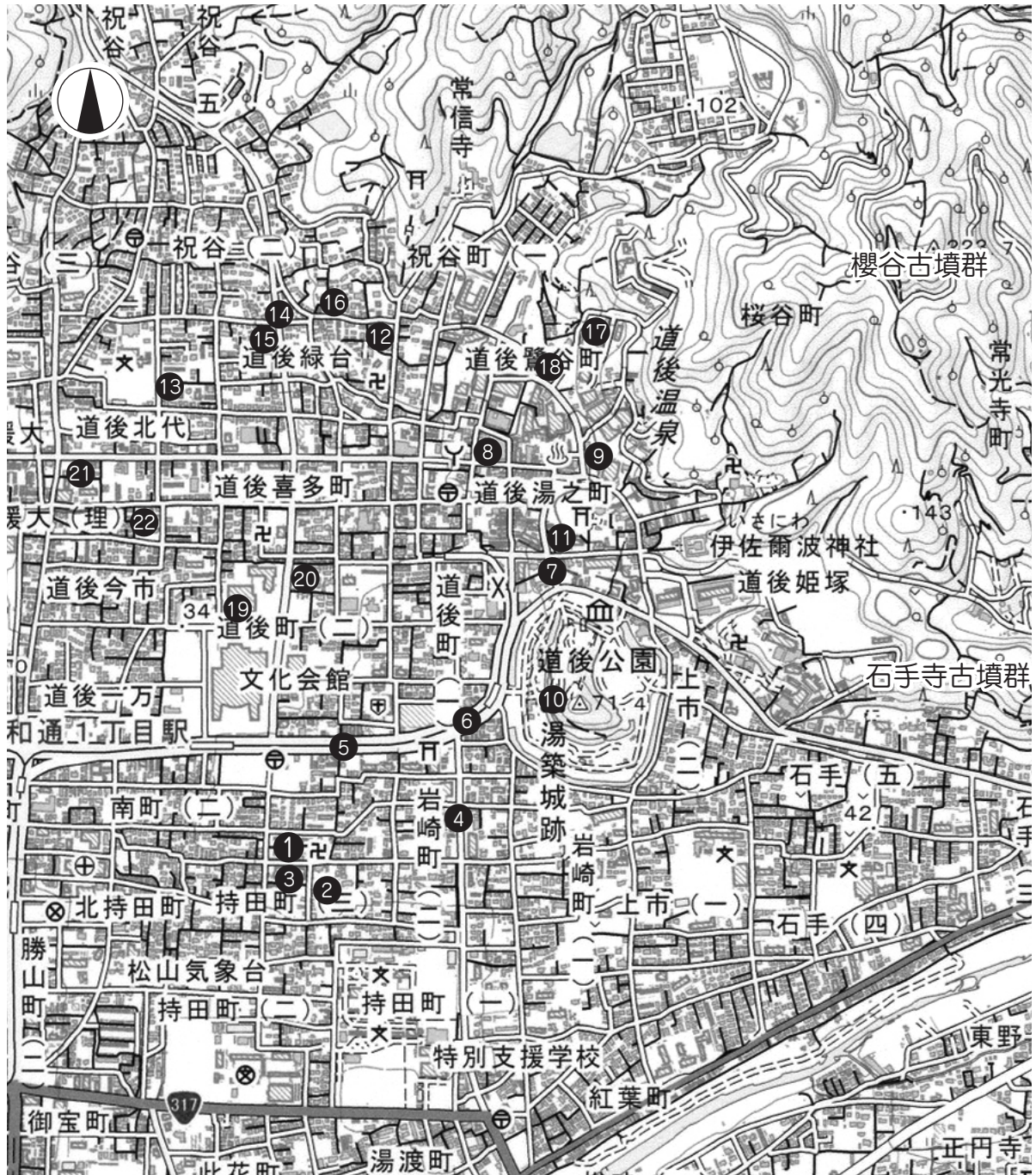
大化の改新前後には、舒明 11 (639) 年に舒明天皇、続いて齋明 7 (661) 年には齋明天皇一行の熟田津石湯 (道後温泉) への行幸が知られており、伊予国風土記には聖徳太子が来県し、伊佐爾波神社がある丘に碑文を建立したという伝承が記されている。大宝律令制定以降、愛媛県は伊豫国と称され、国内には 14 郡が設置されていた。松山平野には伊予郡・和気郡・久米郡・温泉群・浮穴郡の 5 郡が置かれており、『倭名類聚抄』には道後地区は温泉群井上郷に属していたことがわかる。同地区には白鳳期の創建とされる湯之町廃寺と内代廃寺が知られているが、正確な位置や実態は不明な点が多い。

岩崎遺跡北部域から中央部域では、奈良時代の溝 2 条が検出されている。南北方向の溝で、溝北側は L 字状に折れ曲がり西方へ延びている。溝からは畿内産土師器 (平城編年 I・Ⅲ 併行) や円面硯の破片のほかに土製馬が出土しており、8 世紀前半の溝と考えられている。また、同遺跡の中央部域からは平安時代、10 世紀代の掘立柱建物が報告されている。なお、遺跡からは緑釉陶器や灰釉陶器の破片が数点出土している。さらに、道後湯月町遺跡から平安時代以前の構築と思われる池状遺構を検出している。本遺跡は道後温泉本館の東側に隣接しており、遺跡からは円礫を積み重ねて池垣とした構造の遺構が検出された。なお、池状遺構からは土師器や須恵器片のほかに用途不明の木製品などが出土している。なお、包含層資料ではあるが、暗文を施した土師器片が遺跡からは数多く出土している。

このほか、道後町遺跡からは 8 世紀末から 12 世紀代の自然流路が数条検出され、12 世紀以降とされる掘立柱建物 1 棟が検出されている。さらに、道後町遺跡 2 次調査からも平安時代の自然流路が報告されている。このほか、持田町 3 丁目遺跡からは明確な遺構は検出されていないが、表土や攪乱内より平安時代から江戸時代の遺物が出土している。

中 世

中世では、河野氏の居城である道後湯築城址が存在する。道後地区には石手寺や義安寺、宝巖寺などの寺院が集中しており、門前町や現在は遍路道となっている街道が発達していたと推定されている。湯築城の築城以降、周辺には上市、上古市、今市などの地名がみられ、市町が形成されていたと推測



(S=1:12,000)

- | | | | |
|----------------|-----------------|----------------|-----------------|
| ① 持田本村遺跡 | ② 持田本村遺跡 2 次調査 | ③ 持田町 3 丁目遺跡 | ④ 岩崎遺跡 |
| ⑤ 道後町遺跡 | ⑥ 道後町遺跡 2 次調査 | ⑦ 道後湯之町遺跡 | ⑧ 道後湯之町遺跡 2 次調査 |
| ⑨ 道後湯月町遺跡 | ⑩ 湯築城跡 | ⑪ 道後冠山遺跡 | ⑫ 土居段遺跡 |
| ⑬ 土居窪遺跡 | ⑭ 土居窪遺跡 2 次調査 | ⑮ 土居窪Ⅱ遺跡 | ⑯ 土居窪遺跡 4 次調査 |
| ⑰ 道後鷺谷遺跡 | ⑱ 道後鷺谷遺跡 2 次調査 | ⑲ 道後今市遺跡 1 次調査 | ⑳ 道後今市遺跡 5 次調査 |
| ㉑ 道後今市遺跡 9 次調査 | ㉒ 道後今市遺跡 10 次調査 | | |

第 3 図 周辺遺跡分布図

されている。

岩崎遺跡の南部域からは鎌倉時代から室町時代の水田址や畠址が検出され、北部域からは14世紀代の掘立柱建物や溝、土坑が検出されている。道後町遺跡では条理区画に沿った15世紀代の溝が数条検出されており、道後町遺跡2次調査からは一辺109.7mの方形溝（15世紀中～16世紀初頭）が発見され、この溝で取り囲まれたエリアは守護所の可能性が指摘されている。このほか、道後今市遺跡（愛媛県民文化会館敷地内）では9次・10次調査にて13～14世紀の掘立柱建物群、1次・5次調査からは14～16世紀の溝、土坑、墓などが発見されている。また、道後湯月町遺跡からは前述したものとは別の池状遺構が検出されている。12～15世紀代の遺構で、位置や構築方法は同じであり、遺構内からは池垣に使用したと考えられる円礫が散在して出土している。とりわけ、完形品の土師器や瓦器がまとまって出土しており、祭司儀礼が執り行われたものと推測される。さらに、道後湯之町遺跡からは13世紀代の溝と自然流路を検出している。

近 世

岩崎遺跡の南部域からは、16世紀後半頃の石組溝が検出されている。また、道後町遺跡2次調査においても同時期の石組溝が発見されている。道後湯月町遺跡では、18世紀代の土坑1基を検出している。甕を埋置した埋甕遺構で、トイレとして利用された可能性がある。このほか、持田本村遺跡2次調査からは該期の土坑30基が検出され、土坑内からは土師器や陶磁器の破片が数多く出土しており、廃棄土坑と推測されている。

【参考文献】

- 愛媛県史編さん委員会 1980 『愛媛県史 資料編 考古』
 松山市史料集編集委員会 1980 『松山市史料集 第1巻 考古編』
 松山市史料集編集委員会 1986 『松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ』
 真鍋 昭文 2002 「土居窪遺跡2次調査」『都市計画道路道後祝谷線整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 土居窪遺跡2次・祝谷畑中遺跡・祝谷本村遺跡2次』埋蔵文化財発掘調査報告書 第101集
 寺嶋 信三 他 2002 『都市計画道路東一万道後（道後工区）線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書 道後町遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書 第97集
 三好 裕之 他 2005 『都市計画道路東一万道後（道後工区）線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書 道後町遺跡Ⅱ』埋蔵文化財発掘調査報告書 第121集
 加島 次郎 他 2018 『道後湯之町遺跡2次調査』松山市文化財調査報告書 第191集
 宮内 慎一 2008 「道後湯月町遺跡」『市道道後42・43号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡』松山市文化財調査報告書 第123集
 宮内 慎一 2008 「道後湯之町遺跡」『市道道後42・43号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡』松山市文化財調査報告書 第123集
 真鍋 昭文 1995 『持田町3丁目遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書 第58集
 宮内 慎一 1999 『岩崎遺跡』松山市文化財調査報告書 第71集
 高尾 和長 2019 「持田本村遺跡2次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報31』
 梅木 謙一 他 1994 「道後鷲谷遺跡」『道後城北遺跡群Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第37集
 三好 一史 他 2004 『一般県道六軒家石手線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 道後鷲谷遺跡2次』埋蔵文化財発掘調査報告書 第111集
 宮内 慎一 2014 「土居窪Ⅲ遺跡」『道後城北遺跡群Ⅲ』松山市文化財調査報告書 第169集
 小笠原 善治 2016 「土居窪遺跡4次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報28』
 中野 良一 他 1998 『湯築城跡』埋蔵文化財発掘調査報告書 第66集
 橋本 雄一 1994 「道後今市遺跡9次調査地」『道後城北遺跡群Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第37集
 多田 仁 他 1994 『道後今市遺跡X』埋蔵文化財調査報告書 第53集
 岡田 敏彦 1985 「道後今市遺跡 第Ⅰ次調査区」『道後今市遺跡 愛媛県民文化会館・愛媛県総合福祉センター建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』
 岡田 敏彦 1985 「道後今市遺跡 第Ⅴ次調査区」『道後今市遺跡 愛媛県民文化会館・愛媛県総合福祉センター建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』

第3章 調査の概要

第1節 調査の経緯

発掘調査は調査対象地が申請地内に4箇所あり、1区から4区の区名を付けて実施した(第4図)。まず、1区から着手し、併行して2区の調査を行った。その後、3区、4区と進め、平成27年6月30日に屋外調査を終了した。調査期間は約2.5ヶ月間である。調査終了時には、一般市民を対象とする現地説明会を開催した。以下、調査工程を略記する。

4月16日(木): 本日より、屋外調査を開始する。まず、仮設事務所の設置と発掘機材の搬入を行い、その後、重機(バックホー0.45m³)を使用して1区の表土掘削を開始する。試掘調査の結果より、黒褐色土上面までを掘削し、その後、作業員による手作業にて遺構検出作業を行う。1区の掘削終了後には2区の表土掘削を開始し、3区、4区の順で掘削作業を行う。掘削と併行して、作業員による壁面精査と遺構検出



第4図 調査地測量図

作業を行う。

- 4月22日（水）：すべての調査区で、壁面精査及び遺構検出作業を実施したが、各調査区では明確な遺構プランが確認できなかった。
- 4月30日（木）：黒褐色土上面では明確な遺構の検出が困難であったため、再度、重機を使用して明黄褐色土上面まで掘削を行う。その結果、1区では溝と土坑、2区では竪穴建物や溝、土坑、柱穴、3区では竪穴建物と土坑、4区からは土坑を検出した。
- 5月13日（水）：本日より、1区の調査に着手する。1区は近現代の攪乱が著しく、それらの除去作業に3日間を費やす。
- 5月19日（火）：遺構検出作業終了後、本日より遺構の掘り下げ作業に着手する。まず、溝を掘り下げ、縄文土器や弥生土器、土師器、陶磁器が出土する。溝の掘削終了後には、同一溝と思われる2区検出の溝を掘り下げる。
- 5月26日（火）：溝の調査終了後、1区で検出した土坑の掘削と測量作業を行う。その後、2区の調査に移り、竪穴建物の掘削に取り掛かる。併行して、2区検出の土坑や柱穴の調査を行う。
- 6月1日（月）：1区と2区の遺構測量と写真撮影を行い、6月8日（月）に終了する。
- 6月9日（火）：本日より、3区の調査に着手する。まず、竪穴建物の掘削作業を行い、その後、土坑の半截・完掘作業を進める。
- 6月15日（月）：3区で検出した遺構の測量及び写真撮影を行い、3区の調査を終了する。
- 6月17日（水）：4区の調査を開始し、土坑及び土壙墓の掘削作業を行う。
- 6月19日（金）：4区で検出した遺構の測量及び写真撮影を行い、4区の調査を終了する。
- 6月23日（火）：高所作業車を使用し、写真担当者による遺構完掘状況写真を撮影する。
- 6月27日（土）：午前10時より、一般市民を対象とする現地説明会を開催し、120名の参加者に対して遺跡の状況や出土品の解説を行う（図版13）。
- 6月29日（月）：重機を使用して、表土の埋め戻し作業を開始する。同時に、発掘調査で使用した用具類の撤去作業を行う。
- 6月30日（火）：仮設事務所の撤去や発掘機材の搬出を終了し、本日にて屋外調査を終了する。

第2節 基本層位

調査地は旧石手川の氾濫等により形成された扇状地上、標高約36.3m前後に立地している。調査以前は、市営団地が存在した場所である。調査地の基本層位は、以下の8層である（第5図）。このうち、第Ⅳ層、第Ⅴ層、第Ⅵ層及び第Ⅶ層は遺物を含む土層である。

第Ⅰ層：近現代の造成等に伴う客土で、バラスやコンクリート殻を多く含む。

第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う耕土で、2種類に分層される。

第Ⅱ①層－耕作土〔緑灰色土（5G 6/1）〕で1・3・4区にみられ、層厚は5～70cmである。

第Ⅱ②層－床土〔黄褐色土（10YR 5/6）〕で3区と4区に見られ、層厚は5～20cmである。

第Ⅲ層：灰黄褐色土（10YR 6/2）で1区にみられ、層厚は3～20cmである。1区と2区で検出し

た江戸時代の溝は、本層上面から掘削された遺構である。

第Ⅳ層：褐灰色土（7.5YR 4/1）で全調査区にみられ、層厚は5～25cmである。本層中からは、古代に時期比定される土師器や須恵器の破片が少量出土した。

第Ⅴ層：黒褐色土（7.5YR 3/1）で1・2・3区にみられ、層厚は10～50cmである。本層中からは、弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土した。

第Ⅵ層：にぶい黄褐色土（10YR 4/3）で2・3・4区にみられ、層厚は10～60cmである。本層中からは弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土した。なお、3区検出の竪穴建物は、本層上面から掘削された遺構である。また、4区検出の土壌墓は本層が遺構上面を覆う。

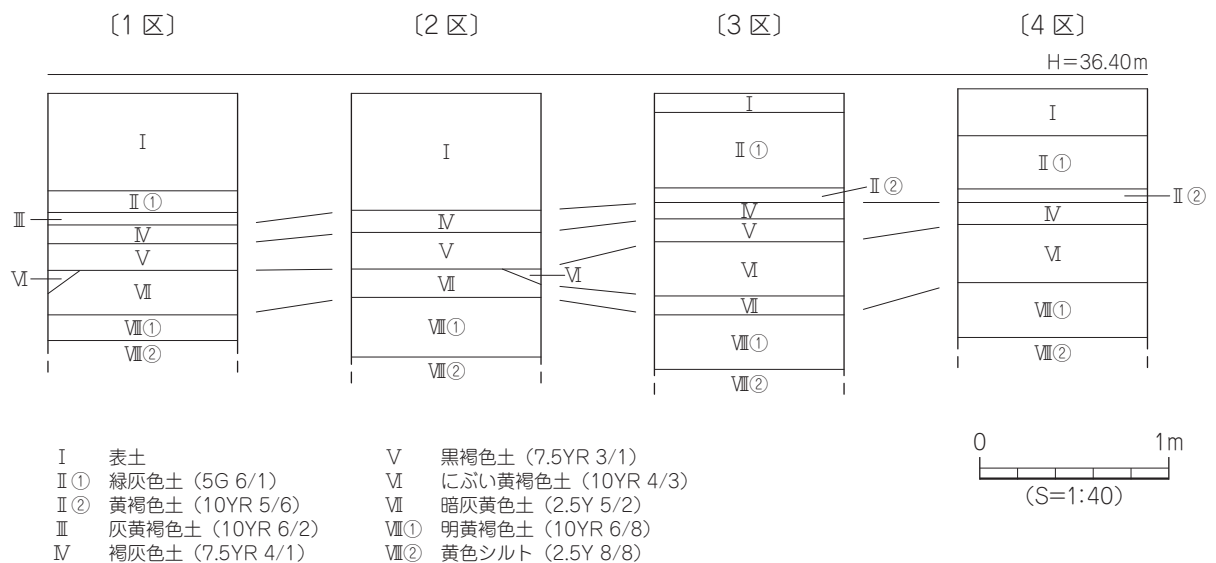
第Ⅶ層：暗灰黄色土（2.5Y 5/2）で1・2・3区にみられ、層厚は5～30cmである。1区の堆積が最も厚く、本層中からは縄文土器片や石器（スクレイパー・チップ）が出土した。

第Ⅷ層：土色・土質の違いにより、2種類に分層される。

第Ⅷ①層－明黄褐色土（10YR 6/8）で全調査区にみられ、層厚は20～50cmである。本層上面が、調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると、調査地北東部4区では35.4mであり、3区に向けて低くなり、3区では標高35.1mとなる。なお、調査地中央部2区では標高35.3～35.4mであり、1区に向けて低くなり、調査地南側の1区では標高35.1～35.3mである。本層中からは、遺物の出土はみられなかった。

第Ⅷ②層－黄色シルト（2.5Y 8/8）で、全調査区にて部分的に確認した土層である。本層は道後城北地区で散見される、縄文時代後期の包含層に相当する土層と考えられる。

検出遺構や出土遺物より、第Ⅶ層・第Ⅷ層は縄文時代、第Ⅵ層は弥生時代、第Ⅴ層は古墳時代、第Ⅳ層は古代までに堆積した土層と考えられる。調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分け、グリッド毎に地区名を付けた。グリッドは南から北へA・B・C……J、西から東へ1・2・3……11とし、A1・A2・A3……J11といったグリッド名を付した（第6図）。グリッドは、遺構の位置表示や発掘調査時の遺物取り上げ等に利用した。



第5図 土層柱状図

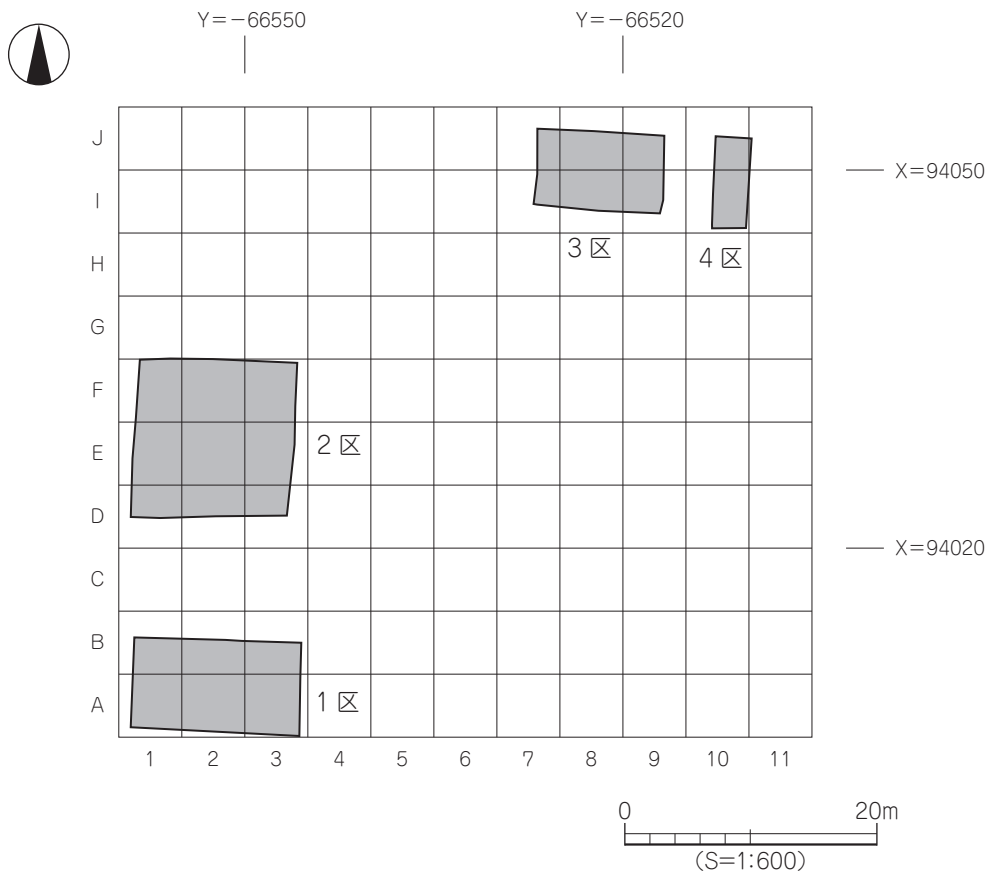
第3節 基本層位と遺構・遺物

調査では縄文時代から近世、江戸時代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は竪穴建物6棟（古墳時代）、溝6条（弥生時代:2条、古墳時代:2条、江戸時代:2条）、自然流路1条（縄文時代）、土坑16基（縄文時代:7基、弥生時代:1基、古墳時代:8基）、土壙墓1基（弥生時代）、柱穴26基（弥生時代～古墳時代）である（表1）。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、玉類が出土した。遺物の出土量は、遺物収納箱（44 × 60 × 14cm）9箱分である。ここでは、調査区毎に調査成果を報告する。

1. 1区の調査

1区は調査地南側に位置し、東西長10.5m、南北長6.0m、調査面積は約60㎡である。1区は近現代の攪乱が著しく、北半部全域と東側の一部は地表下約1.7mの地点まで開発が及んでおり、遺跡が遺存していない。また、1区南半部でも数箇所に攪乱坑が存在している。



第6図 調査地区割図

表 1 検出遺構一覧

時代	1区	2区	3区	4区
縄文	土坑：6基	土坑：2基 流路：1条		
弥生		溝：3条		土坑：1基 土壙墓：1基
古墳		竪穴：3棟 溝：1条 土坑：3基	竪穴：3棟 土坑：4基	
近世	溝：1条	溝：1条		

(1) 基本層位

1区では、基本層位の第Ⅱ②層を除く土層を検出した（第7図）。

第Ⅰ層：北半部は前述のとおりであるが、南半部では地表下約60cmの地点まで開発が及び、1区西半部では地表下約1mの地点まで開発が及んでいる。

第Ⅱ層：1区では、第Ⅱ②層はみられず、第Ⅱ①層のみを検出した。

第Ⅱ①層－1区南側にみられ、層厚は5～35cmである。

第Ⅲ層：1区南東部にみられ、層厚は3～20cmである。

第Ⅳ層：1区南西部にみられ、層厚は2～8cmである。

第Ⅴ層：1区南半部にみられ、層厚は10～40cmである。本層中からは、弥生土器や土師器の破片が少量出土した。

第Ⅵ層：1区南半部にみられ、層厚は10～30cmである。本層中からは、縄文土器や石器（チップ）が数多く出土した。なお、本層下面にて土坑を検出している。

第Ⅶ層：1区南西部にみられ、層厚は15～30cmである。

第Ⅷ層：1区では、第Ⅷ①層と第Ⅷ②層を検出した。

第Ⅷ①層－本層上面が、調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると、1区北東部が最も高く、標高は35.3mを測り、暫時、北西部に向けて緩傾斜をなし、北西部の標高は35mである。層厚は、20～40cmである。

第Ⅷ②層－1区北壁の一部と東壁にて確認した土層で、本層上面の標高は約35mである。

(2) 遺構・遺物

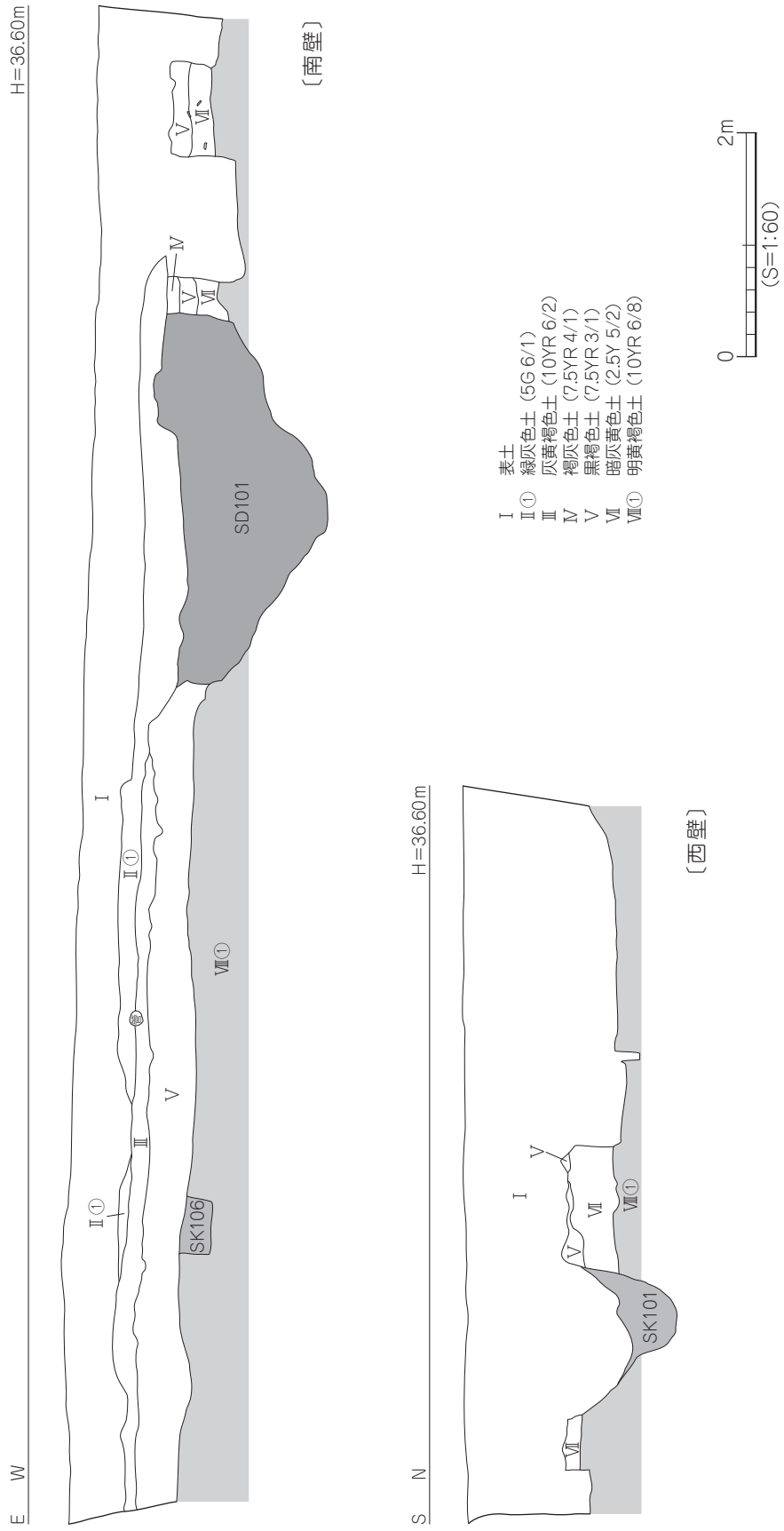
1区では、溝1条と土坑6基を検出した（第8図、図版1・3）。すべて、第Ⅷ①層上面での検出である。遺物は遺構や第Ⅴ層、第Ⅵ層中より縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、玉類が出土している。

1) 溝

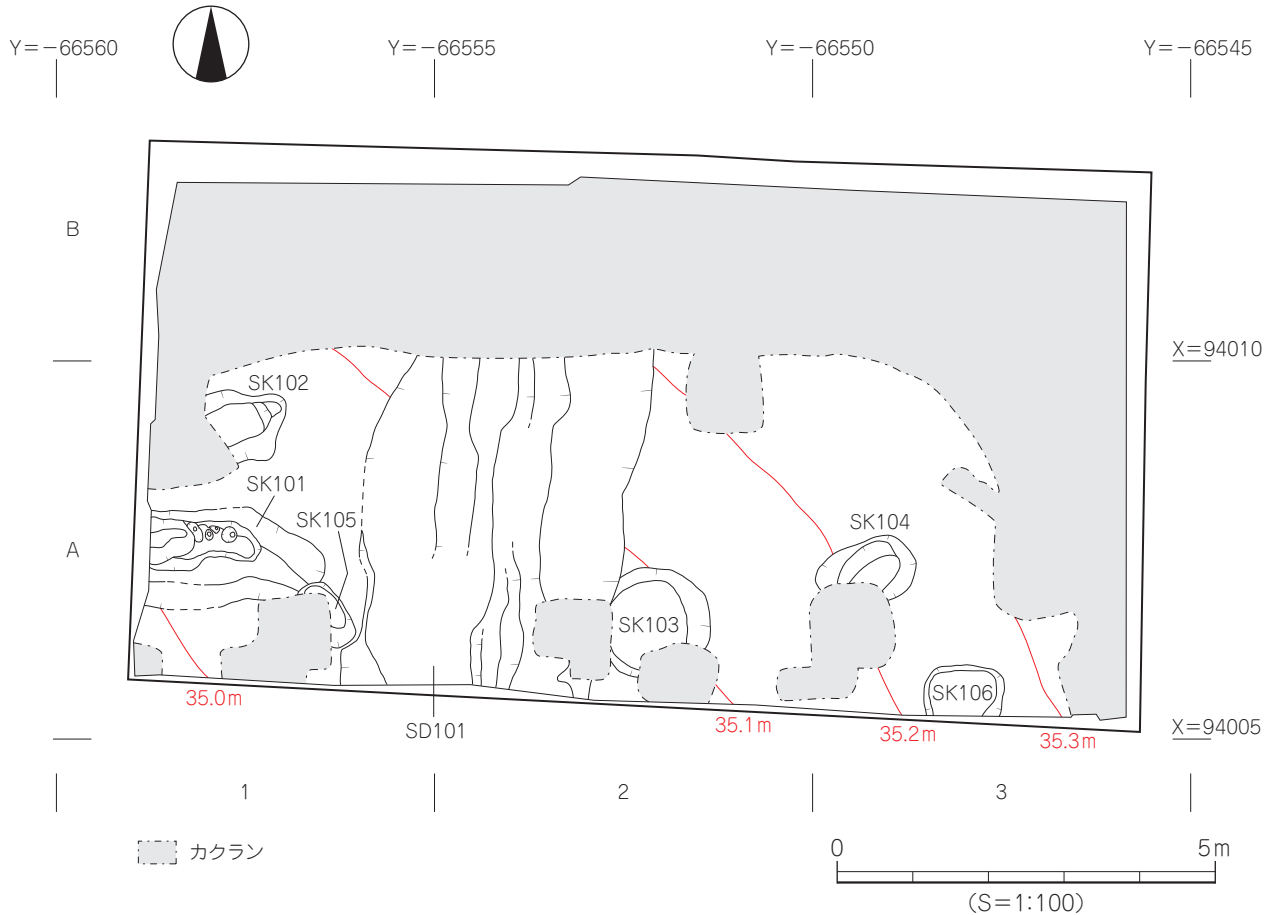
1区では、江戸時代の溝1条を検出した。

SD101（第9図、図版3）

1区中央部A1～B2区にて検出した南北方向の溝で、溝北側及び南東部の一部は攪乱により削平され、南側は調査区外に続く。第Ⅷ①層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第



第7図 1区南壁・西壁土層図



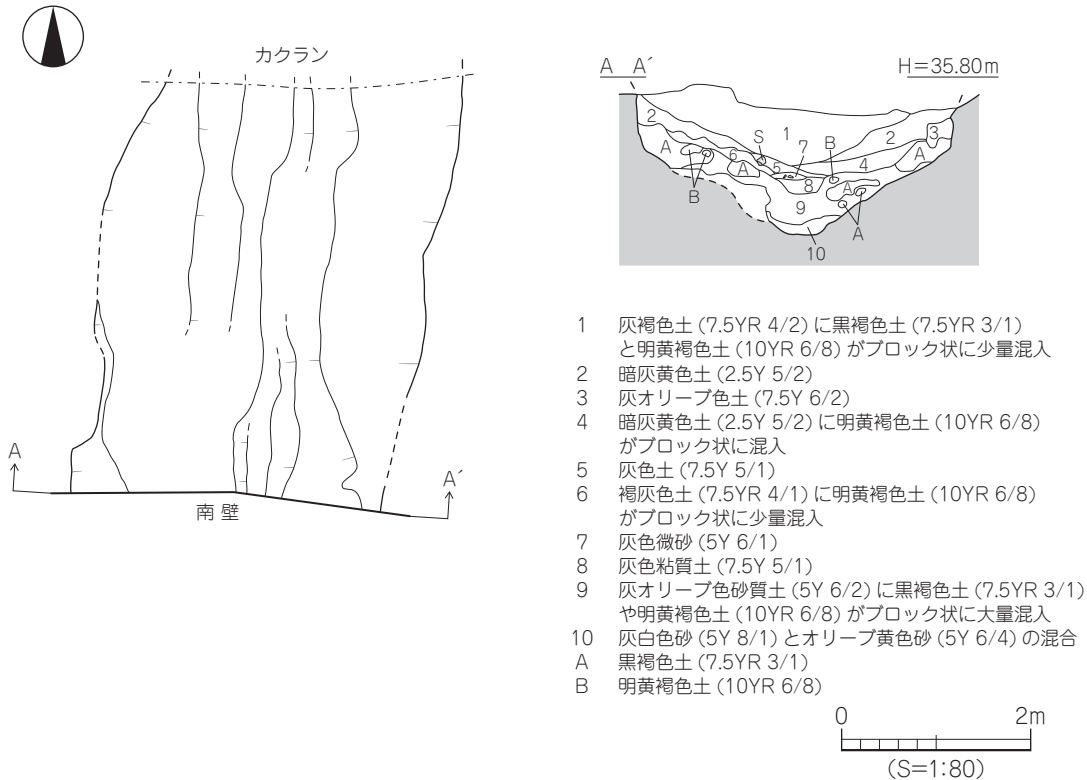
第8図 1区遺構配置図

Ⅲ層上面から掘削された遺構である。溝の規模は最大幅3.40m、深さは検出面下1.30mである。断面形態は逆台形状をなすが、溝中位付近は基底面に向けては段掘り構造となっている。埋土は10種類に分層され、このうち、9層中には黒褐色土や明黄褐色土がブロック状に混入しており、溝掘削時には縄文土器や弥生土器の破片が数多く出土した。なお、最下層の10層中には砂が含まれており、少量の水流があったと考えられる。10層からは、江戸時代の土師器や陶磁器の破片が出土した。陶器には唐津焼や美濃焼などが含まれており、復元すると完形品になるものが数点ある。遺物の出土状況より、溝を埋め戻す際に、これらの遺物を溝内に投棄したものと推測される。

出土遺物（第10～12図、図版14・15）

陶器（1～11）

1・2は唐津焼の碗。1は復元完形品（口縁部の1/2を欠損）で、推定口径16.4cm、底径5.6cm、器高は6.8cmである。口縁部は短く外反し、体部は丸味をもつ。胎土は赤褐色で、灰オリーブ色の釉が施されているが、体部下半部から底部外面、及び高台は無釉である。2は1/3の残存で、推定口径10.4cm、底径5.0cm、器高は6.6cmである。体部は直線的に立ち上がり、高台は三日月状をなす。体部外面には、鉄釉による文様が施されている。胎土はにぶい赤褐色で、灰オリーブ色の釉が内外面に施されているが、体部下半部から底部外面、及び高台は無釉である。3は美濃焼の碗。口縁部の1/8が残存し、底部は完形品で、推定口径10.6cm、底径5.2cm、器高は7.5cmである。体部は直線的に立ち上がり、幅広の高



第9図 SD101 測量図

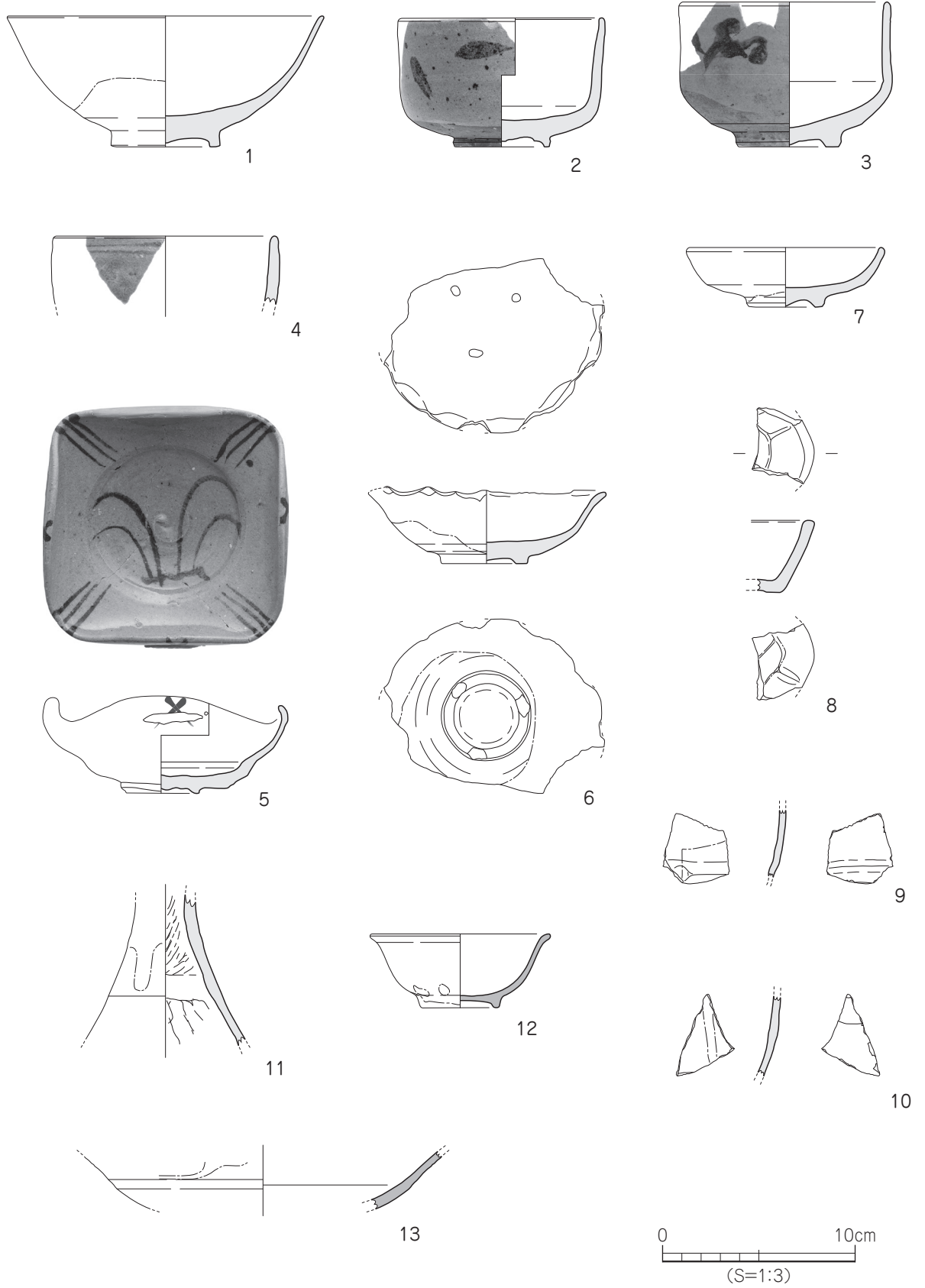
台をもつ。体部外面には、鉄釉による文様が描かれている。胎土はにぶい黄色で、灰白色の釉が施されているが、体部下半部から底部外面と高台は無釉である。4は肥前系の碗。口縁部の小片で、外面に圏線2条が巡る。胎土は灰色で、内外面に緑灰色の釉が施されている。

5～7は唐津焼の皿。5は四方皿。復元完形品で、口径12.6cm、底径3.8cm、器高は5.0cmである。口縁部は上方にひねり出され、低い高台がつく。口縁部外面には「×」印が三箇所描かれ、内面には四隅に三本線と底部中央部に文様が描かれている。胎土はにぶい橙色で、オリーブ灰色の釉が施されているが、底部外面と高台は無釉である。なお、体部外面には重ね焼きによる土器片が付着している。6は輪花皿。復元完形品（口縁部の1/2を欠損）で、口径12.4cm、底径4.4cm、器高は4.0cmである。口縁部は短く外反し、底部内面には重ね焼きによる「とちん」の痕跡が三箇所あり、高台部分には三箇所に小さな凹みが認められる。胎土は灰白色で、暗オリーブ灰色の釉が施されているが、体部下半部から底部外面、及び高台は無釉である。7の体部は内湾し、胎土はにぶい赤褐色である。灰オリーブ色の釉が施されているが、底部外面と高台は無釉である。

8は肥前系の向付。小片で、口縁部内外面に褐色釉、体部には灰色釉が施されているが、底部外面は無釉である。9・10は瓶。小片で、胎土は褐色をなし、外面には鉄釉（暗オリーブ褐色）が施される。なお、内面には褐色釉や灰色釉が部分的に認められる。11は徳利。頸部片で、外面には鉄釉（暗オリーブ褐色）が部分的にみられる。

白磁 (12・13)

12は碗。約1/3の残存で、推定口径9.3cm、底径4.0cm、器高は3.8cmである。口縁部は短く外反し、丸味のある高台が付く。胎土は白色で、内外面全面に透明釉が施されているが、高台畳付部分は無釉



第10図 SD101 出土遺物実測図(1)

である。13は皿。体部片で、透明釉が全面に施される。

土師器 (14・15)

14・15は坏。14の内外面には、溶解物が付着している。15は底部片で、外面には回転糸切り痕が残る(江戸時代)。

須恵器 (16・17)

16は有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は凹み、天井部と口縁部の境界には断面三角形状の稜をもつ(6世紀)。17は高台の付く坏Bで、高台は体底部境界より内側に付き、「ハ」の字状をなす(7世紀後半)。

縄文土器 (18～30)

18・19は深鉢。18は口縁部の小片で、口唇部に刻目を施す。19は肩部片で、外面に斜格子目状の沈線がみられる。20～28は浅鉢。20は胴部が強く張り出し、口縁部は短く外反する。口縁部内面は粘土紐を貼り付け、肥厚する。21は口縁～肩部片。口縁部は強く外反し、肩部に2列の刺突文を施す。外面には、ヨコ方向のケズリを施す。22は口縁部が長く緩やかに外反し、口縁部内面には丸味のある断面三角形状の粘土紐を貼り付ける。23は口縁部が僅かに内湾し、口縁部内面に沈線をもつ。24は口縁部内面がカマボコ状に肥厚し、沈線がみられる。25は三角形状の突起を貼り付け、口縁部内面には沈線をもつ。26～28には、鱗状の突起が貼り付けられている。なお、22～28の内外面には丁寧なミガキを施す。29・30は深鉢の底部。29は上げ底、30は突出部をもつ平底である。溝内から出土した縄文土器は、いずれも晩期中葉の特徴を示す。

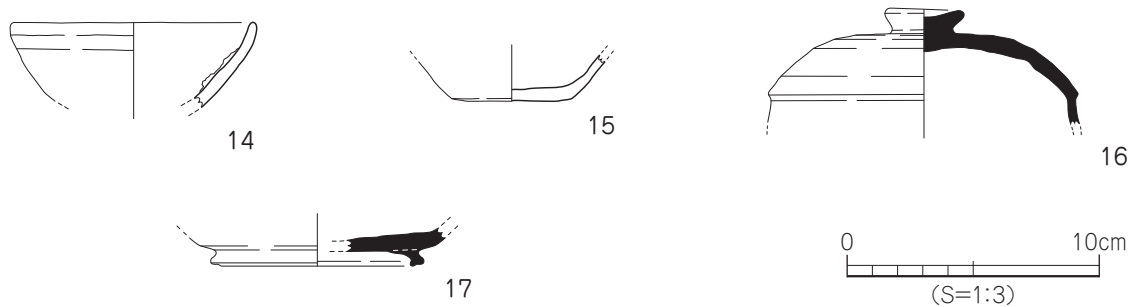
弥生土器 (31)

31は、弥生時代前期末の壺形土器。頸部の小片で、内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。

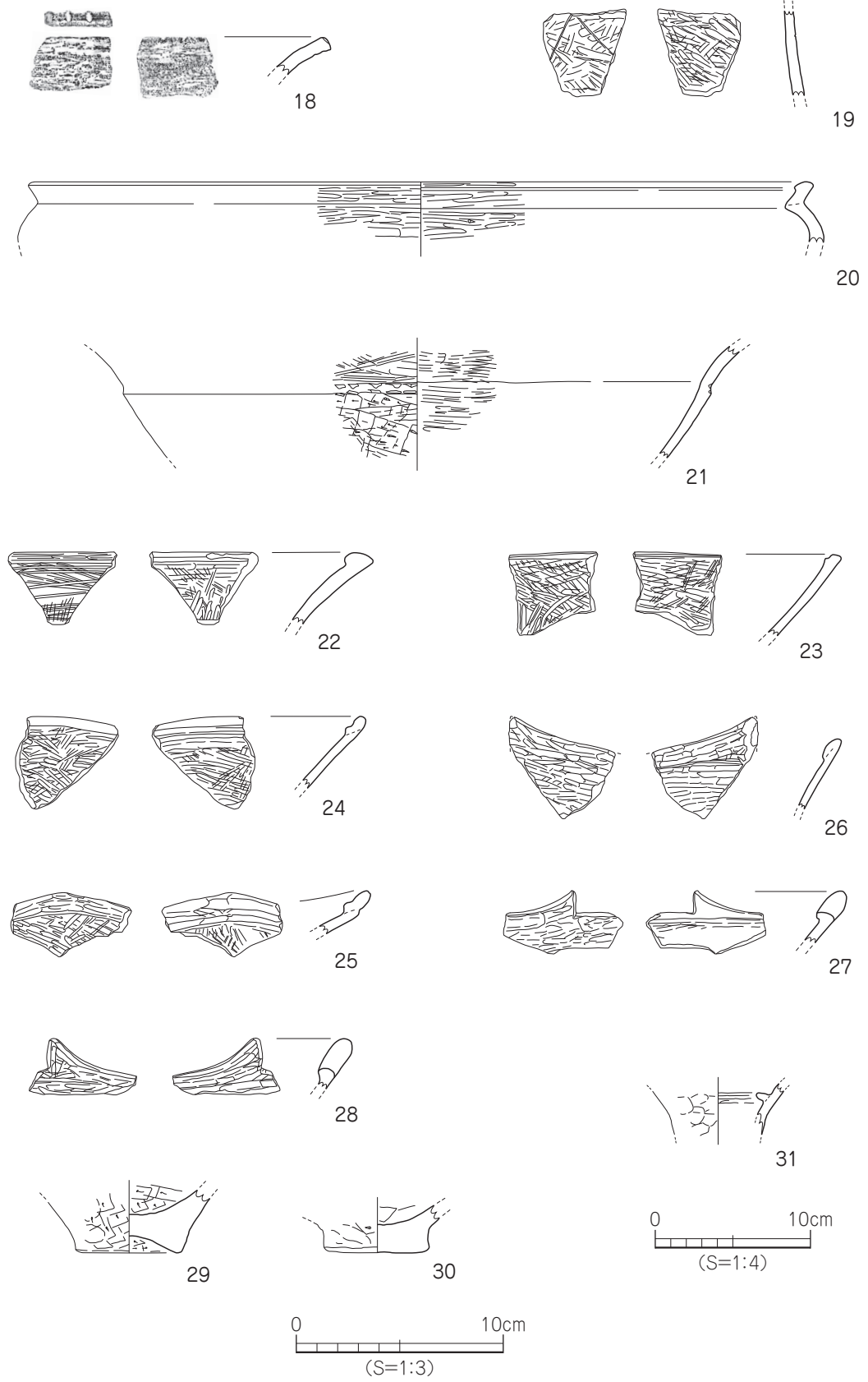
時期：出土した陶磁器には多少の時期差が認められるが、出土した唐津焼の特徴より、SD101の埋没時期は江戸時代前期、17世紀前半頃とする。

2) 土 坑

1区では、6基の土坑を検出した。すべて、第Ⅷ①層上面での検出である。形態の特徴より、SK101は「落とし穴」として利用されたと考えられる土坑である。なお、土坑内からは縄文土器の破片や石器が出土している。



第 11 図 SD101 出土遺物実測図 (2)



第 12 図 SD101 出土遺物実測図 (3)

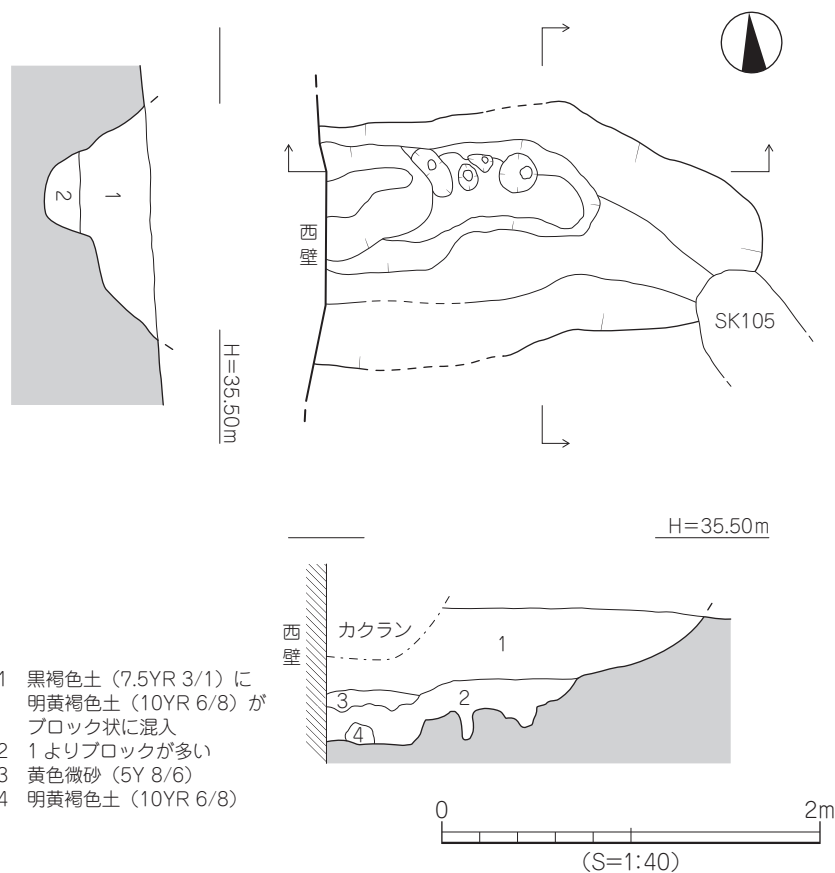
SK101 (第13図、図版4)

1区南西部A1区に位置する土坑で、土坑西側は攪乱により削平されている。第Ⅷ①層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第Ⅶ層上面から掘削された遺構である。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長2.25m、南北長1.28m、深さは検出面下68cmである。断面形態は舟底状をなし、埋土は黒褐色土(7.5YR 3/1)を基調とし、明黄褐色土(10YR 6/8)がブロック状に混入するものである。なお、土坑北西部の埋土下位には厚さ6~8cm程度の黄色微砂(5Y 8/6)が堆積している。土坑基底面には幅40~60cm、深さ30cmほどの凹みがあり、その底面にて大小4基の小穴(径8~10cm、深さ5~8cm)を検出した。これらの穴は杭を打ち込んだ痕跡と思われることから、SK101は動物を捕獲するための「落とし穴」として利用された土坑と推測される。遺物は埋土中より、縄文土器片や石器(チップ・軽石)が出土した。

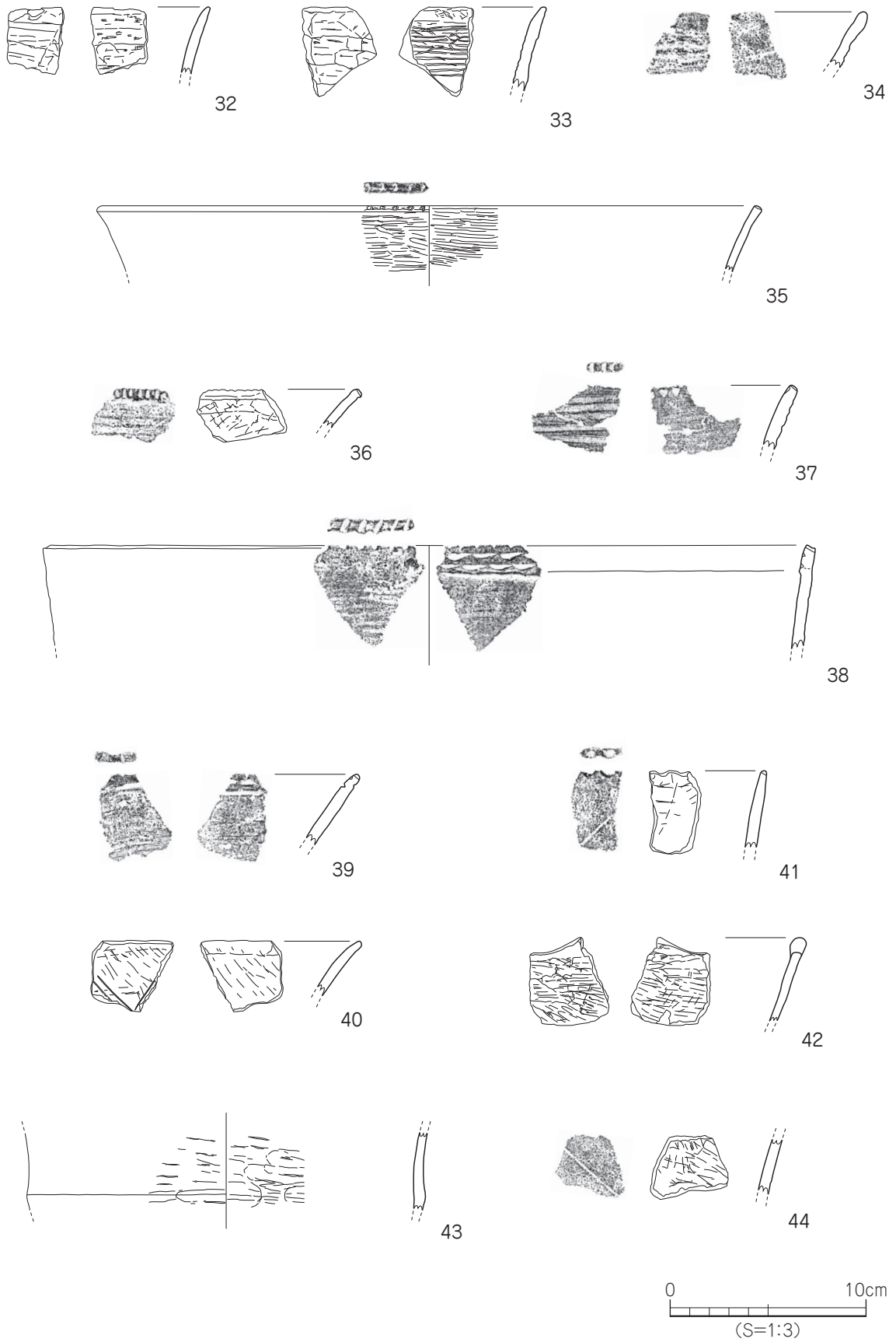
出土遺物 (第14~16図、図版16・17)

縄文土器 (32~73)

32~52は深鉢。32~34の口縁部は緩やかに外反し、35~38は口唇部に刻目をもつ。なお、37の口縁部内面には刺突文1列、38は刺突文2列を施す。39は口縁部外面に沈線1条、内面には沈線1条と刺突文1列がみられる。40・41は外面に斜格子目状の沈線をもち、41は口唇部に刻目を施す。42は口唇部に鱗形の突起を貼り付けている。33の内面、及び36・37の外面には条痕がみられ、39・42の外面はケズリを施す。

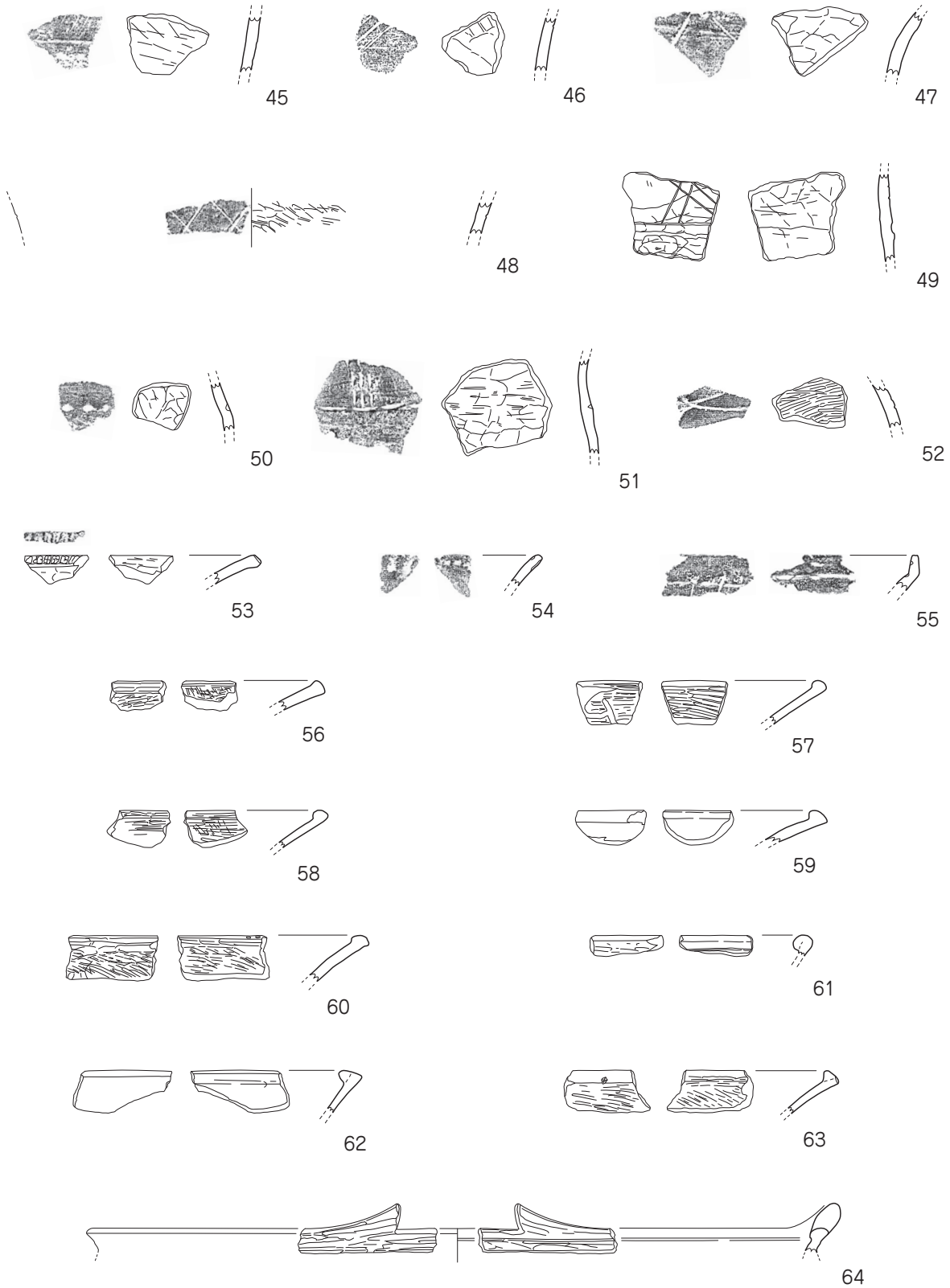


第13図 SK101 測量図



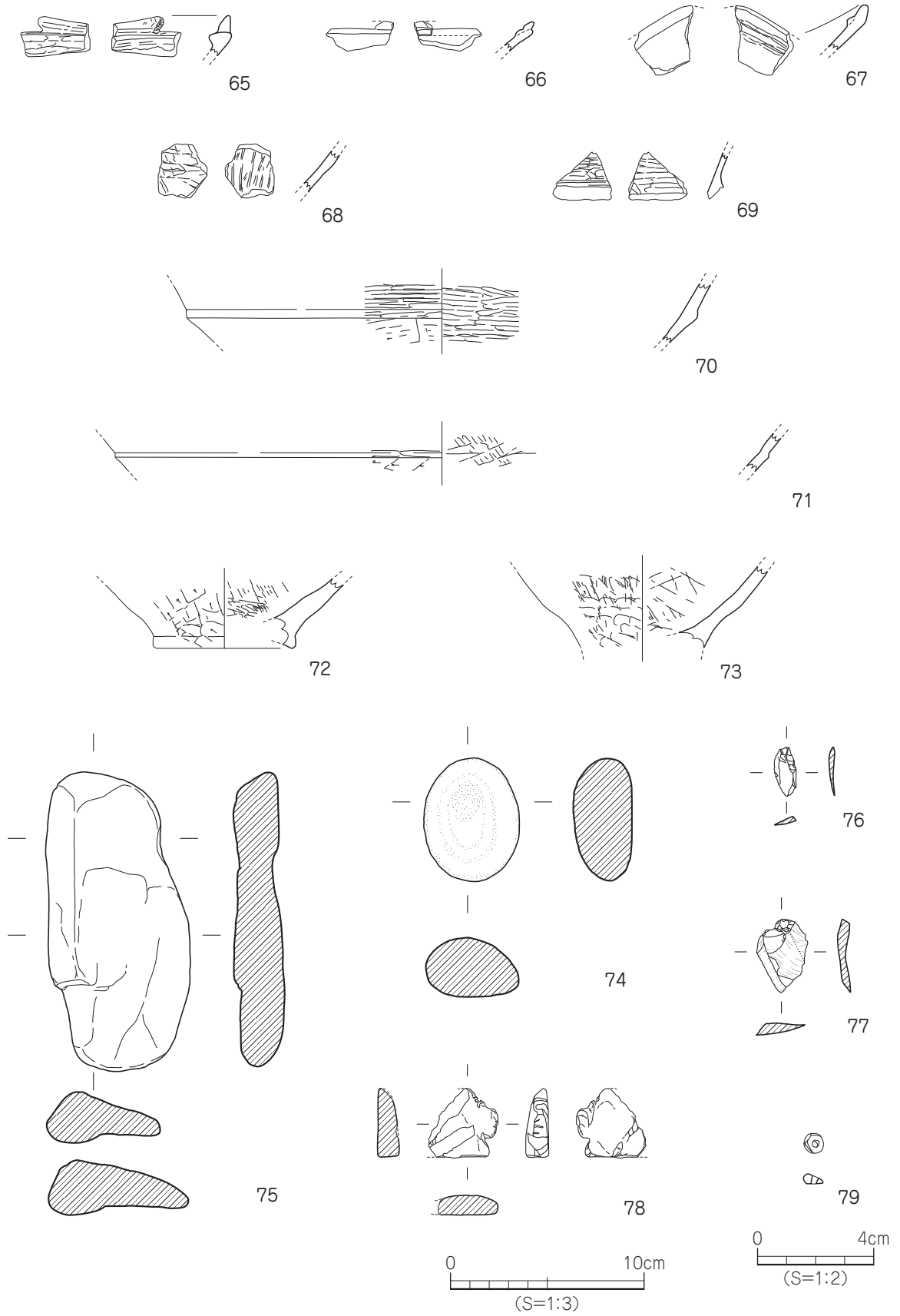
第 14 図 SK101 出土遺物実測図 (1)

調査の概要



0 10cm
(S=1:3)

第 15 図 SK101 出土遺物実測図 (2)



第 16 図 SK101 出土遺物実測図 (3)

43～49は頸部片。44の外面にはナナメ方向の沈線をもち、45はヨコ方向の沈線1条とナナメ方向の平行沈線3条を施す。46には、ヨコ方向の平行沈線3条と斜線文を施す。47には「ハ」の字状の沈線がみられ、48は斜格子目状の沈線をもつ。49はヨコ方向の凹線1条と「X」字状の沈線がみられる。50～52は肩部片。50の外面には刺突文、51はタテ方向の平行沈線3条と刺突文が組み合う。52の外面には、沈線1条がみられる。

53～71は浅鉢。53・54の口縁部は外反し、53の口唇部に刻目、54は口縁部外面に刻目、内面には刺突文がみられる。55の口縁部は短く外反し、内面に刺突文2列を施す。56～60は口縁端部が内方に肥厚し、60の口縁部内面には刺突文がみられる。61～63は口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、63の外表面は刻目をもつ。64・65は口縁部が内方に肥厚し、鱗状の突起が貼り付けられる。66は口縁部内面に扁平な粘土紐を貼り付け、口縁部外面には沈線を施す。67は口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、口縁部は波状をなす。68～71は胴部片。69～71は屈曲部をもち、69の器壁は薄い。72・73は深鉢の底部と思われ、72は上げ底となる。

石器 (74～78)

74は磨石で、石材は安山岩を使用している。75は器種不明品で、石材は砂岩である。76・77はスクレイパーで、姫島産の黒曜石を使用している。78は軽石で、表面に凹打痕が数箇所みられる。

玉類 (79)

79は碧玉製の白玉で、色調は濃緑色である。

時期：出土遺物の特徴より、SK101は縄文時代晩期中葉とする。

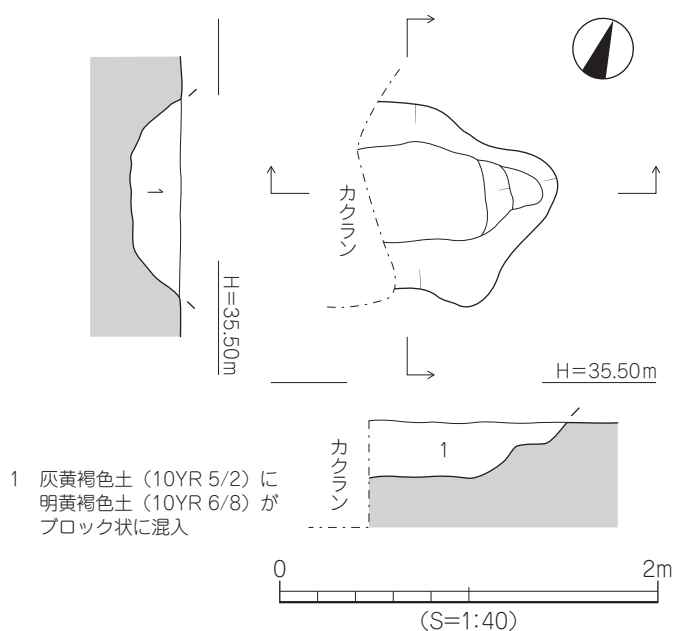
SK102 (第17図)

1区南側A1区に位置する土坑で、土坑西側は攪乱により削平されている。平面形態は不整の楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長1.04m、南北検出長0.96m、深さは検出面下28cmである。断面形態は逆台形状をなすが、土坑北側はテラス状の平坦面をもつ。埋土は灰黄褐色土(10YR 5/2)に明黄褐色土(10YR 6/8)が、ブロック状に混入するものである。土坑基底面には凹凸はみられず、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、縄文土器片やチップが出土した。

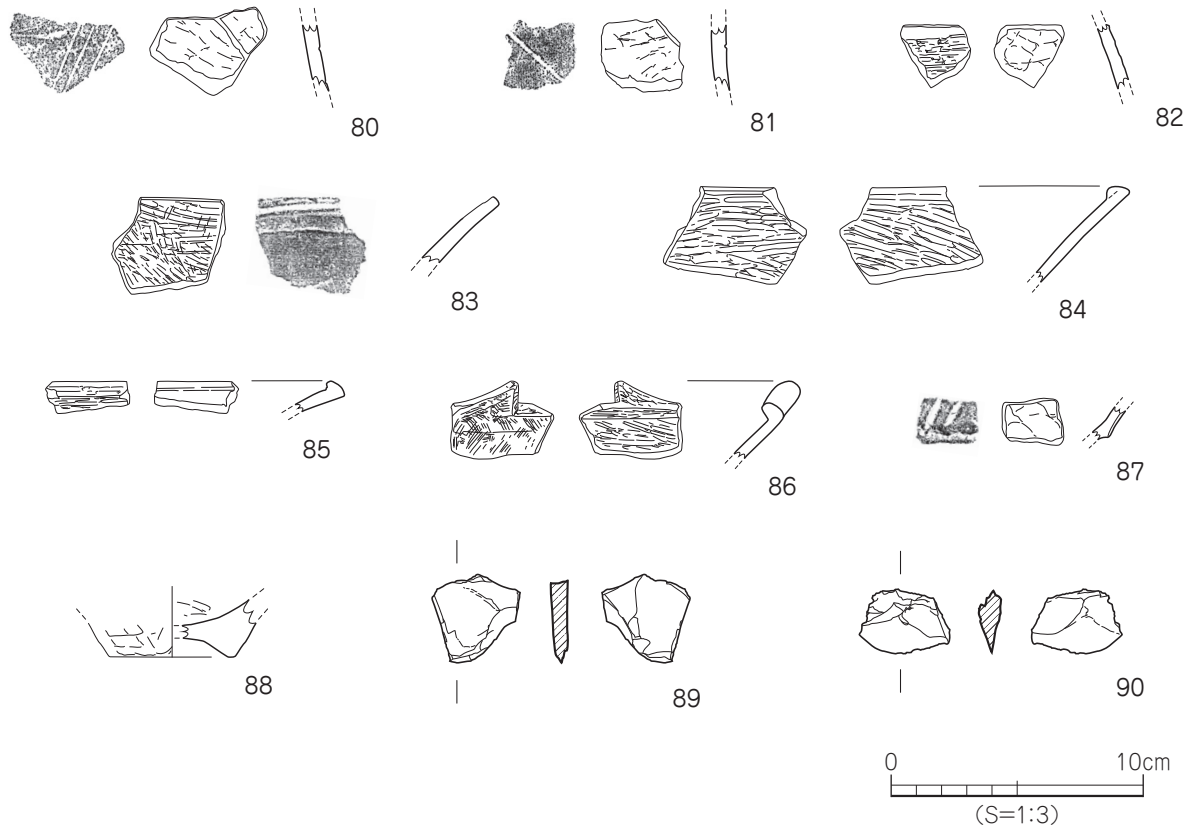
出土遺物 (第18図、図版17)

縄文土器 (80～88)

80～82は深鉢。肩部片で、80の外表面には平行沈線がみられ、81はナナメ方向の沈線をもつ。いずれも、内外面にはナデ調整がみられる。83～87は浅鉢。83～86は口縁部片で、83の内面には沈線1条をもつ。84～86は口縁部内面に断



第17図 SK102 測量図



第18図 SK102 出土遺物実測図

面三角形状の粘土紐を貼り付け、86は口唇部に鱗状突起が貼り付けられる。87は胴部片で、屈曲部上位外面に刻目をもつ。なお、83～86の内外面には丁寧なミガキ調整がみられる。88は深鉢の底部と思われ、上げ底をなす。

石器 (89・90)

89・90はスクレイパーで、石材はサヌカイトである。

時期：出土遺物の特徴より、SK102は縄文時代晩期中葉とする。

SK103 (第19図、図版4)

1区中央部南寄りA2区に位置する土坑で、土坑西壁は溝SD101と攪乱坑に削平され、南東壁は攪乱坑により一部削平されている。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は直径1.31～1.51m、深さは検出面下56cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土(7.5YR 3/1)に明黄褐色土(10YR 6/8)がブロック状に少量混入するものである。土坑基底面には、わずかに凹凸がみられる。遺物は埋土中より、縄文土器片やチップが出土した。

出土遺物 (第20図、図版18)

91～98は深鉢。91～94は口縁部片で、口唇部に刻目もち、93の内面には刺突文1列を施し、94の内外面には沈線がみられる。95～98は頸部片。95の外面には、削り出しによる段がみられる。96の外面にはタテ及びナナメ方向の沈線があり、97は「X」字状の沈線をもつ。98は無文で、外面に条痕がみられる。99～106は浅鉢。99は口縁部が屈曲部で短く外反し、口縁部内面に粘土紐を貼

り付けている。100～104は口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、101の外表面には刻目、102は口唇部に小さな三角形の突起を看取する。103・104は、口唇部に鱗状の突起が貼り付けられている。105は頸～肩部片で、口縁部は外反する。106は胴部片で、屈曲は強い。100～102・104～106の内外面にはミガキ調整、その他はナデ調整で仕上げる。107は底部片で、上げ底をなし、外面にはケズリ調整がみられる。

時期：出土遺物の特徴より、SK103は縄文時代晩期中葉とする。

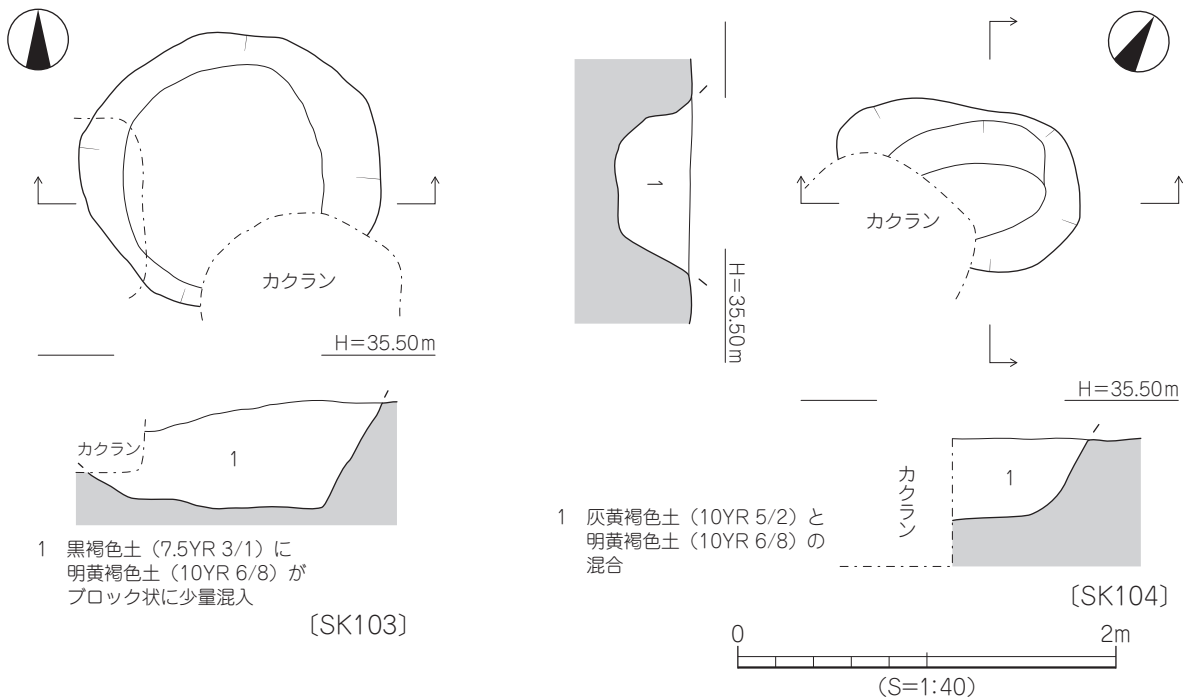
SK104（第19図、図版4）

1区中央部南東寄りA3区に位置する土坑で、土坑南西壁は攪乱坑により削平されている。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長1.24m、南北長0.85m、深さは検出面下42cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は灰黄褐色土（10YR 5/6）と明黄褐色土（10YR 6/8）の混合層である。土坑基底面には凹凸があり、北東部から南西部に向けて緩やかな傾斜をなす。遺物は埋土中より、縄文土器片やチップが出土した。

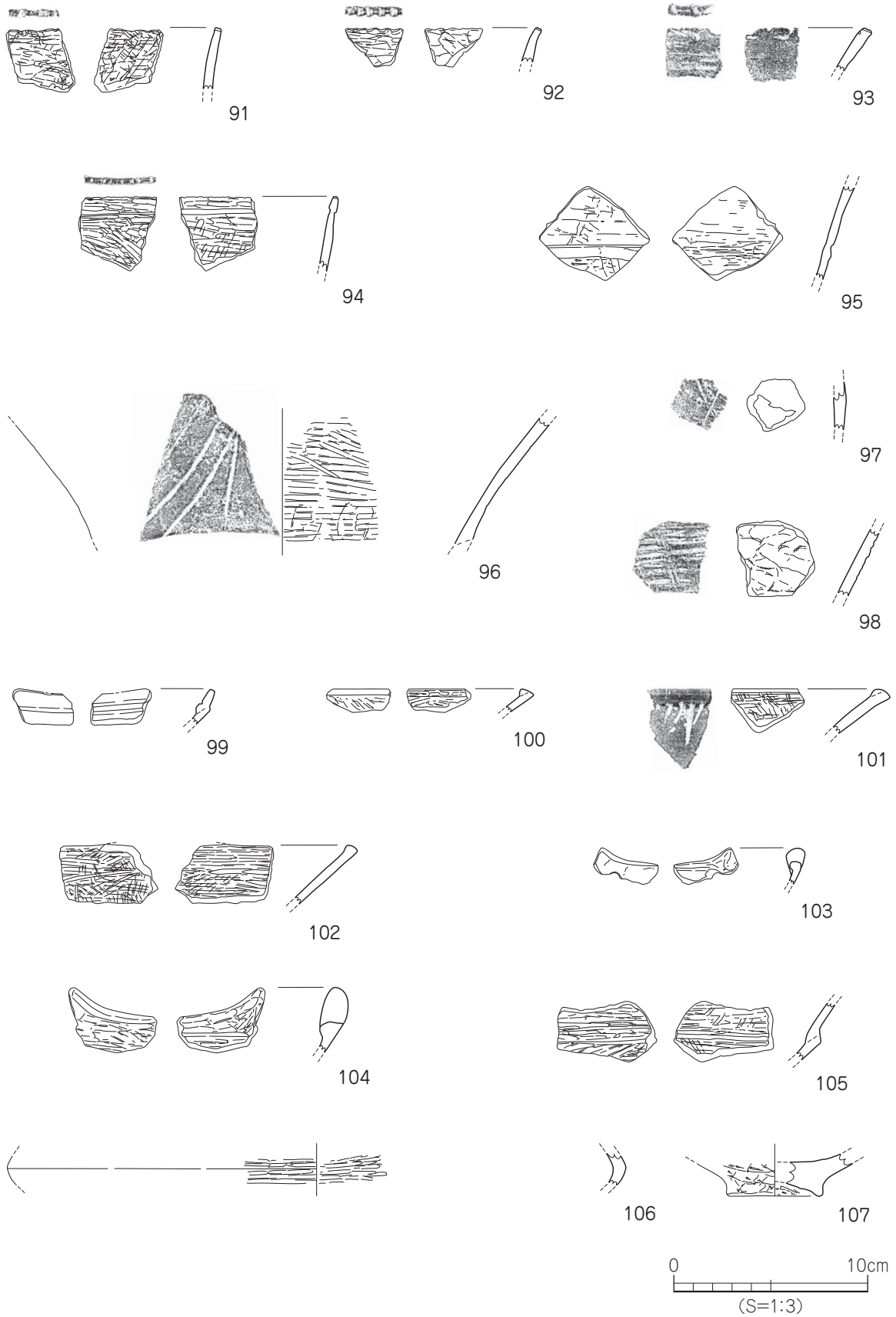
出土遺物（第21図、図版18）

縄文土器（108～115）

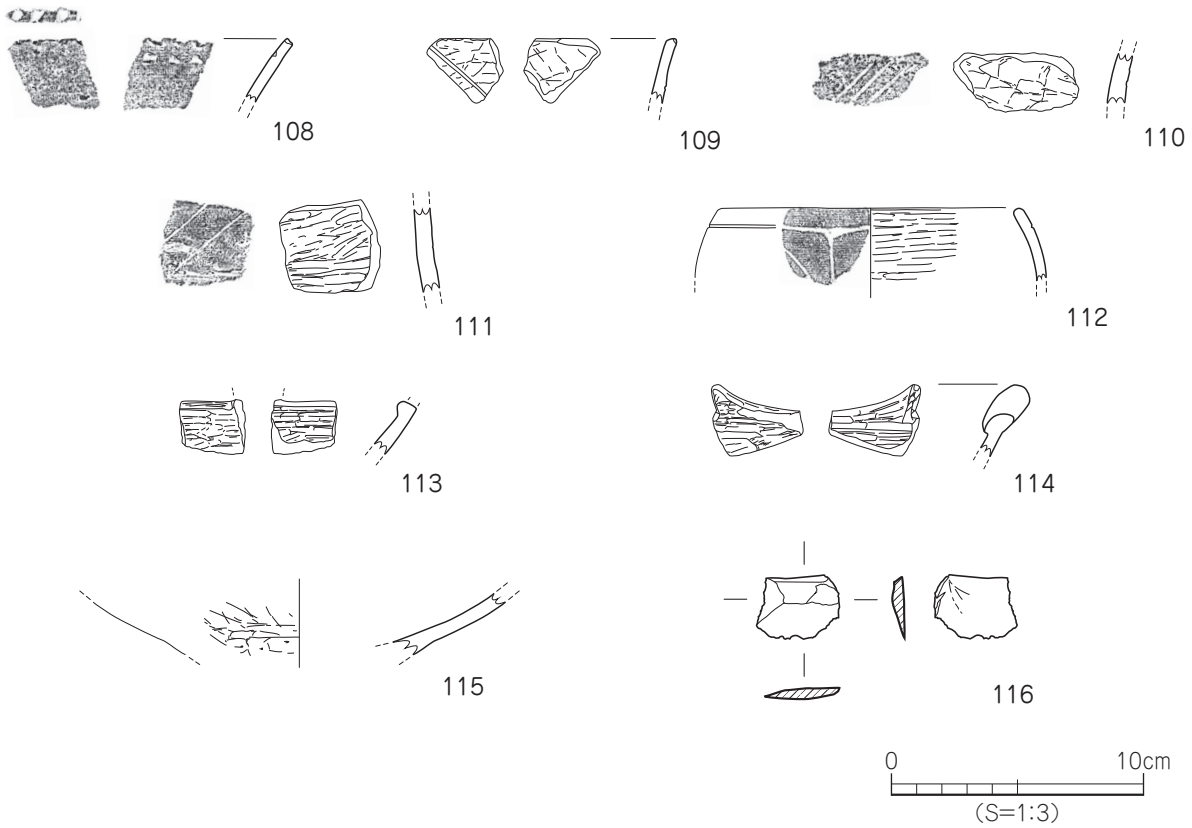
108～111は深鉢。108・109は口縁部片で、口唇部に刻目をもち、108の口縁部内面には刺突文1列を施し、109の外表面には沈線がみられる。110・111は頸部片。110の外表面には格子目状の沈線がみられ、111は斜線文を施す。なお、111の外表面にはヨコ方向のケズリ調整がみられる。112～114は浅鉢。112は推定口径9.8cmで、口縁部は内湾し、口縁部外面には沈線と弧文がみられる。113・114の口縁部内面には丸味のある断面三角形の粘土紐を貼り付け、口唇部に鱗状突起を貼り付ける。115は浅鉢の底部と思われ、外面には少量の赤色顔料が付着する。



第19図 SK103・SK104 測量図



第 20 図 SK103 出土遺物実測図



第 21 図 SK104 出土遺物実測図

石器 (116)

116 はスクレイパーで、石材はサヌカイトである。

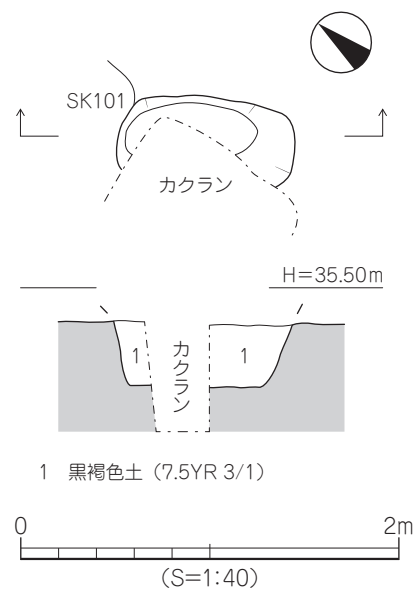
時期：出土遺物の特徴より、SK104 は縄文時代晩期中葉とする。

SK105 (第 22 図)

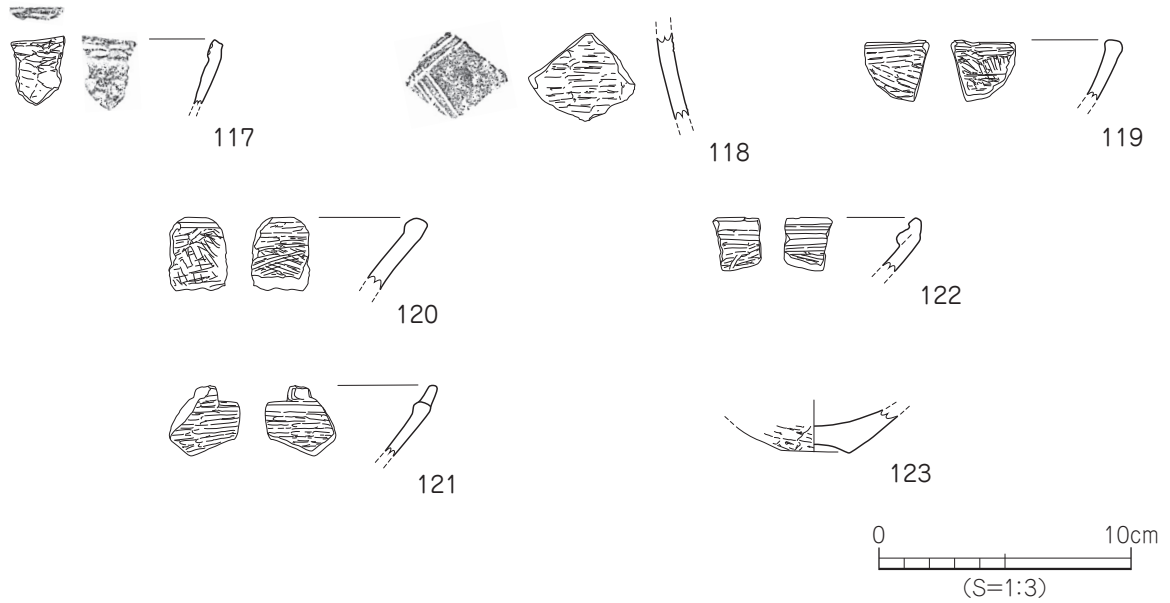
1 区南西部 A1 区に位置する土坑で、土坑西壁の一部は攪乱坑に削平されている。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は南北長 0.94m、東西検出長 0.40 m、深さは検出面下 32cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/1) 単層である。土坑基底面には凹凸がみられず、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、縄文土器片やチップが出土した。

出土遺物 (第 23 図、図版 19)

117・118 は深鉢。117 は口縁部片で、内方に肥厚し、口縁部内面には刺突文 2 列を施す。118 は頸部片で、外面に斜格子目状の沈線がみられる。119～123 は浅鉢。119～121 の口縁部は内方に肥厚し、121 は口唇部に鱗状の突起を貼り付ける。122 は口縁部が短く屈曲し、内面にはコマボコ状の粘土紐を貼り付ける。123 は浅鉢の底部で、上げ



第 22 図 SK105 測量図



第 23 図 SK105 出土遺物実測図

底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、SK105 は縄文時代晩期中葉とする。

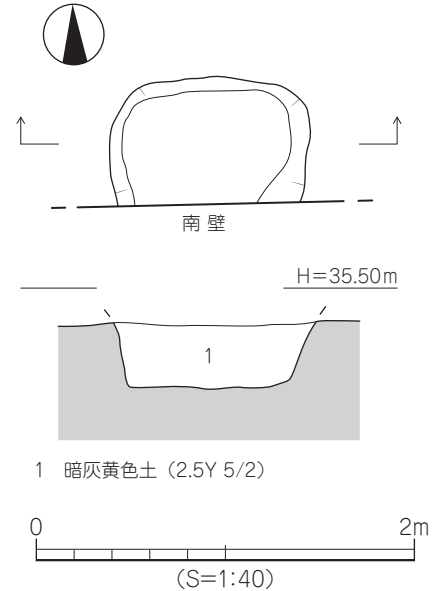
SK106 (第 24 図、図版 4)

1 区南東部 A3 区に位置する土坑で、土坑南側は調査区外に続く。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西長 1.06 m、南北検出長 0.66 m、深さは検出面下 32 cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗灰黄色土 (2.5Y 5/2) 単層である。土坑基底面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、縄文土器片やチップが出土した。

出土遺物 (第 25 図、図版 19)

124・125 は深鉢。頸部片で、外面には格子目状の沈線がみられる。126～129 は浅鉢。126・127 は口縁部片で、内方に肥厚する。128 は胴部片で、屈曲部をもつ。126～128 の内外面には、ヨコ方向の丁寧なミガキ調整がみられる。129 は底部片で、平底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、SK106 は縄文時代晩期中葉とする。

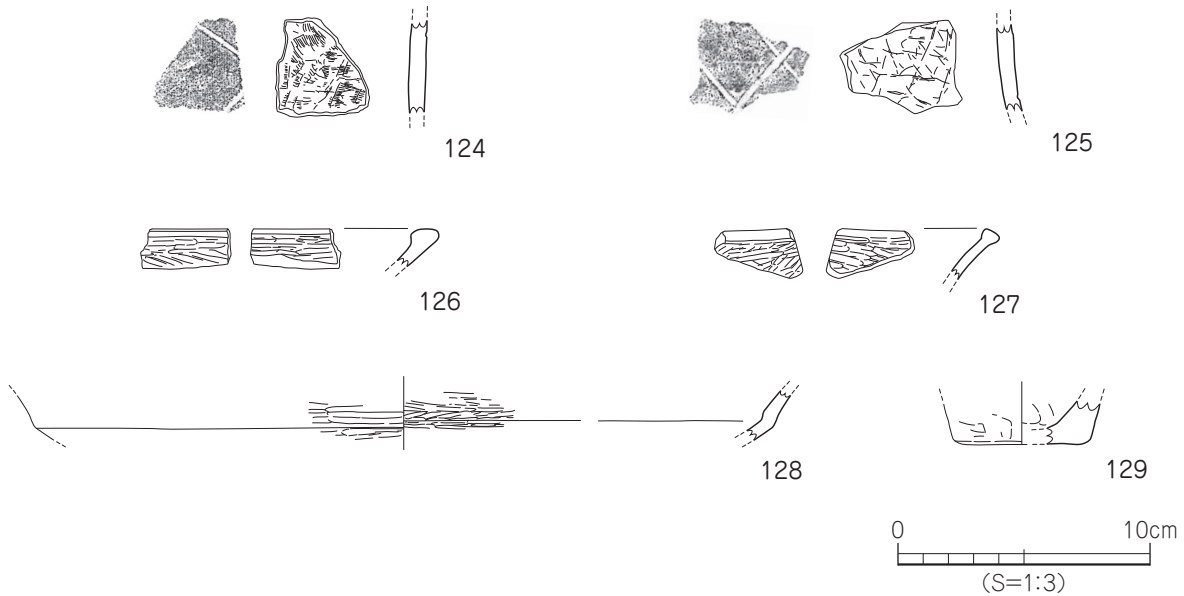


第 24 図 SK106 測量図

3) 包含層出土遺物 (第 26・27 図、図版 19)

縄文土器 (130～141)

130～135 は深鉢。130～132 は口縁部片で、130 の口唇部には刻目、131 は口縁部外面にモチーフ



第 25 図 SK106 出土遺物実測図

状の沈線が描かれ、内面には沈線状の凹みがみられる。なお、口縁部に円孔を穿つ。133・134 は頸部片。133 は斜格子目状に沈線が描かれ、134 は 3 条 1 組の平行沈線にて描かれている。135 は頸～肩部片で、頸部に径 0.5cm 大の孔を穿つ。132・134 の外面にはケズリ、132 の内面は条痕がみられる。136～141 は浅鉢。136～140 の口縁部は外反し、口縁部内面には粘土紐の貼り付けにより肥厚している。なお、138～140 の口唇部には突起が貼り付けられている。141 の口縁部は、上方へ屈曲している。138 の外面はケズリ、その他はミガキを施す。また、内面は 138 がナデ、その他は全てミガキを施す。

弥生土器 (142)

142 は土製の紡錘車。弥生土器の甕形土器または壺形土器の転用品で、側面は打ち欠きにより成形されている。

土師器 (143)

143 は甕。口縁部は内湾し、口縁部中位は凹む（古墳時代後期）。

石器 (144～147)

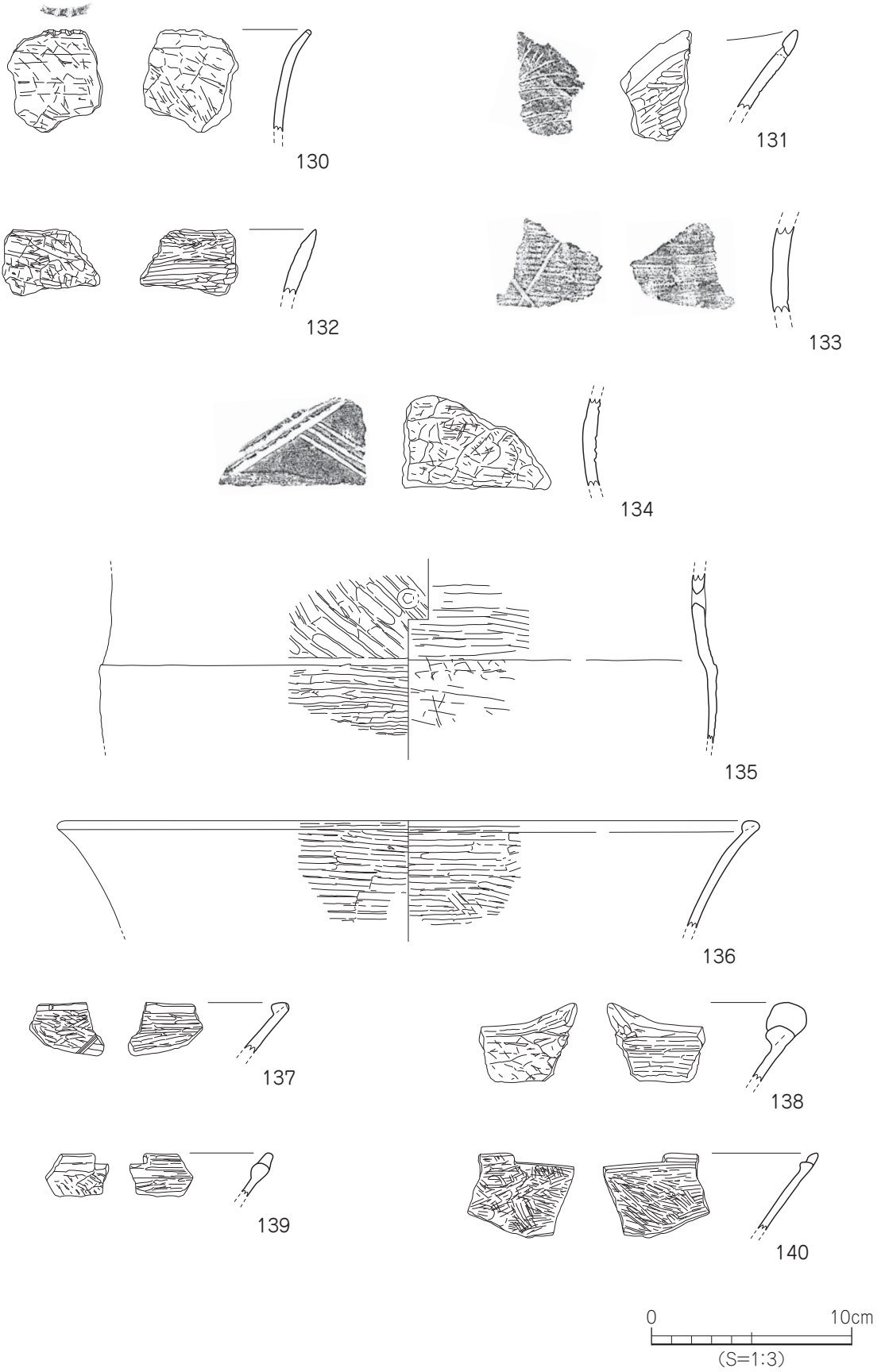
144 は打製の石庖丁。完存品で、石材はサヌカイトである。145 は石鋏で、先端部に掘削痕を残す。石材は、緑色片岩である。146・147 はサヌカイト製の打製石鏃で、先端部を欠損している。

2. 2 区の調査

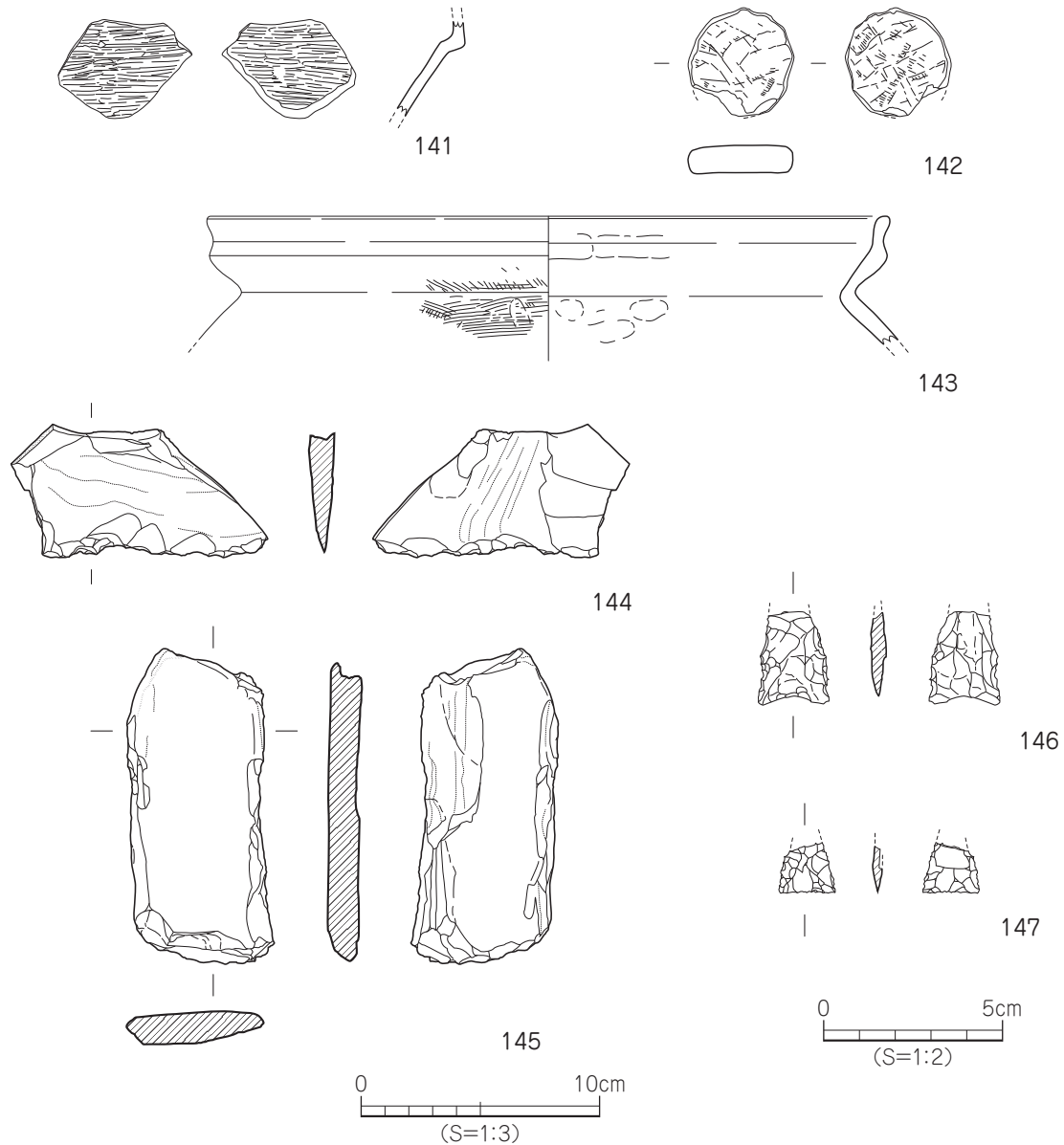
2 区は調査地中央部に位置し、東西長 12.6m、南北長 12.4 m、調査面積は約 156㎡である。2 区中央部及び南西部は近現代の攪乱が著しく、地表下約 1 m の地点まで開発が及んでおり、遺跡が遺存していない。また、2 区南東部には攪乱坑が一部存在している。

(1) 基本層位

2 区では、基本層位の第Ⅱ層、第Ⅲ層を除く土層を検出した（第 28・29 図）。



第 26 図 1 区包含層出土遺物実測図 (1)



第27図 1区包含層出土遺物実測図(2)

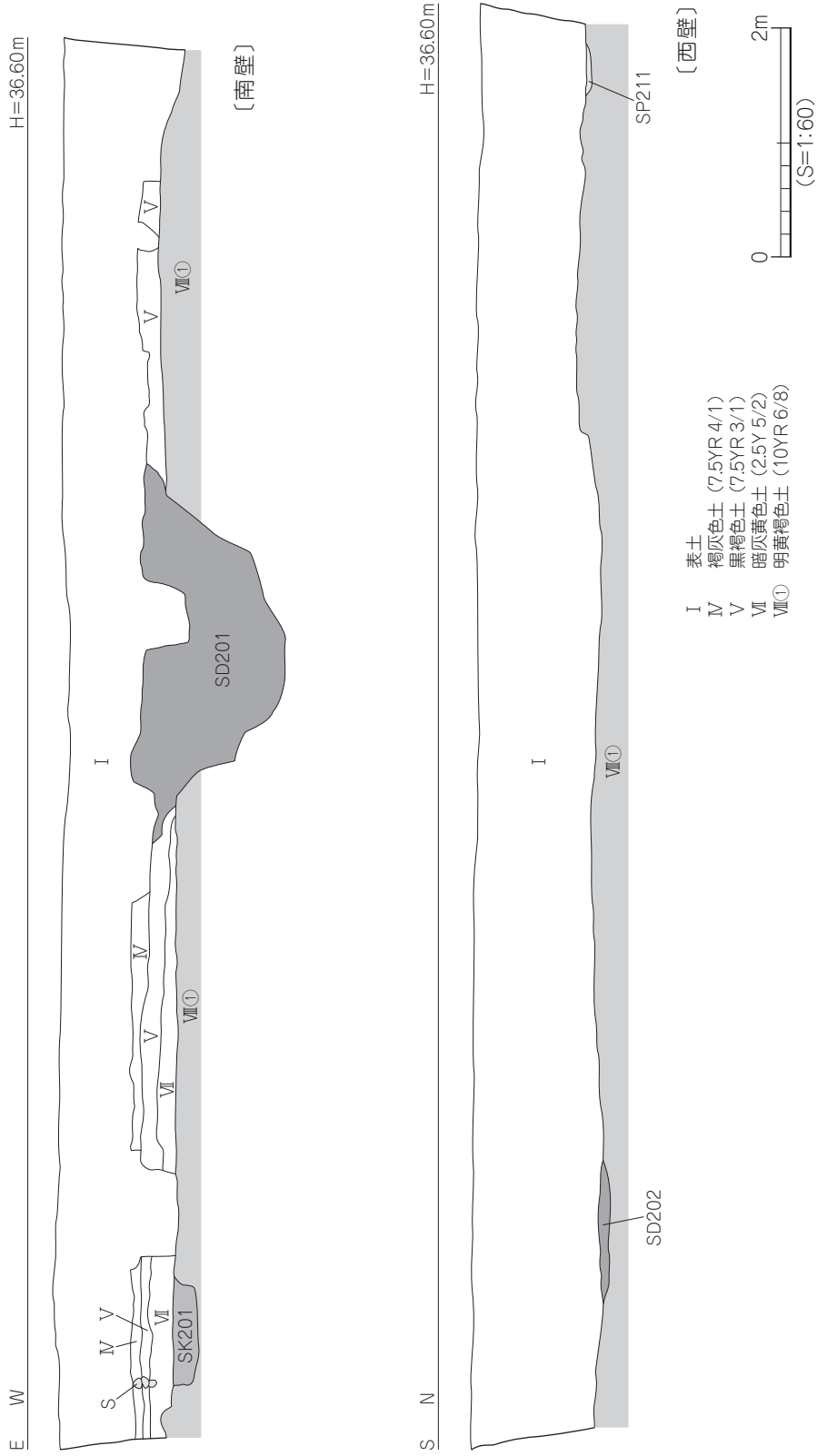
第I層：地表下40～60cmの地点まで開発が行われており、2区中央部や西壁沿いは地表下約1.6mの地点まで開発が及んでいる。

第IV層：2区東半部にみられ、層厚は5～15cmである。本層中からは、古代の土師器や須恵器が出土している。

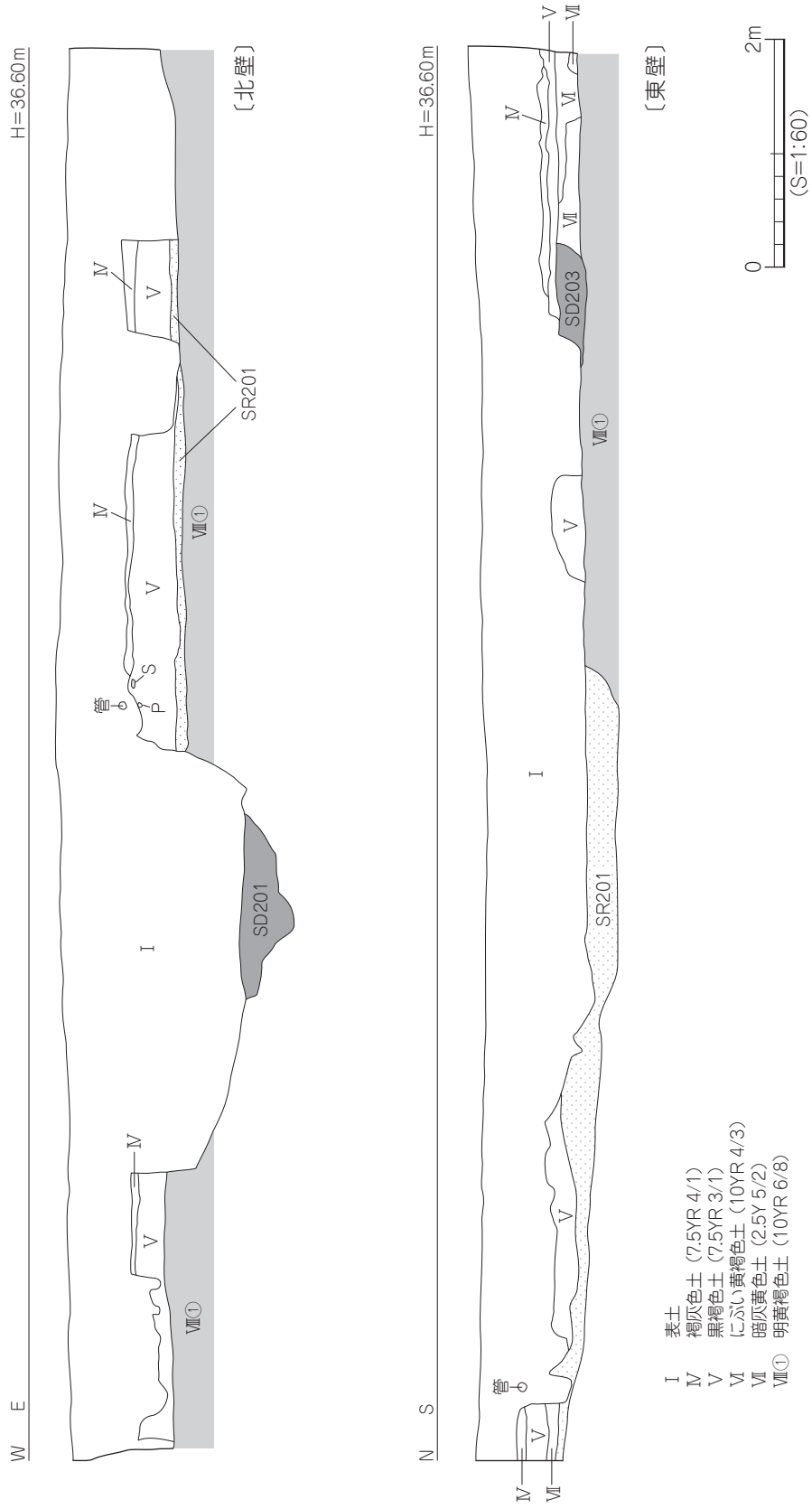
第V層：2区ほぼ全域にみられ、層厚は10～40cmである。本層中からは、弥生土器や土師器の破片が少量出土した。

第VI層：2区南東部にみられ、層厚は3～25cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第VII層：2区東半部にて部分的にみられ、層厚は5～20cmである。本層中からは、少量の縄文土器片が出土した。



第28図 2区南壁・西壁土層図



第 29 図 2 区北壁・東壁土層図

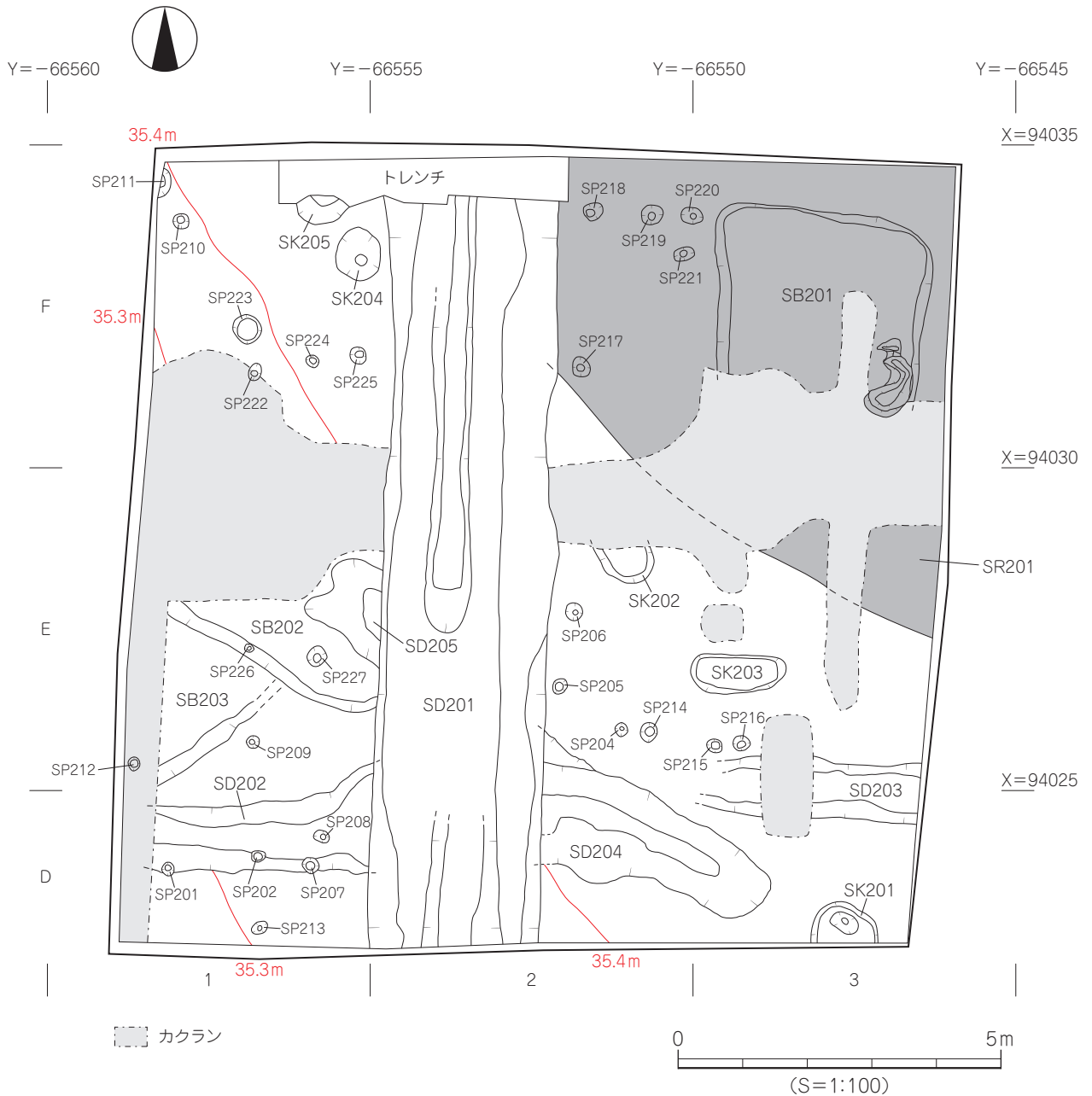
第Ⅷ層：2区では、溝 SD202 掘削時に第Ⅷ②層を一部確認した。

第Ⅷ①層－本層上面は、調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると2区北東部から南西部にかけて緩やかな傾斜をなし、北東部の標高は35.4 m、南西部では35.3 mを測る。

第Ⅷ②層－溝 SD201 掘削時、基底面や壁体下位にて確認した。本層上面の標高は、35 m前後である。

(2) 遺構・遺物

2区では竪穴建物3棟、溝5条、自然流路1条、土坑5基、柱穴26基を検出した(第30図、図版1・5)。



第30図 2区遺構配置図

遺物は遺構や第Ⅳ層、第Ⅴ層中より縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器が出土している。

1) 竪穴建物

2区からは、3棟の竪穴建物（SB201～SB203）を検出した。このうち、SB202とSB203は近現代の攪乱により建物の大半は削平されており、全体像は把握できなかった。

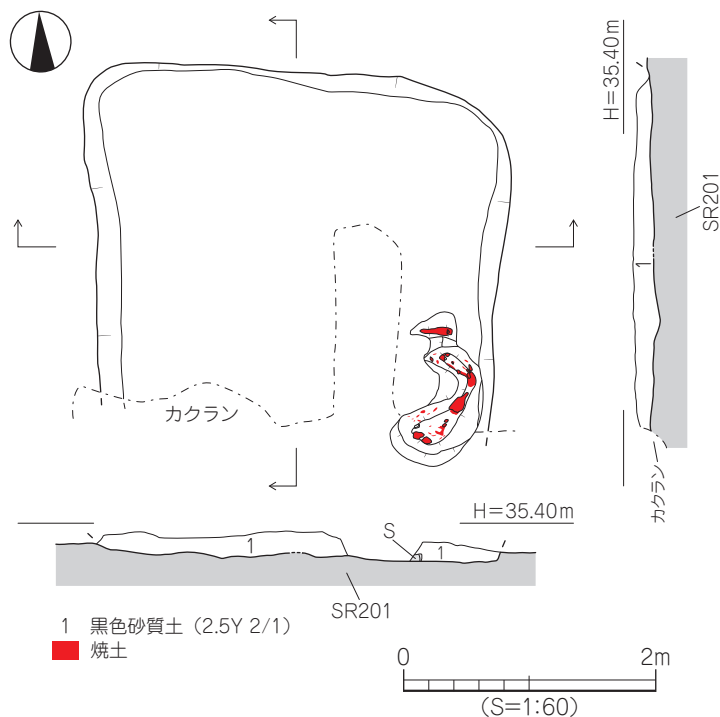
SB201（第31図、図版6）

2区北東部F3区に位置する竪穴建物で、建物南側は攪乱により削平されている。なお、2区北東部には自然流路SR201が存在しており、SB201の検出はSR201上面であり、SB201上面は第Ⅴ層が覆う。平面形態は隅丸方形をなすものと思われ、規模は東西長3.20m、南北検出長2.80m、壁高は18cmである。埋土は、黒色砂質土（2.5Y 2/1）単層である。

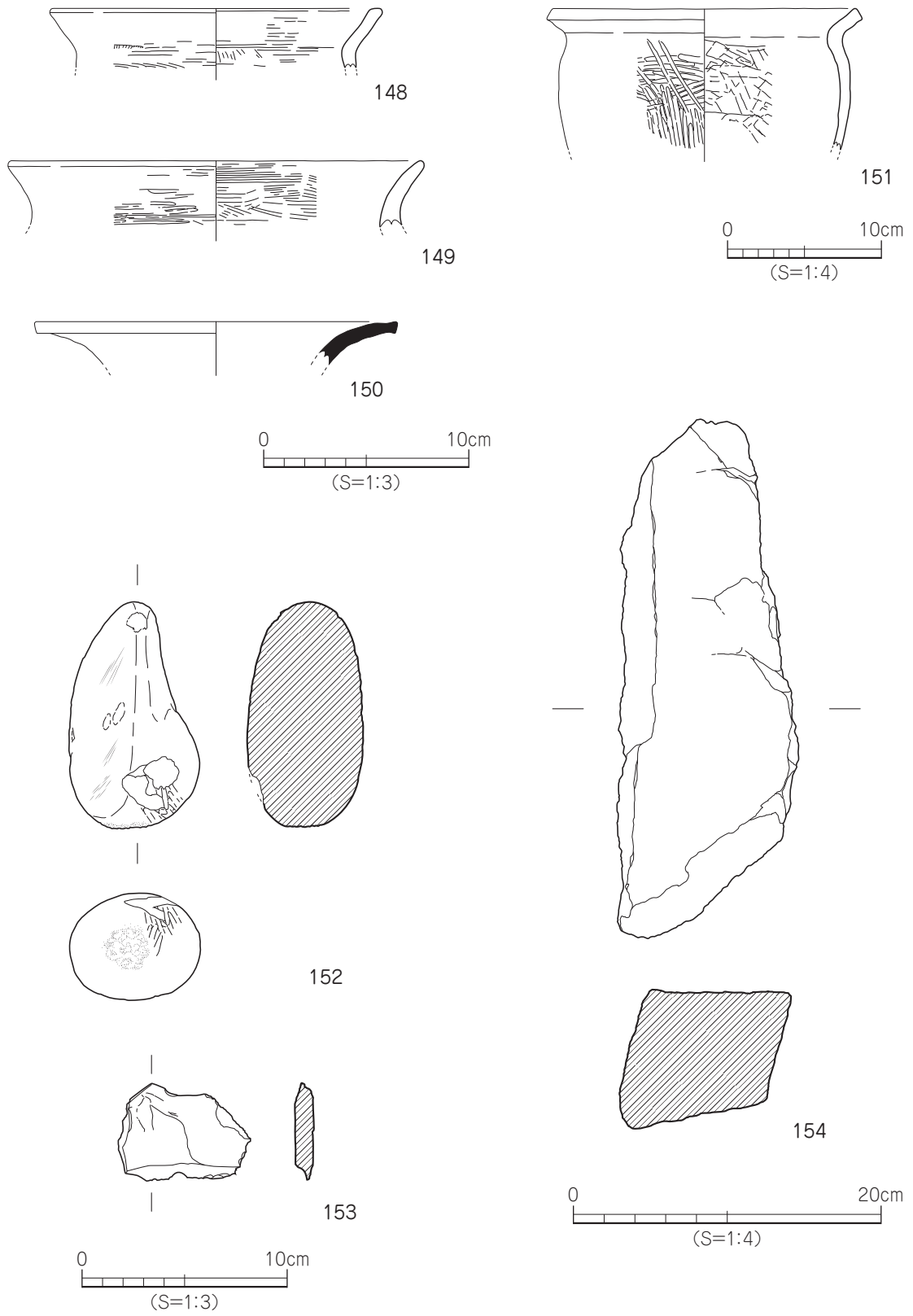
内部施設は、建物南東部の東壁沿いに造り付けのカマドを検出した。平面形態は馬蹄形状をなすが、北袖部分は一部崩落している。カマドは灰褐色土（7.5YR 4/2）を基調として構築され、焼土や炭化物が多く含まれていることから、数回の作り替えが行われたものと推測される。なお、支柱穴や周壁溝は検出されなかった。遺物は埋土中より弥生土器や土師器、須恵器の破片、石器とカマドに伴う袖石が出土した。これらのことから、SB201は人為的に埋め戻された建物と考えられる。

出土遺物（第32図、図版21）

148・149は土師器の甕。148の口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。149の口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。外面にはヘラミガキ後、ナデを加える。150は須恵器の壺。広口壺で、口縁端部は「コ」字状となり、口縁部内面には自然釉が付着する。151は弥生土器。鉢形土器の口縁



第31図 SB201 測量図



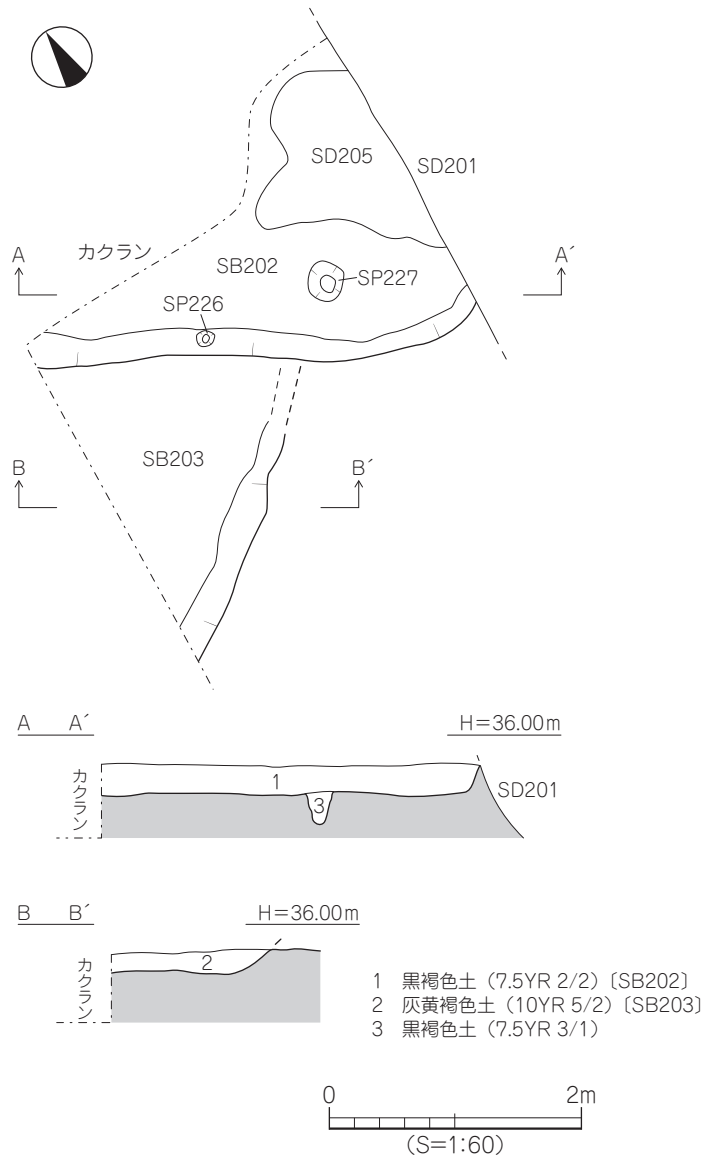
第 32 図 SB201 出土遺物実測図

部片で、口縁端部は「コ」字状をなす。胴部外面には、ヨコ方向のヘラミガキを施す。152は安山岩製の敲石で、重量は445.9gである。153は剥片を利用したスクレイパーで、石材はサヌカイトである。154はカマド内から出土した袖石である。長さ32.5cm、幅11.3cm、厚さ8.7cm、重量は4,850kgである。

時期:出土した土師器、須恵器の特徴より、SB201の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5世紀末とする。

SB202 (第33図、図版7)

2区中央部西寄りE1・2区に位置する竪穴建物で、建物東側は溝SD201に削平され、建物北側は攪乱により削平されている。第Ⅷ①層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。平面形態は隅丸方形をなすものと思われ、規模は東西検出長3.50m、南北検出長2.55m、壁高は20cmである。埋土は、黒褐色土(7.5YR 2/2)単層である。建物底面にて、柱穴2基(SP226・227)を検出した。柱穴の配置状況から、SP227はSB202の支柱穴と考えられる。SP227の平面形態は円形をなし、規模は径30cm、深



第33図 SB202・SB203 測量図

さ 25cmであり、柱穴掘り方埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）である。遺物は埋土中より、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土したほか、台石が出土している。

出土遺物（第 34 図、図版 21）

155～159 は土師器。155 は甕で、口縁部は内湾し、口縁部中位に稜をもつ。156 は椀で、口縁端部は丸く仕上げる。157・158 は高坏の坏部片。158 の坏部下位には、坏脚部接合時に使用された粘土が残る（充填技法）。159 は脚部片で、柱裾部境界内面には明瞭な稜をもつ。柱部内面には、ヨコ方向のヘラケズリを施す。160 は須恵器坏蓋。推定口径 12.2cm で、口縁端部は内傾する。161 は弥生時代後期後半の高坏形土器。脚部片で、半截竹管文を施す。162・163 は縄文時代晚期中葉の土器片。162 は深鉢で、口縁端部に刻目、口縁部外面には斜格子目状の沈線を施す。163 は浅鉢片で、口縁部は内方に肥厚し、胴部に稜をもつ。162・163 共に、内外面には丁寧なミガキを施す。164 は花崗岩製の台石で、重量は 1,122g である。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴より、SB202 の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5 世紀後半とする。

SB203（第 33 図、図版 7）

2 区中央部南西寄り E1 区に位置する竪穴建物で、建物西側は攪乱により削平され、建物北側は SB202 と重複するが先後関係は不明である。第Ⅷ①層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。平面形態は方形状をなすものと思われ、規模は南北検出長 2.50 m、東西検出長 1.45 m、壁高は 16～20cm である。埋土は、灰黄褐色土（10YR 5/2）単層である。建物底面には凹凸があり、建物中央部がやや高くなっている。遺物は埋土中より、弥生土器や土師器、須恵器の小片が少量出土した。

出土遺物（第 34 図）

165 は須恵器。坏蓋の小片で、外面には回転ヘラケズリ調整がみられる。166 は弥生時代後期後半の高坏形土器。脚部片で、刺突文 2 列と刺突文間に刻目を施す。なお、円孔を看守する。

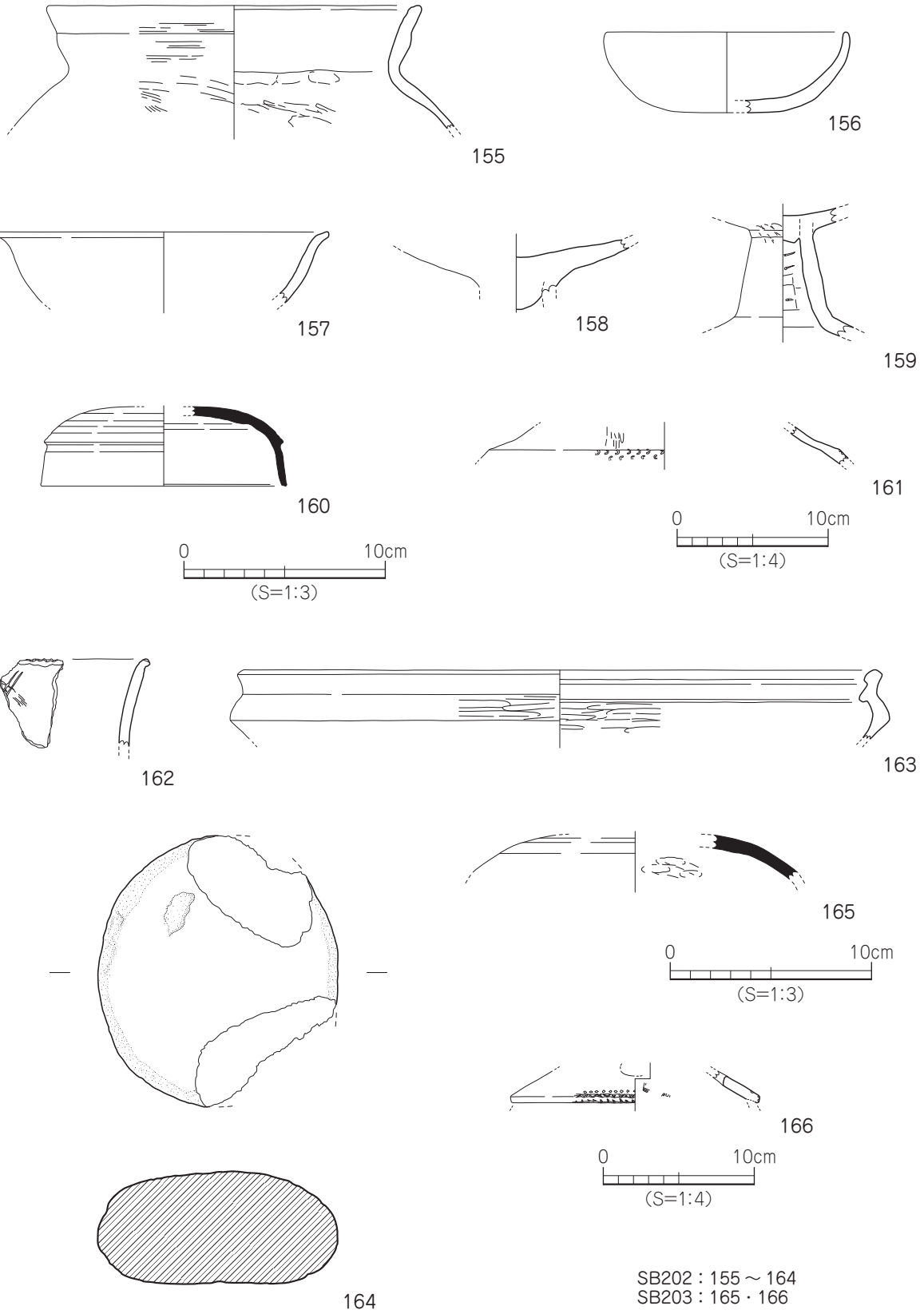
時期：出土した須恵器の特徴より、SB203 の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5 世紀末とする。

2) 溝

2 区では、溝 5 条を検出した。このうち、配置や断面形態、出土遺物等より、SD201 は 1 区検出の溝 SD101 と同一の溝である。また、SD204 と SD205 は同一溝と考えられる。

SD201（第 35 図、図版 7・8）

2 区中央部 D2～F2 区に位置する南北方向の溝で、ほぼ真北を指向している。第Ⅷ①層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第Ⅴ層上面から掘削された遺構である。溝の規模は最大幅 2.76 m、検出長 11.80 m、深さは検出面下 1.30 m である。断面形態は逆台形状をなすが、壁体上位は緩やかに立ち上がり、壁体下部は段掘り構造となっている。溝基底面中央部にて幅 50～60cm、深さ 8～10cm を測る溝状の掘り込みを検出した。溝の埋土は 10 種類に分層でき、9 層中には第Ⅴ層や第Ⅷ①層がブロック状に混入し、縄文土器や弥生土器の破片が出土した。また、最下層の 10 層中には砂が少量含まれており、少量の水流があったことが伺われる。10 層からは、江戸時代の土師器や陶磁器の破片が数多く出土した。この中には、復元すると完形品になる陶磁器が数点ある。遺物の出土状況より、埋め戻しの際、これらの遺物を溝内へ一括投棄したものと推測される。

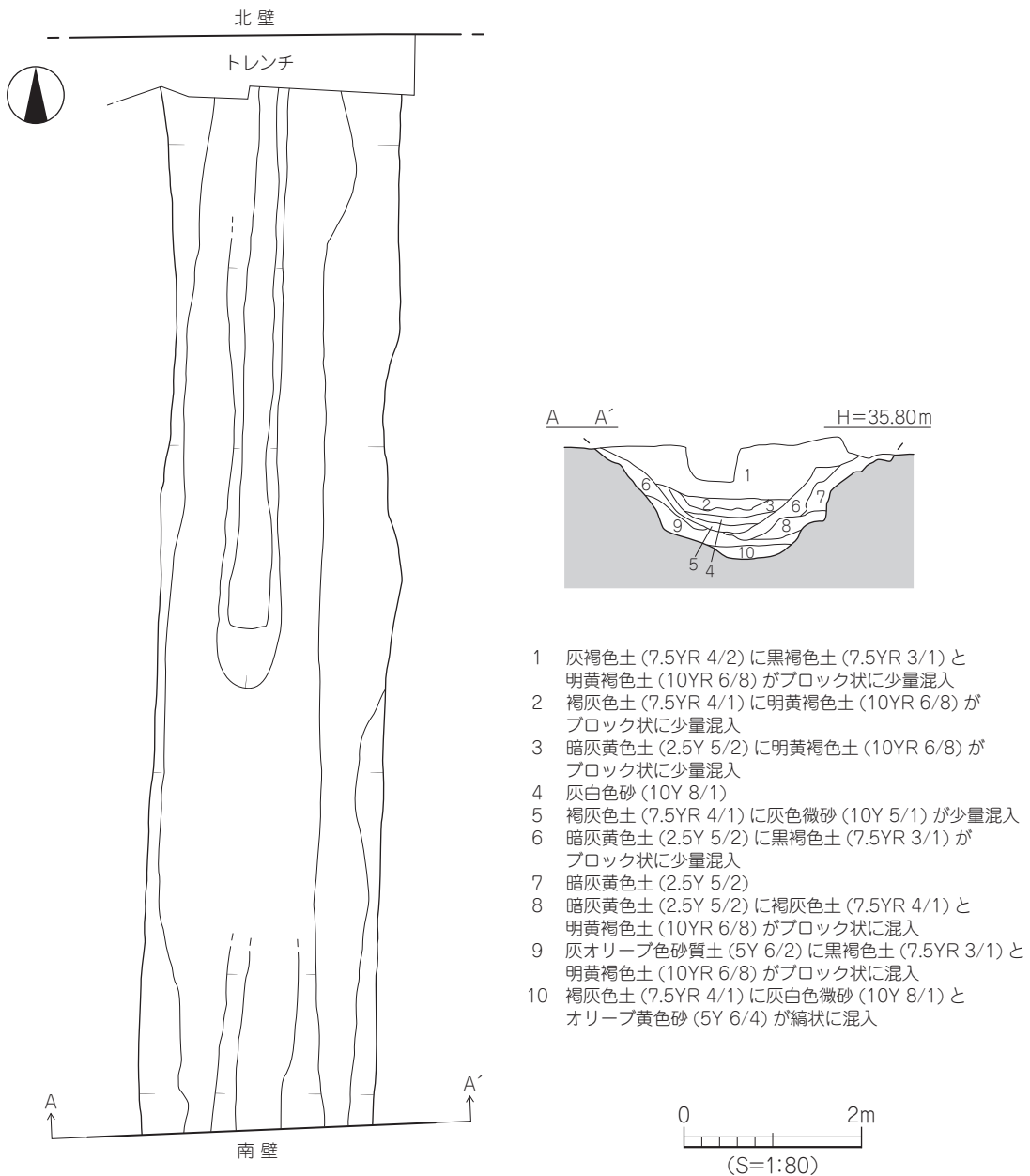


第 34 図 SB202・SB203 出土遺物実測図

出土遺物 (第 36・37 図、図版 20・21)

陶器 (167～192)

167～170は碗。167・168・170は唐津焼。167は復元完形品(口縁部の1/5を欠損)で、口径10.9cm、底径5.1cm、器高6.8cmである。体部は直線的に立ち上がり、足高の高台が付く。胎土はにぶい赤褐色をなし、外面に灰オリーブ色釉、内面に暗オリーブ色釉が施されているが、体部下半と底部外面及び高台部分は無釉である。168は1/2の残存で、推定口径9.5cm、底径3.4cm、器高5.5cmである。体部は直線的に立ち上がり、小さな高台が付く。胎土はにぶい赤褐色をなし、灰オリーブ色釉が施されるが、体部下半部から底部外面と高台は無釉である。169は口縁部の小片で、胎土は灰色をなし、灰オリー



第 35 図 SD201 測量図

ブ色の釉が全面に施される。170は底部1/3の残存で、胎土はにぶい赤褐色をなし、灰オリーブ色の釉が施されるが、体部下半部から底部外面と高台は無釉である。

171～185は皿。171～173・175は唐津焼。171は復元完形品（口縁部の1/3を欠損）で、推定口径14.5cm、底径5.1cm、器高4.0cmである。口縁部は外反し、胎土は灰黄色である。内外面には灰白色の釉が施されるが、体部下半部から底部外面と高台は無釉である。172は1/3の残存で、推定口径13.0cm、推定底径4.5cm、器高3.6cmである。体部上位に稜をもち、口縁部は直立する。胎土はにぶい赤褐色で、内外面に灰白色釉が施される。173は1/4の残存で、推定口径12.9cm、底径5.0cm、器高4.7cmである。口縁部は指頭押圧により波状をなす。胎土はにぶい赤褐色で、灰赤色の釉が施されるが、体部下半部から底部外面と高台は無釉である。174～179は輪花皿。174は1/2の残存で、推定口径11.8cm、底径5.2cm、器高3.2cmである。口縁部は外反し、胎土はにぶい橙色をなす。灰オリーブ色釉が、全面に施されている。175は1/3の残存で、推定口径11.7cm、底径4.9cm、器高3.9cmである。胎土はにぶい橙色をなし、灰オリーブ色の釉が施される。なお、174・175は、体部下半部から底部外面と高台は無釉である。176～179は小片で、口縁部は外反する。178の体部外面には、重ね焼きの際に別個体の一部が付着している。胎土は176がにぶい橙色、177～179は灰色で、176は黄褐色、177・178は灰オリーブ色、179は浅黄色の釉が内外面に施される。180は志野焼の菊形皿。1/2の残存で、推定口径11.4cm、推定底径6.2cm、器高2.2cmである。丸味のある低い高台をもち、底部外面には重ね焼きの痕跡が二箇所みられる。胎土は灰白色で、灰白色の釉が施されるが、高台畳付部分は無釉である。181は小片で、体部中位に稜をもち、口縁部は外反する。胎土は灰色で、内外面に灰色釉が施される。182・183は大型品。小片で、182の口縁部は僅かに内湾する。182・183の胎土は灰色で、182は明オリーブ灰色釉、183は灰色釉が施されるが、183の外面には一部、褐色釉がみられる。184・185は底部片。184の内面には、重ね焼きの痕跡が二箇所みられる。胎土は浅黄色で、にぶい黄色釉が施されているが、体部下半部から底部外面と高台は無釉である。185は小さな高台をもち、胎土は浅黄色で、内面のみに灰色釉がみられる。186・187は土瓶。186は小片で、口縁部は短く外反し、肩部に段をもつ。胎土は浅黄色で、オリーブ灰色釉が施されるが、口唇部の内外面は無釉である。187は底部片。1/4の残存で、上げ底をなす。胎土は灰色で、内面のみにオリーブ黄色釉がみられる。188～191は壺。188は小片で、肩部に屈曲部をもつ。胎土はにぶい橙色で、鉄釉（暗オリーブ褐色）が施されているが、内面は部分的にみられる。189は頸部片で、胎土は青灰色をなし、鉄釉（暗オリーブ褐色）が外面全面と内面の一部にみられる。190は胴～底部片で、やや上げ底をなす。胎土はにぶい橙色で、体部上半部のみに灰色釉が施される。191は底部の小片で、上げ底をなす。胎土は灰色で、内面には灰オリーブ色釉が部分的にみられる。

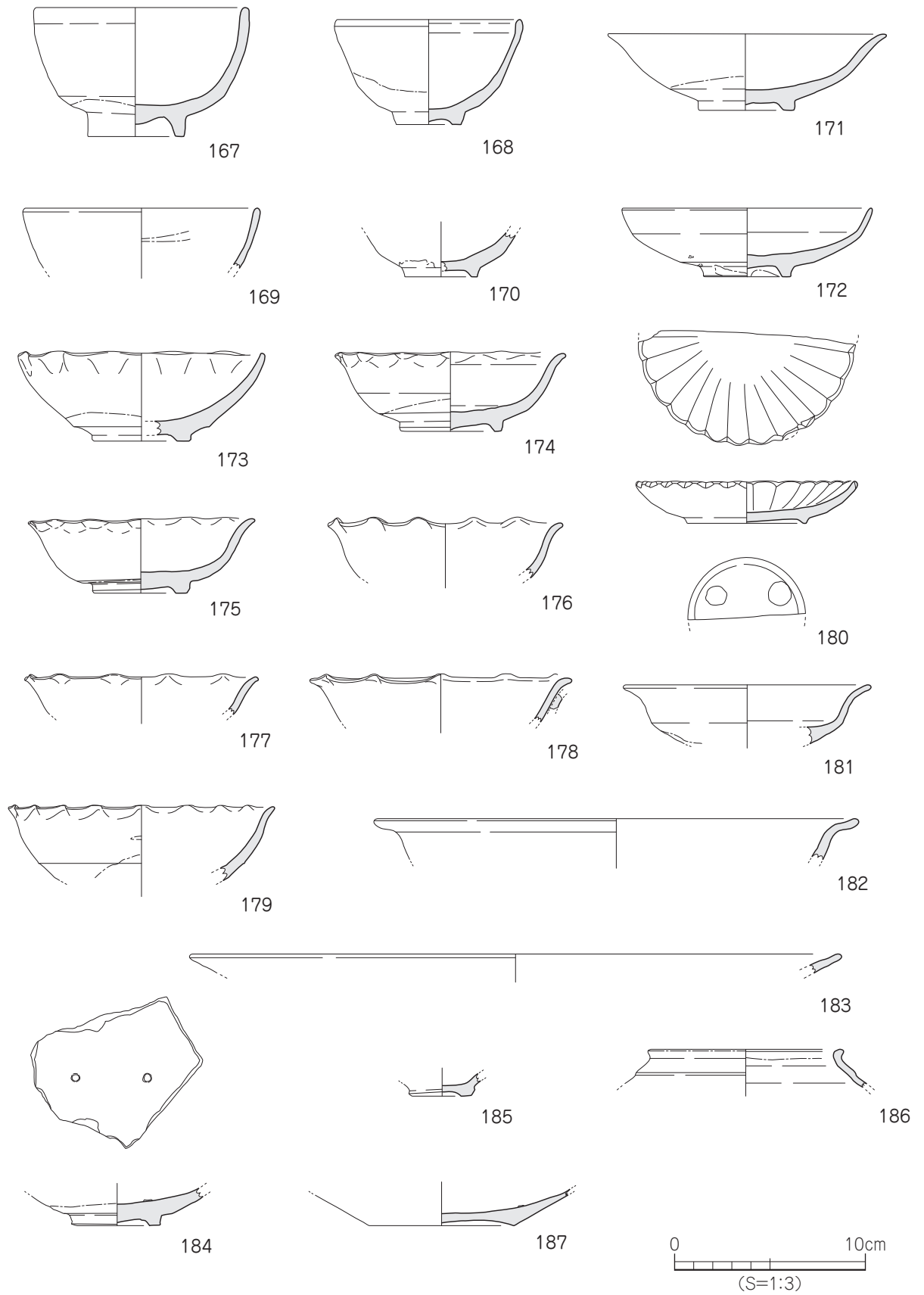
192は唐津焼の甕。1/6の残存で、口縁部は下方に垂下し、胴部上位に稜をもつ。胎土は赤褐色で、灰色釉が全面に施される。

磁器（193～195）

193は輪花皿。1/2の残存で、内面には染付文様が描かれている。胎土は白色で、全面に透明釉が施される。194は大型の皿で、推定口径25.4cmである。口縁部は僅かに外反し、胎土は灰白色である。195は小坏。1/2の残存で、胎土は白色をなし、透明釉が施されているが、高台畳付部分は無釉である。

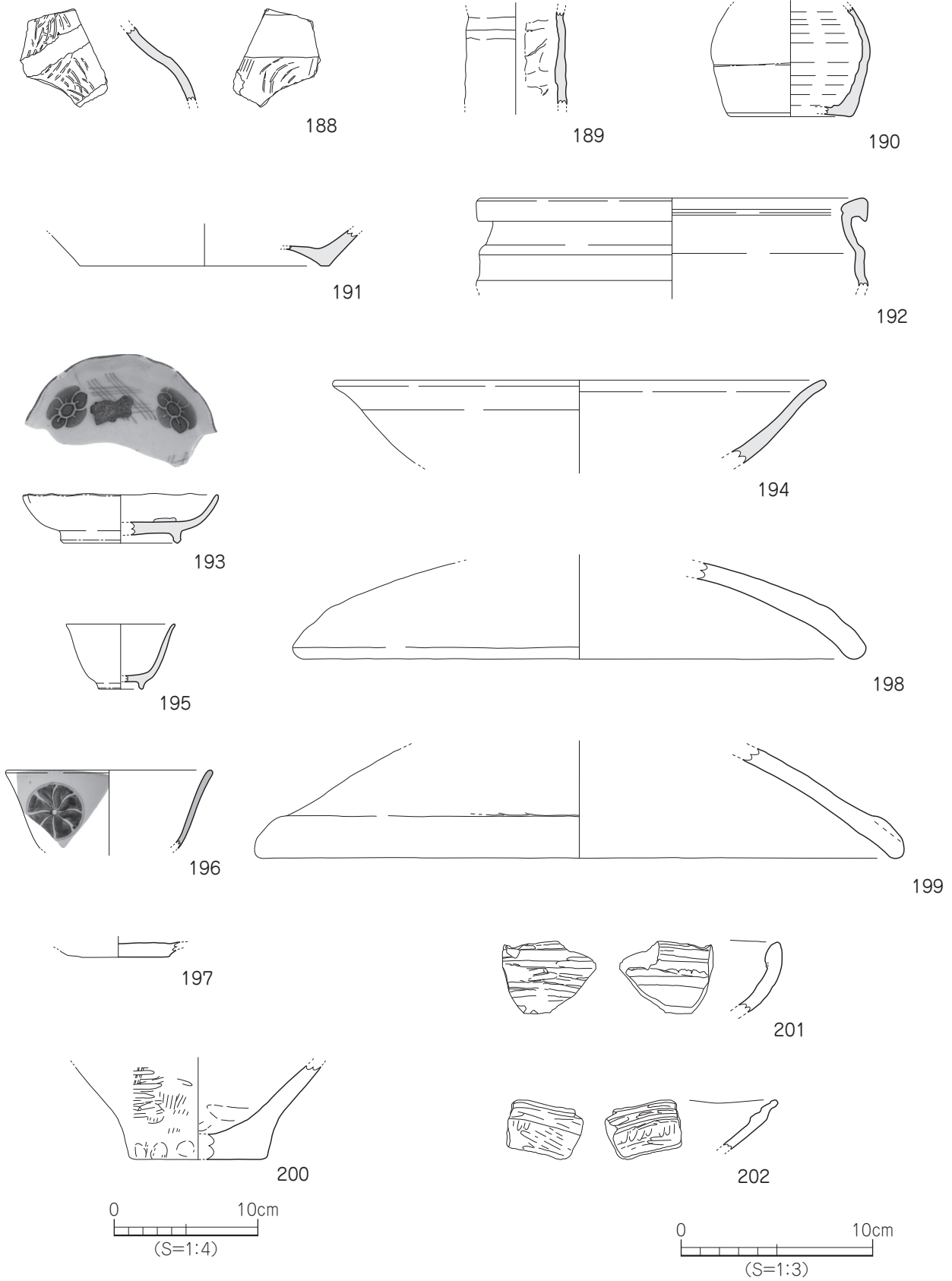
白磁（196）

196は碗。小片で、外面に染付文様が描かれている。胎土は白色で、透明釉が全面に施される。



第 36 図 SD201 出土遺物実測図 (1)

調査の概要



第 37 図 SD201 出土遺物実測図 (2)

土師器 (197～199)

197は坏。底部片で、外面に回転糸切り痕が残る。198・199は焙烙の蓋。198は推定口径29.0cm、199は33.0cmで、199の口縁部は上方に肥厚している。

弥生土器 (200)

200は弥生時代前期の壺形土器。胴～底部片で、胴部外面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。

縄文土器 (201・202)

201は深鉢片で、口縁部内面は肥厚する。202は浅鉢片で、口縁部内面には凹線状の凹みが巡る。縄文時代晩期中葉。

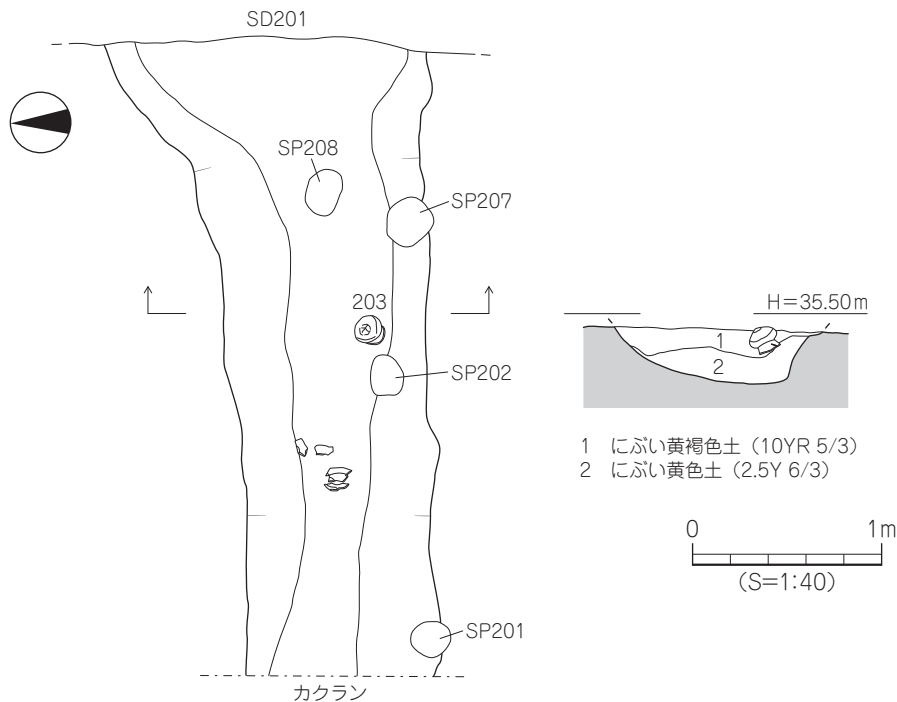
時期：出土した唐津焼の特徴等から、SD201の埋没時期は江戸時代初頭、17世紀前半とする。

SD202 (第38図、図版8)

2区南西部D1～E2区にて検出した東西方向の溝で、溝東側は溝SD201に削平され、溝西側は攪乱により削平されている。溝の検出時には、溝上面にて4基の柱穴 (SP201・202・207・208) を検出している。溝の規模は検出長3.38m、最大幅1.70m、深さは検出面下30cmである。断面形態はレンズ状をなすが、北側壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分層され、上層はにぶい黄褐色土 (10YR 5/3)、下層はにぶい黄色土 (2.5Y 6/3) である。溝基底面は平坦であるが、僅かに東から西へ向けて傾斜をなす (比高差3cm)。遺物は埋土中より弥生土器片が少量出土したほか、溝中央部の埋土中位付近からは口縁部を打ち欠いた壺 (ほぼ完形品：203) が出土している。

出土遺物 (第39図、図版22)

203は壺形土器。直口壺で、口縁部は一部欠損している (打ち欠きによる)。外面及び口縁部内面には、



第38図 SD202 測量図

タテ方向の丁寧なヘラミガキがみられ、底部は小さな平底である。204 は鉢形土器。口縁部は外反し、底部は突出する上げ底をなす。胴部外面及び口縁部内面には、ヘラミガキ調整がみられる。205 は高坏形土器の脚部片で、半截竹管文 2 列と円孔を施す。206 は器台形土器。受部の小片で、口縁部は上下方に拡張し、口縁部端面には半截竹管文 2 列と円形浮文を貼り付ける。なお、円形浮文上にも、竹管文が施される。

時期：出土遺物の特徴より、SD202 は弥生時代後期後半とする。

SD203 (第 40 図)

2 区南東部 D・E3 区にて検出した東西方向の溝で、溝中央部付近は攪乱坑に削平され、溝東側は調査区外に続き、溝西側は消失している。調査壁の土層観察により、本来は第 VII 層上面から掘削された遺構であり第 V 層が遺構上面を覆う。溝の規模は検出長 3.34 m、最大幅 0.94 m、深さは検出面下 26cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土はにぶい黄褐色土 (10YR 5/3) 単層である。溝基底面はほぼ平坦であるが、僅かに東から西へ向けて傾斜をなす (比高差 2cm)。遺物は埋土中より、土師器や須恵器の破片が数点出土した。

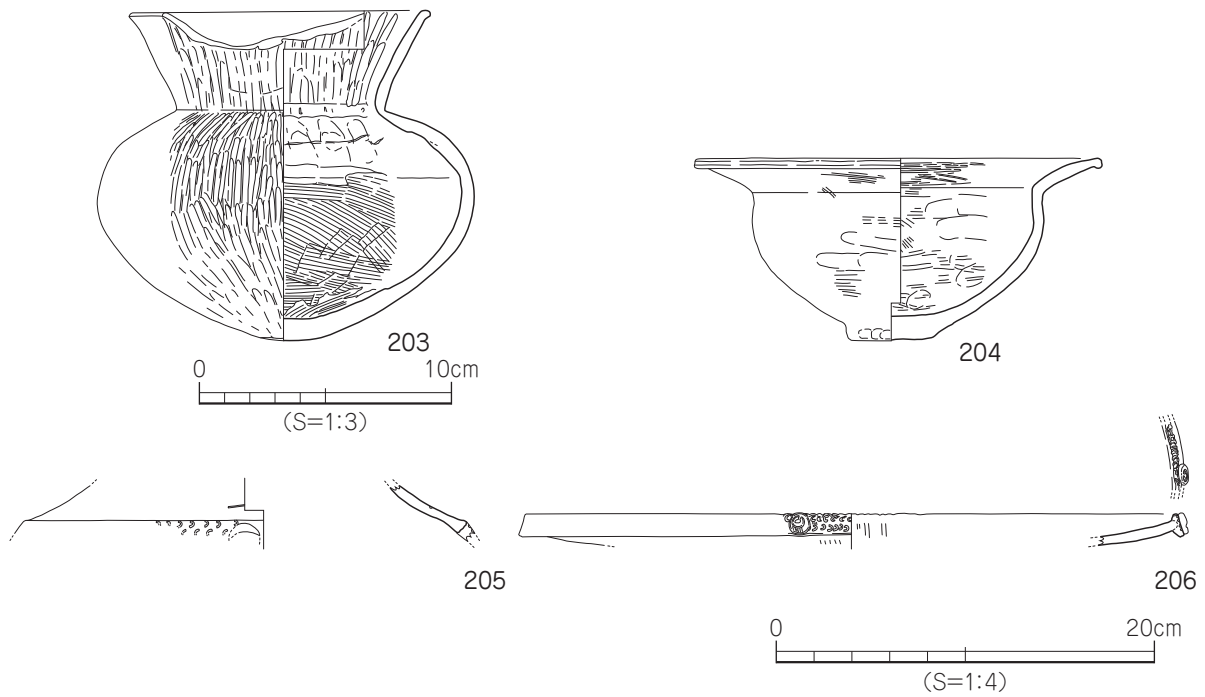
出土遺物

207・208 は土師器。207 は甕で、口縁端部は内傾する。208 は高坏で、円錐状の柱部をなす。209 は須恵器。坏身片で、推定たちあがり径 11.0cm を測る。たちあがり端部は、内傾する面をもつ。

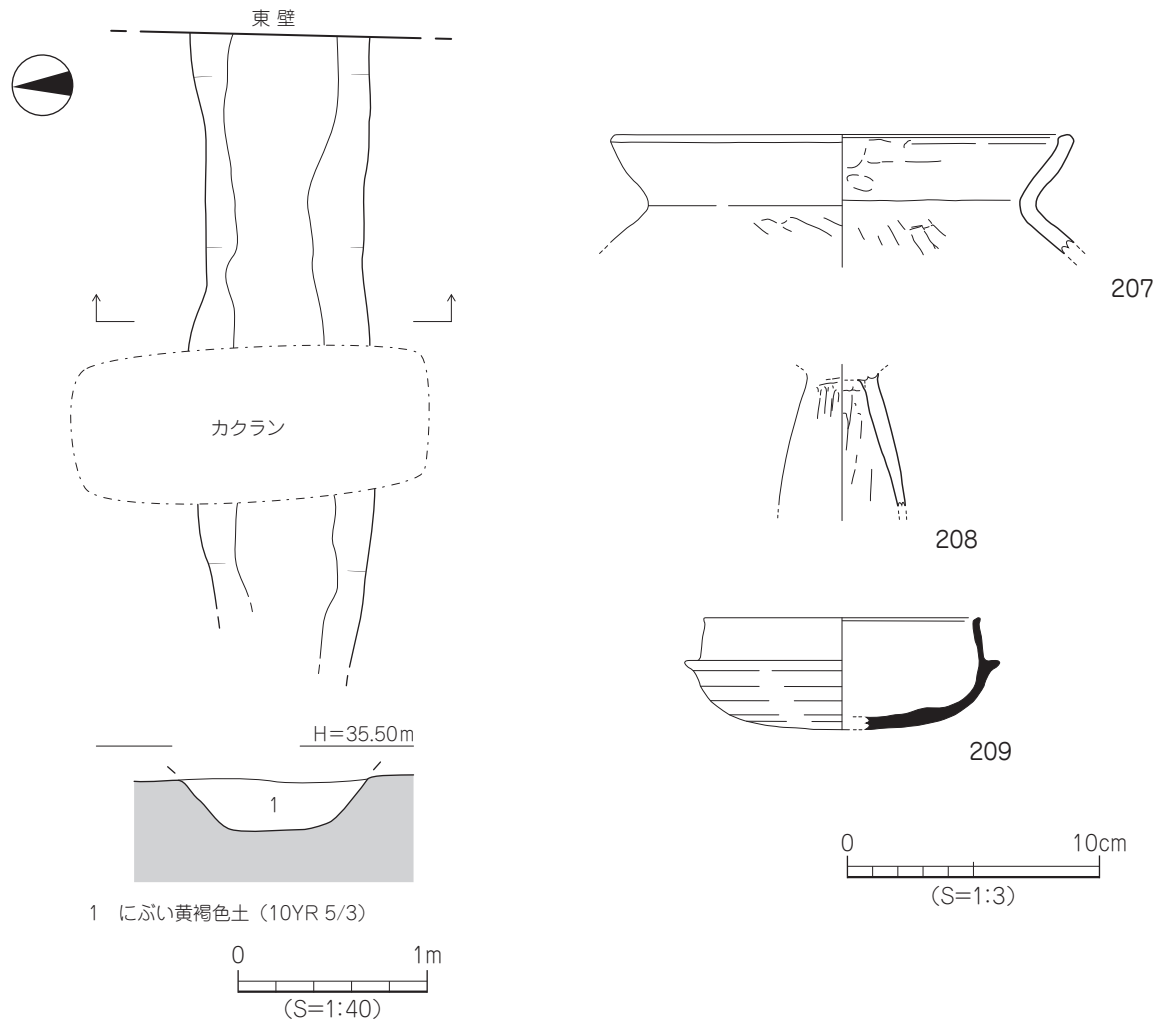
時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね古墳時代中期、5 世紀後半とする。

SD204 (第 41 図、図版 9・10)

2 区中央部南寄り D2・3～E2 区にて検出した北西－南東方向の溝状遺構で、遺構西側は溝 SD201



第 39 図 SD202 出土遺物実測図



第40図 SD203 測量図・出土遺物実測図

に削平され、東側は消失している。遺構の規模は検出長 3.82 m、最大幅 1.66 m、深さは検出面下 70 cmである。断面形態は深い「U」字状をなし、埋土は上層が黒色土 (10YR 2/1)、下層は暗灰黄色土 (2.5Y 5/2) である。遺構基底面には凹凸があり、僅かに南から北へ向けて緩やかな傾斜をなす (比高差 3cm)。

遺構埋土上位からは、径 20～40cm 大の河原石が列をなして出土した。また、埋土下層からは完形の壺形土器 (210) が出土し、埋土上層からは縄文土器や弥生土器の小片が少量出土したほか、石器 (チップ) が数点出土している。

出土遺物 (第 42・43 図、図版 22・23)

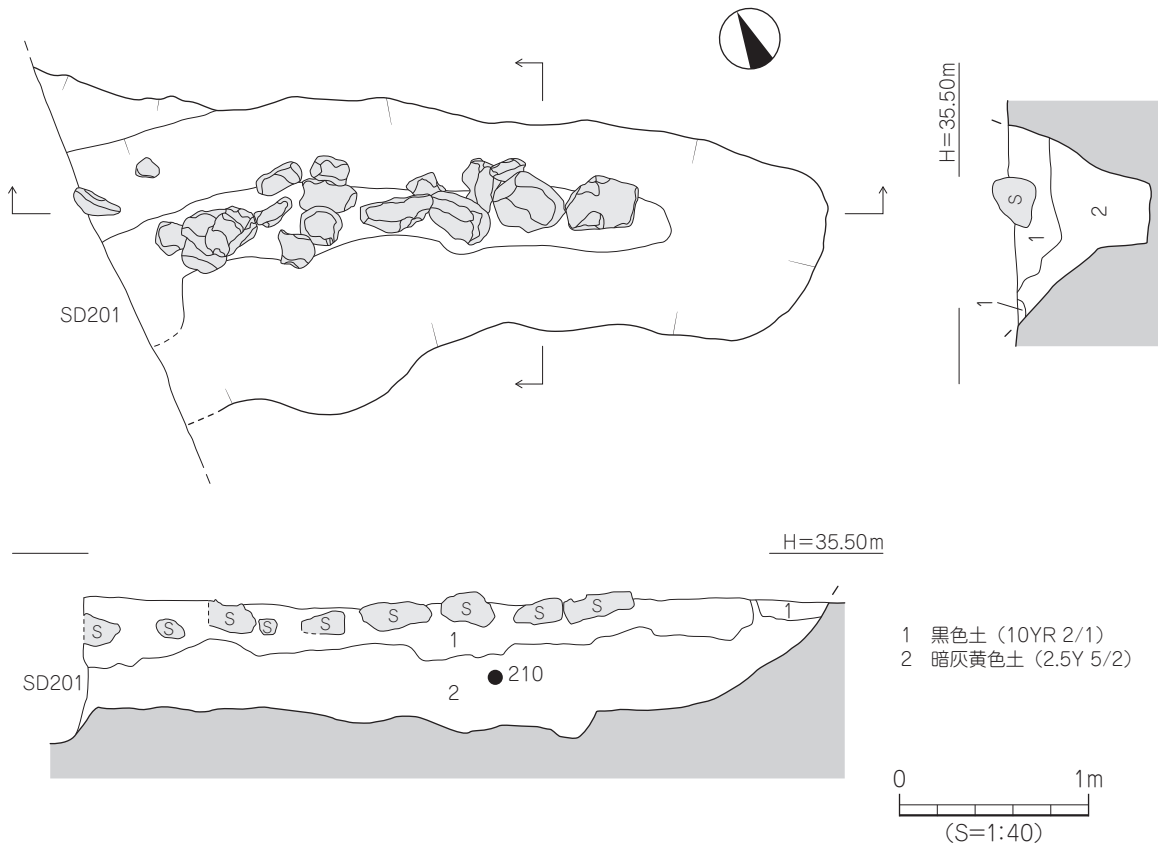
弥生土器 (210)

210 は壺形土器。口縁部を一部欠損するものの、ほぼ完形品で、推定口径 15.4cm、底径 7.5cm、器高 28.8cm である。口縁部は短く外反し、頸部にヘラ描き沈線文 5 条、胴部中位付近にはタテ方向の線刻 (6 条) を施す。底部は平底をなし、内外面には丁寧なヘラミガキ調整がみられる。

縄文土器 (211～221)

211～215 は深鉢。211～213 の口唇部には刻目を施し、211 の口縁部内面には刺突文がみられる。また、213 の口縁部外面には径 0.4cm の孔 (未貫通) があり、口縁部内面には沈線 1 条が巡る。214 の

調査の概要



第 41 図 SD204 測量図

外面には沈線 3 条があり、215 はヨコ方向の沈線 2 条とタテ方向の沈線 1 条を施す。216 ～ 221 は浅鉢。216 は胴部の張りが強く、口縁部は短く外反する。口唇部には鱗状の突起が貼り付けられている。218・219 の口縁部は内方に肥厚し、218 は鱗状の突起をもつ。なお、218 の口縁部下位には径 0.1cm 大の小さな孔を穿つ。220 は口縁部が内方へ肥厚し、口唇部に刻目、口縁部内面には沈線 1 条が巡る。221 の口縁部は外反し、内外面には条痕がみられる。なお、214 の胎土中には少量の角閃石が含まれている。

石器 (222 ～ 225)

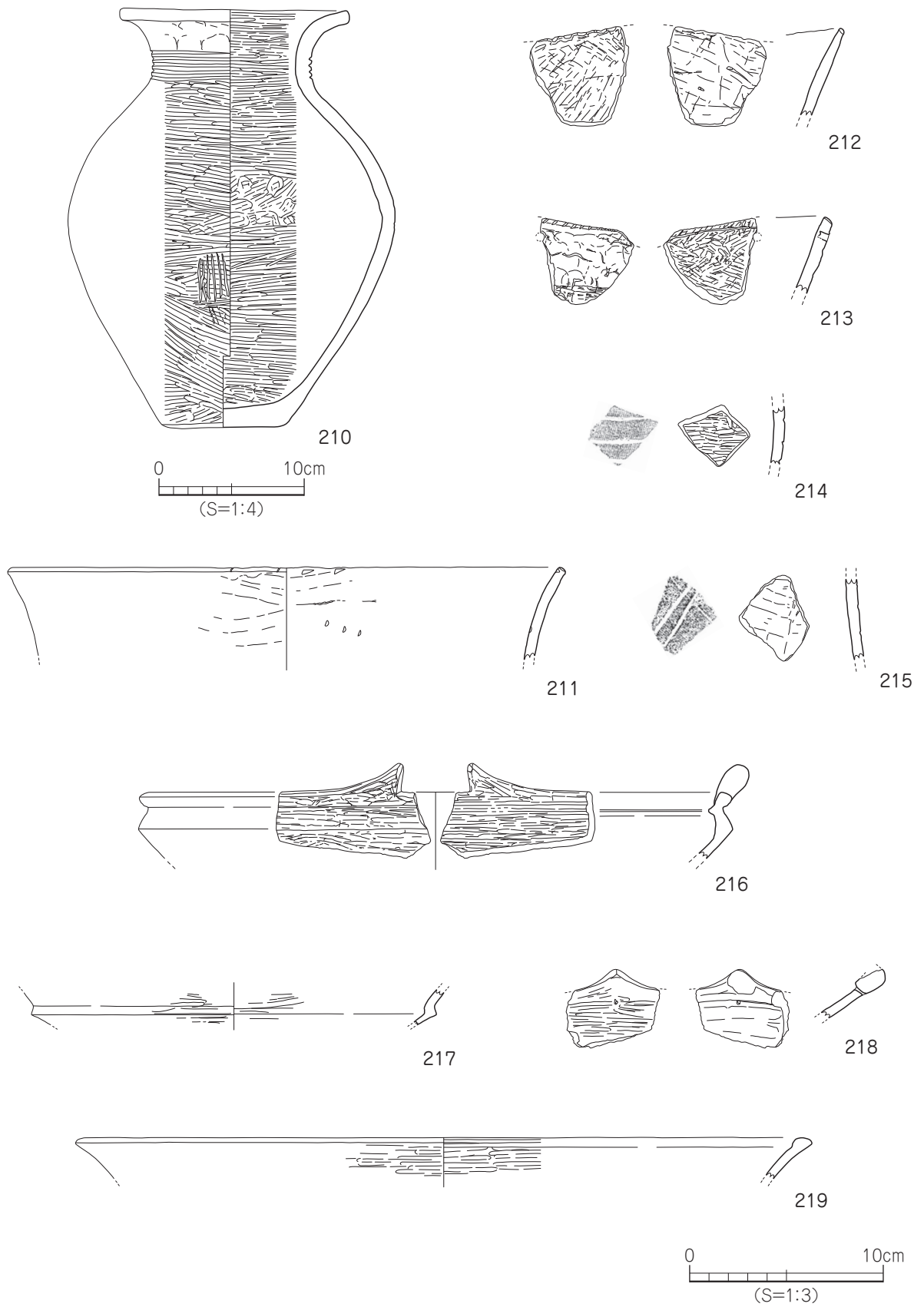
222 ～ 225 は剥片を利用したスクレイパーで、石材は全てサヌカイトである。

時期：出土した壺形土器 (210) の特徴より、SD204 は弥生時代前期後半とする。

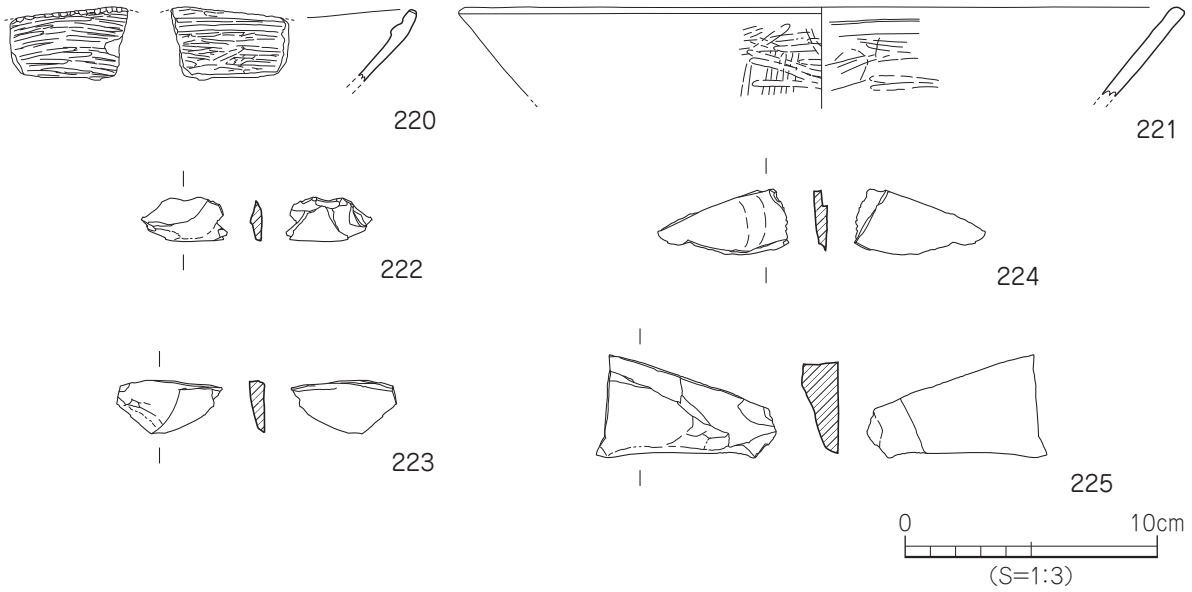
SD205 (第 44 図、図版 10)

2 区中央部 E1・2 区にて検出した北西 - 南東方向の溝状遺構で、遺構南側は溝 SD201 により削平されている。遺構の規模は検出長 1.15 m、最大幅 1.50 m、深さは検出面下 18cm である。断面形態は「U」字状をなし、埋土は黒褐色土 (10YR 3/1) 単層である。遺物は埋土中より、縄文土器や弥生土器の小片が少量出土したが、図化するものはない。なお、遺構の配置や埋土より、SD205 は SD204 と同一遺構の可能性はある。

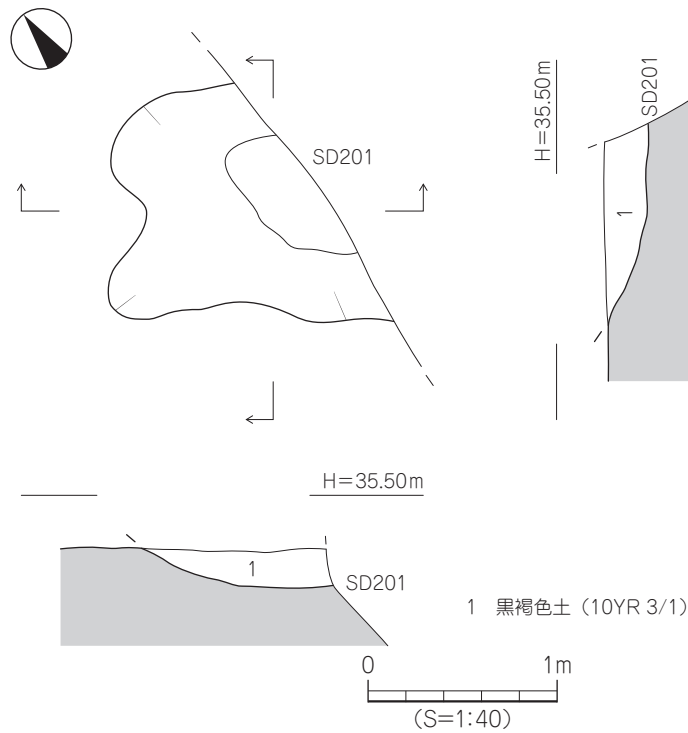
時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、溝 SD204 と同一溝の可能性のあることから、概ね弥生時代前期後半とする。



第 42 図 SD204 出土遺物実測図 (1)



第 43 図 SD204 出土遺物実測図 (2)



第 44 図 SD205 測量図

3) 自然流路

SR201 (第 30 図)

2 区北東部 E2 ~ F3 区で検出した北西 - 南東方向の自然流路で、流路西側は溝 SD201 により削平されている。第Ⅷ①層上面での検出であり、流路上面は第Ⅶ層が覆う。SR201 上面からは、SB201 のほかに柱穴 5 基 (SP217 ~ 221) を検出した。流路の規模は検出長 7.00m、検出幅 6.00 m、深さは最

深部で40cmである。埋土は灰白色粗砂（10Y 8/1）を基調とし、径5～10cm大の円礫が少量含まれている。流路内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、流路上面を第Ⅶ層が覆うことから、概ね縄文時代の流路と考えられる。

4) 土 坑

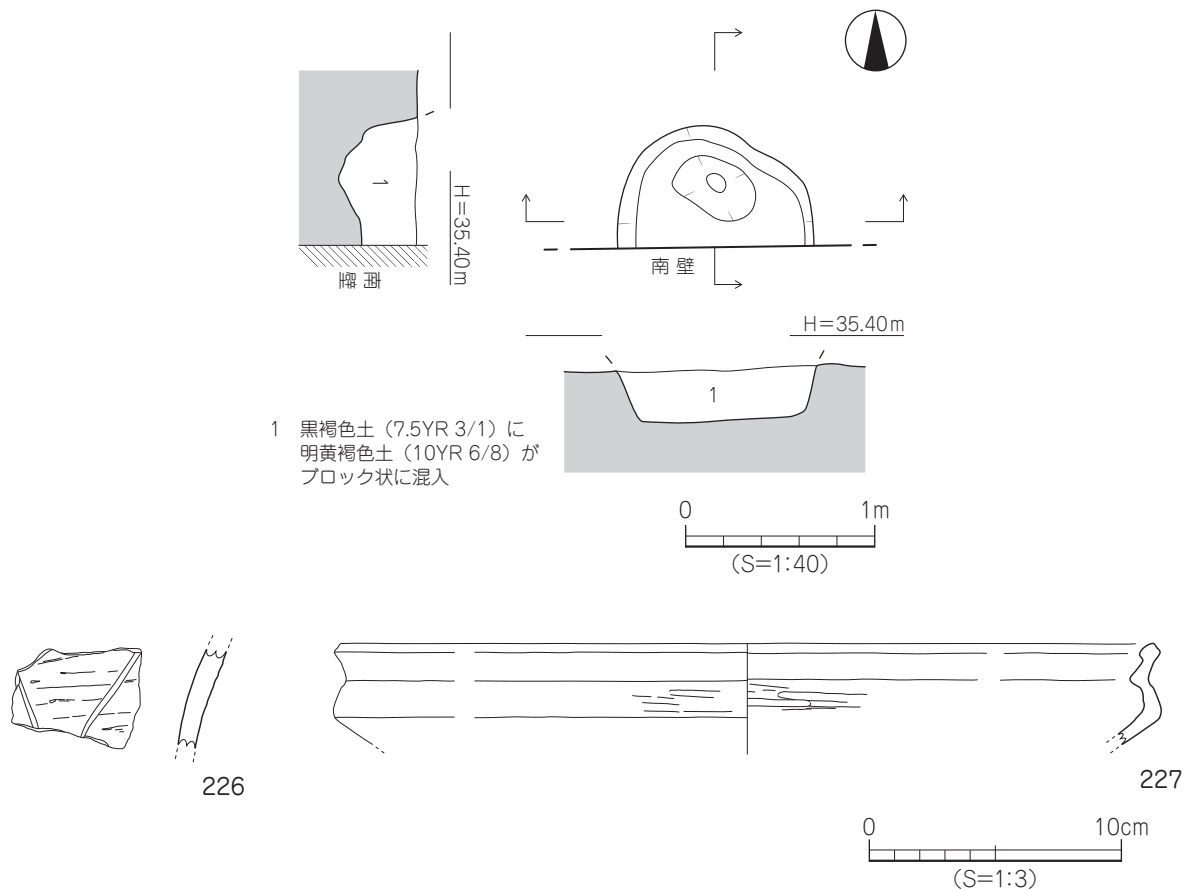
2区では、5基の土坑を検出した。すべて、第Ⅷ①層上面での検出である。SK201とSK202は縄文時代、その他は全て古墳時代以降の土坑である。

SK201（第45図、図版10）

2区南東隅D3区に位置する土坑で、土坑南側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、第Ⅶ層が遺構上面を覆う。平面形態は不整の円形をなすものと思われ、規模は東西長1.04m、南北検出長0.64m、深さは検出面下26cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に明黄褐色土（10YR 6/8）がブロック状に混入するものである。土坑基底面中央部付近には、径26～44cm、深さ16cmの凹みが存在する。遺物は土坑埋土中より、縄文土器片や石器の剥片が出土した。

出土遺物（図版23）

226・227は縄文土器。226は深鉢の口縁部片で、ヘラ状工具による山形状の沈線を施す。外面には、ヨコ方向のケズリがみられる。227は浅鉢の口縁部片。小片で、口縁部内面は粘土紐の貼り付けによ



第45図 SK201 測量図・出土遺物実測図

り肥厚し、体部に稜をもつ。内外面には、丁寧なミガキを施す。

時期：出土した縄文土器の特徴より、SK201は縄文時代晩期中葉とする。

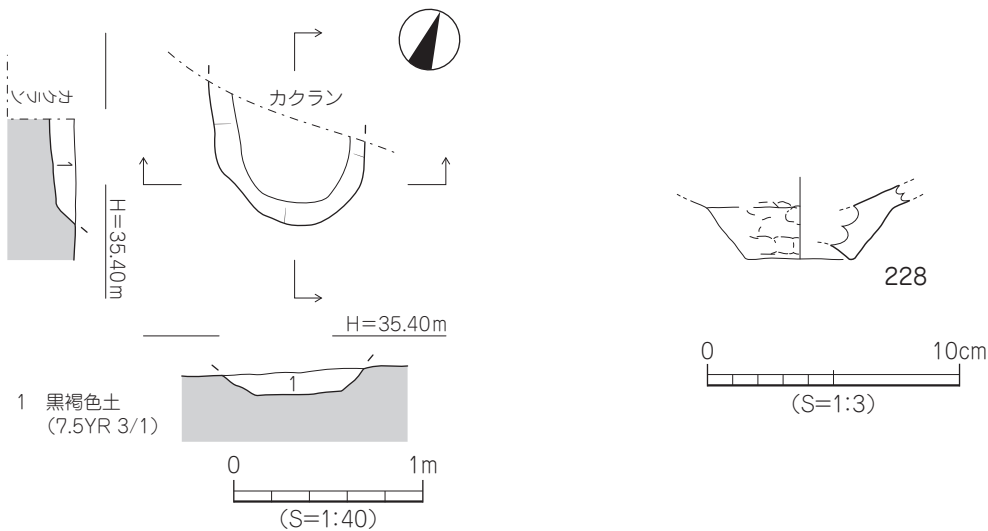
SK202 (第46図)

2区中央部東寄りE2区に位置する土坑で、土坑北側は攪乱により削平されている。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西長0.80m、南北検出長0.55m、深さは検出面下10cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は、黒褐色土(7.5YR 3/1)単層である。土坑基底面は、東から西に向けて僅かに傾斜をなす。遺物は埋土中より、縄文土器片が数点出土した。

出土遺物

228は深鉢の底部片。厚みのある底部で、中央部は凹む。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK202は概ね縄文時代晩期中葉とする。

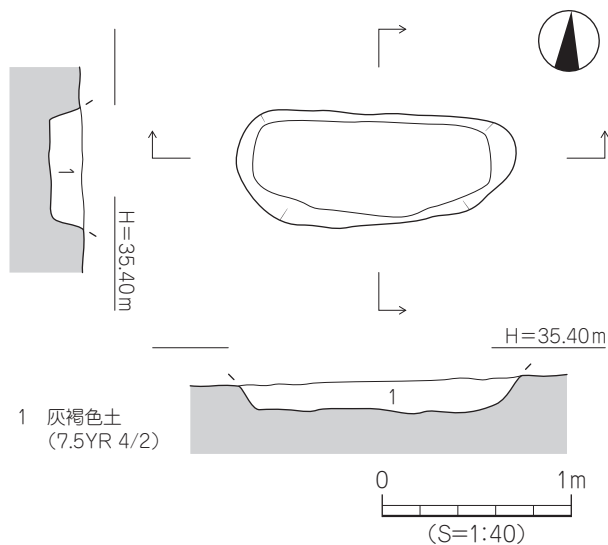


第46図 SK202 測量図・出土遺物実測図

SK203 (第47図)

2区中央部南東寄りE3区に位置する土坑で、平面形態は東西方向に長い楕円形をなし、規模は長径1.50m、短径0.60m、深さは検出面下18cmである。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰褐色土(7.5YR 4/2)単層である。土坑基底面には、凹凸がみられる。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小片が少量出土したが、図化するものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK203は概ね古墳時代以降とする。

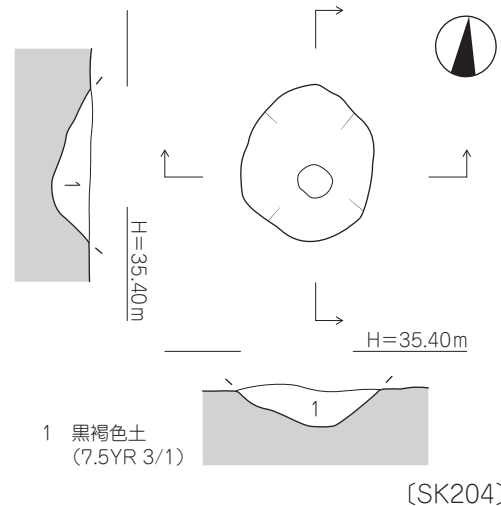


第47図 SK203 測量図

SK204 (第 48 図)

2区北西部 F1・2区に位置する土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径 0.82 m、短径 0.70 m、深さは検出面下 20cm である。断面形態は摺鉢状をなし、埋土は黒褐色土 (7.5YR 3/1) 単層である。土坑基底面は小さく、丸味を帯びている。遺物は埋土中より土師器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

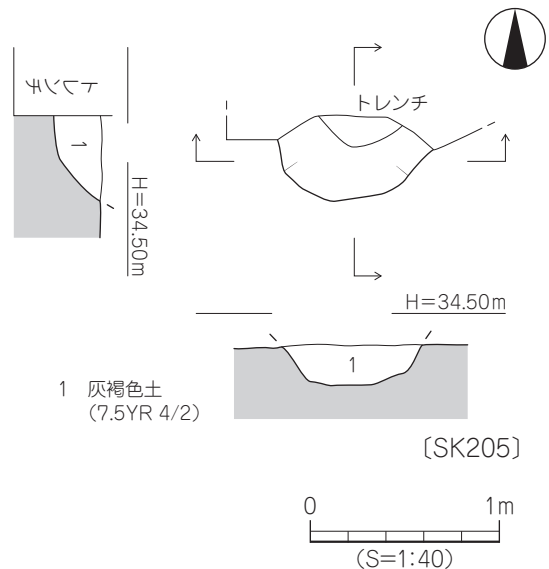
時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK204 は概ね古墳時代以降とする。



SK205 (第 48 図)

2区北西部 F1 区に位置する土坑で、土坑北側はトレンチにより削平されている。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 0.82 m、南北検出長 0.43 m、深さは検出面下 25cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は灰褐色土 (7.5YR 4/2) 単層である。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK205 は概ね古墳時代以降とする。



第 48 図 SK204・SK205 測量図

5) 柱 穴

2区では、26基の柱穴を検出した (SP203 は欠番)。このうち、SP227 は SB202 の支柱穴と思われるものである。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の3種類となる。柱穴内からは土師器、須恵器の小片が出土した。

灰褐色土 (7.5YR 4/2) : 21基 [SP201・202・204～210・212～222・225]

灰褐色砂質土 (7.5YR 4/2) : 1基 [SP224]

黒褐色土 (7.5YR 3/1) : 4基 [SP211・223・226・227]

6) 包含層・地点不明出土遺物

2区からは、第IV層や第V層掘削時に弥生土器や土師器、須恵器が出土した。また、地点不明ではあるが陶磁器や瓦質土器等が出土している。この中には、市場系の須恵器や暗文を施した土師器が含まれている。

第IV層出土遺物 (第 49 図、図版 23)

229・230 は須恵器。229 は坏蓋で、扁平な天井部をもち、口縁部は下方に垂下する (8世紀前半)。

230は高台の付く坏Bで、高台は体底部境界付近に付き、「ハ」の字状に開く（7世紀後半）。231～233は土師器。231は坏で、推定口径13.5cmを測る。体部内面には放射状の暗文がみられ、内外面には赤色塗彩が施されている（8世紀前半）。232は坏の底部片で、底部の切り離しは摩滅の為、不明である（時期不明）。233は高台の付く皿B（高台は剥離）で、口縁端部は上方に肥厚し、体部内面には放射状暗文を施す（8世紀前半）。

第V層出土遺物（第49図、図版23）

234～237は弥生時代終末期の弥生土器。234・235は壺形土器。234は直口壺で、底部は突出する小さな平底をなす。235は複合口縁壺で、口縁拡張部にクシ状工具による波状文を施す。236は無頸壺。口縁端部は内傾し、内外面には丁寧なヘラミガキを施す。237は製塩土器。小片で、外面にはタタキ調整がみられる。238は市場系の須恵器。直口壺で、口縁端部は面をなし、頸部に凸帯をもつ（5世紀後半）。

地点不明出土遺物（第49図、図版23）

239は仏飯器。柱部には竹節状の凸部をもつ。全面施釉で、外面は白色と橙色、内面は白色をなす。240は瓦質の土瓶。肩部に沈線と竹管文を施す。241は瓦質の火鉢。口縁部片で、端部は平坦面をなす（江戸時代後期）。

3. 3区の調査

3区は調査地北東部に位置し、東西長10.0m、南北長6.2m、調査面積は約62㎡である。3区南西部は地表下1.1mまで開発が及んでおり、遺跡が存在していない。また、3区中央部付近には、事前の試掘調査で掘削したトレンチが遺存している。

（1）基本層位

3区では、基本層位の第Ⅲ層を除く土層を検出した（第50図、図版11）。

第Ⅰ層：地表下50cmの地点まで開発が行われているが、前述したとおり、3区南西部は地表下1.4mの地点まで攪乱が及んでいる。

第Ⅱ層：3区では、第Ⅱ①層と第Ⅱ②層を検出した。

第Ⅱ①層－3区全域にみられ、層厚は5～70cmである。

第Ⅱ②層－3区全域にみられ、層厚は5～20cmである。

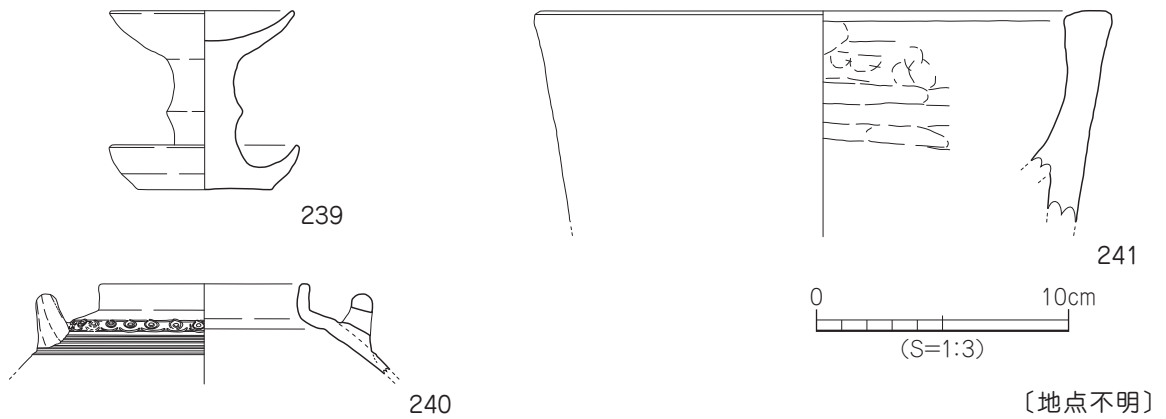
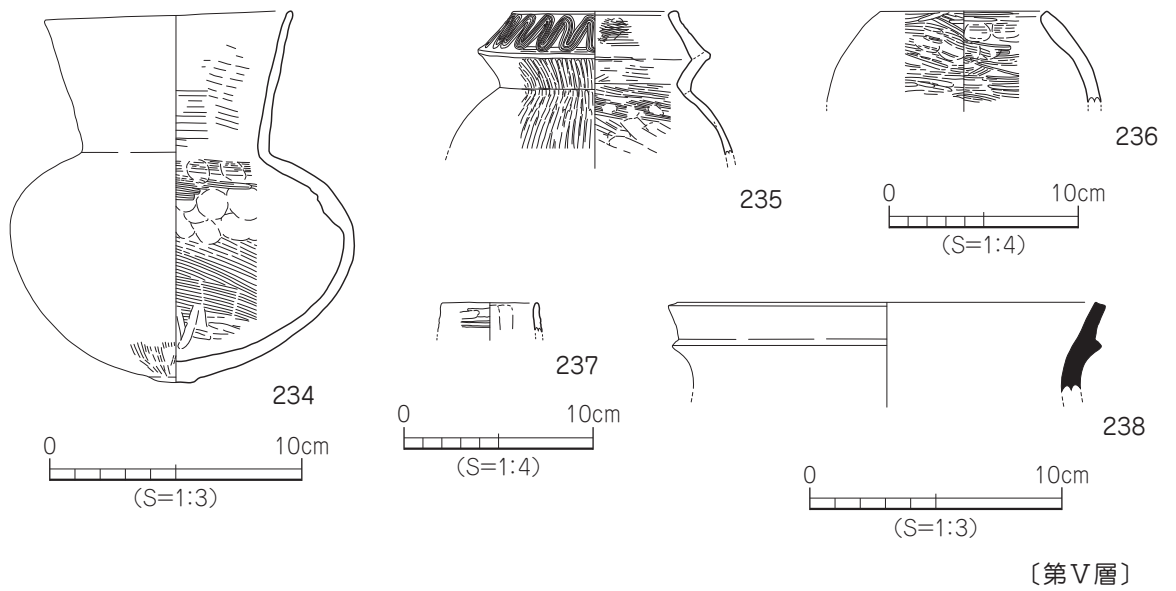
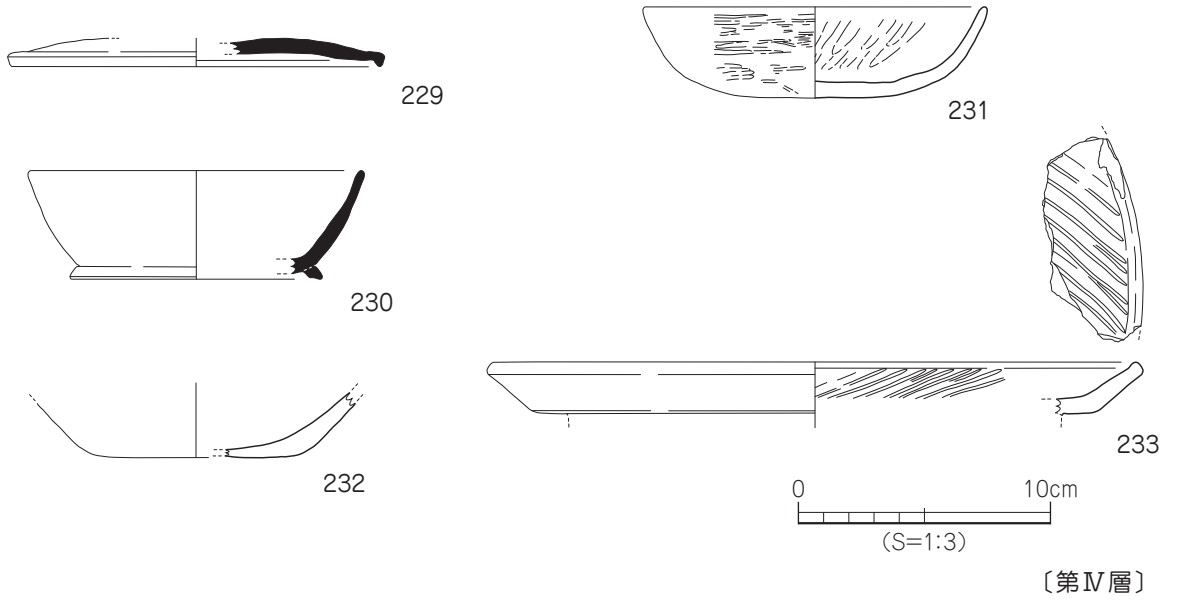
第Ⅳ層：3区全域にみられ、層厚は5～20cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第Ⅴ層：3区ほぼ全域にみられ、層厚は10～30cmである。本層中からは、土師器や須恵器の破片が少量出土した。

第Ⅵ層：3区ほぼ全域にみられ、層厚は10～60cmである。本層中からは弥生土器や土師器、須恵器の小片が少量出土した。

第Ⅶ層：3区南西部にみられ、層厚は5～10cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第Ⅷ層：3区では、試掘トレンチ内にて第Ⅷ②層を検出した。



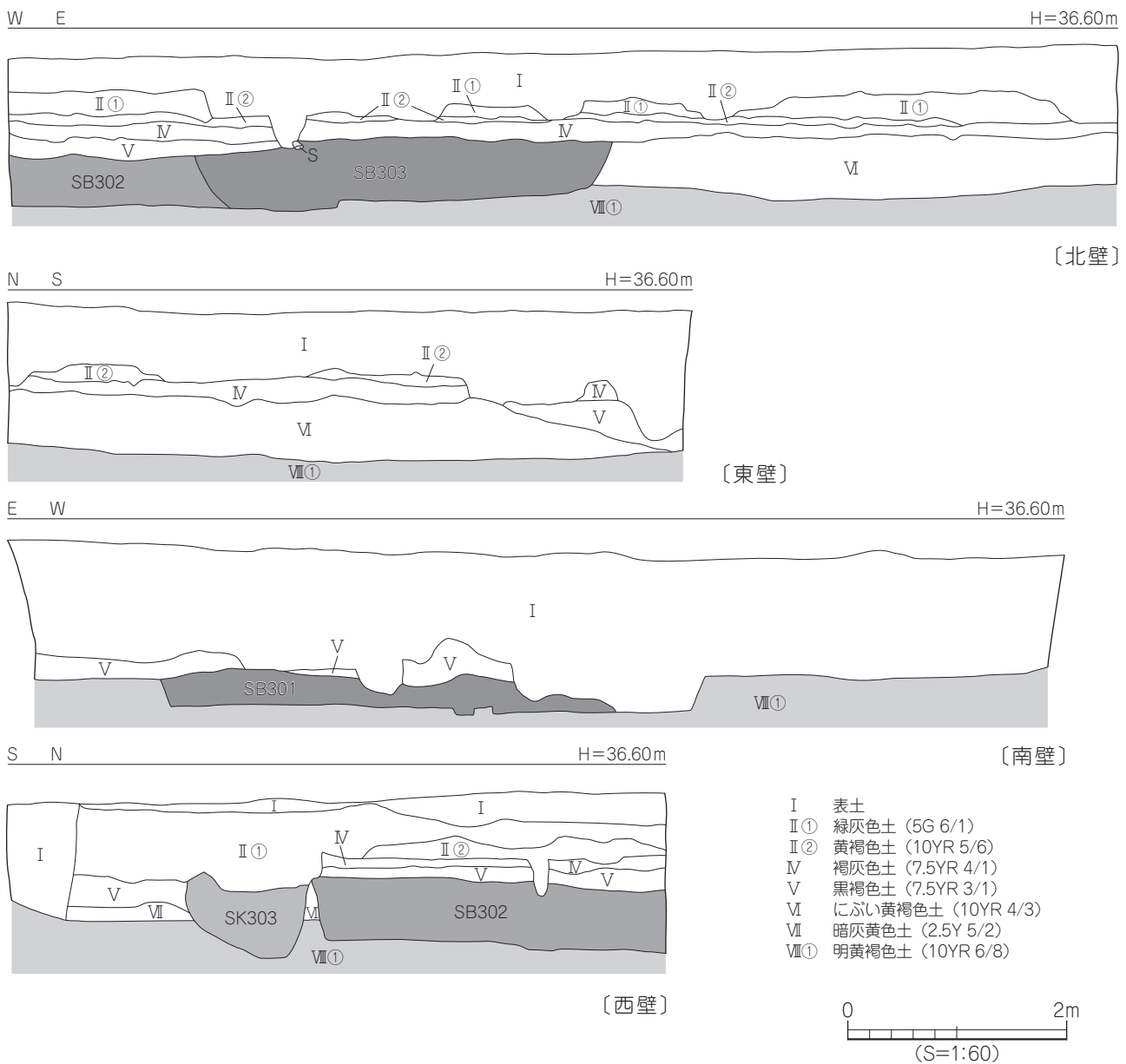
第 49 図 2 区包含層・地点不明出土遺物実測図

第Ⅷ①層－本層上面は、調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると3区北東部から南西部にかけて緩やかな傾斜をなし、北東部の標高は35.2 m、南西部では35.1 mを測る。

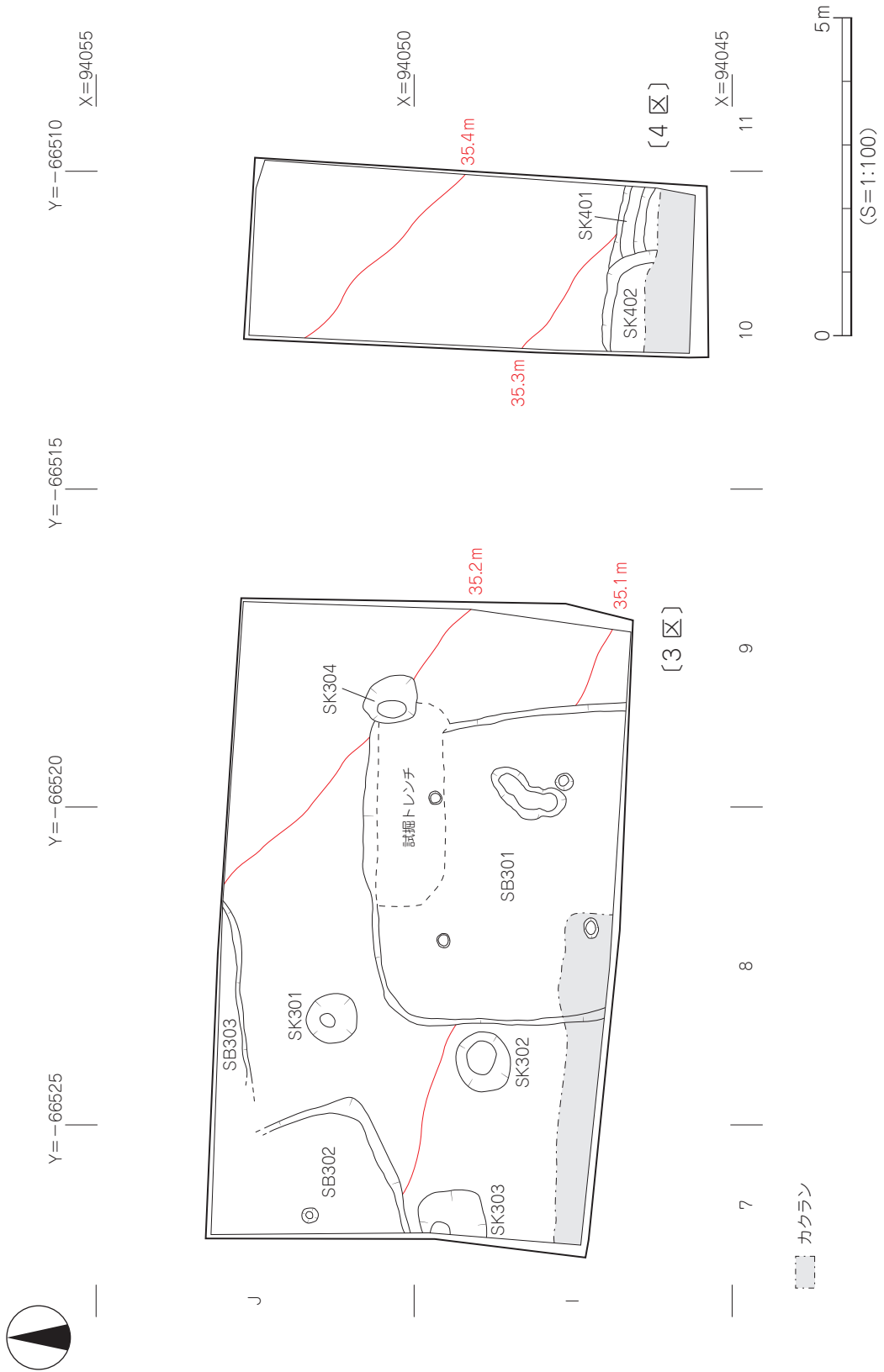
第Ⅷ②層－試掘調査時のトレンチ内にて検出した土層で、本層上面の標高を測量すると、34.8 mである。

(2) 遺構と遺物

3区では、竪穴建物3棟と土坑4基を検出した(第51図、図版2・11)。すべて、第Ⅷ①層上面での検出である。遺物は遺構内及び第Ⅴ層、第Ⅵ層中より弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土した。



第50図 3区土層図



第51図 3区・4区遺構配置図

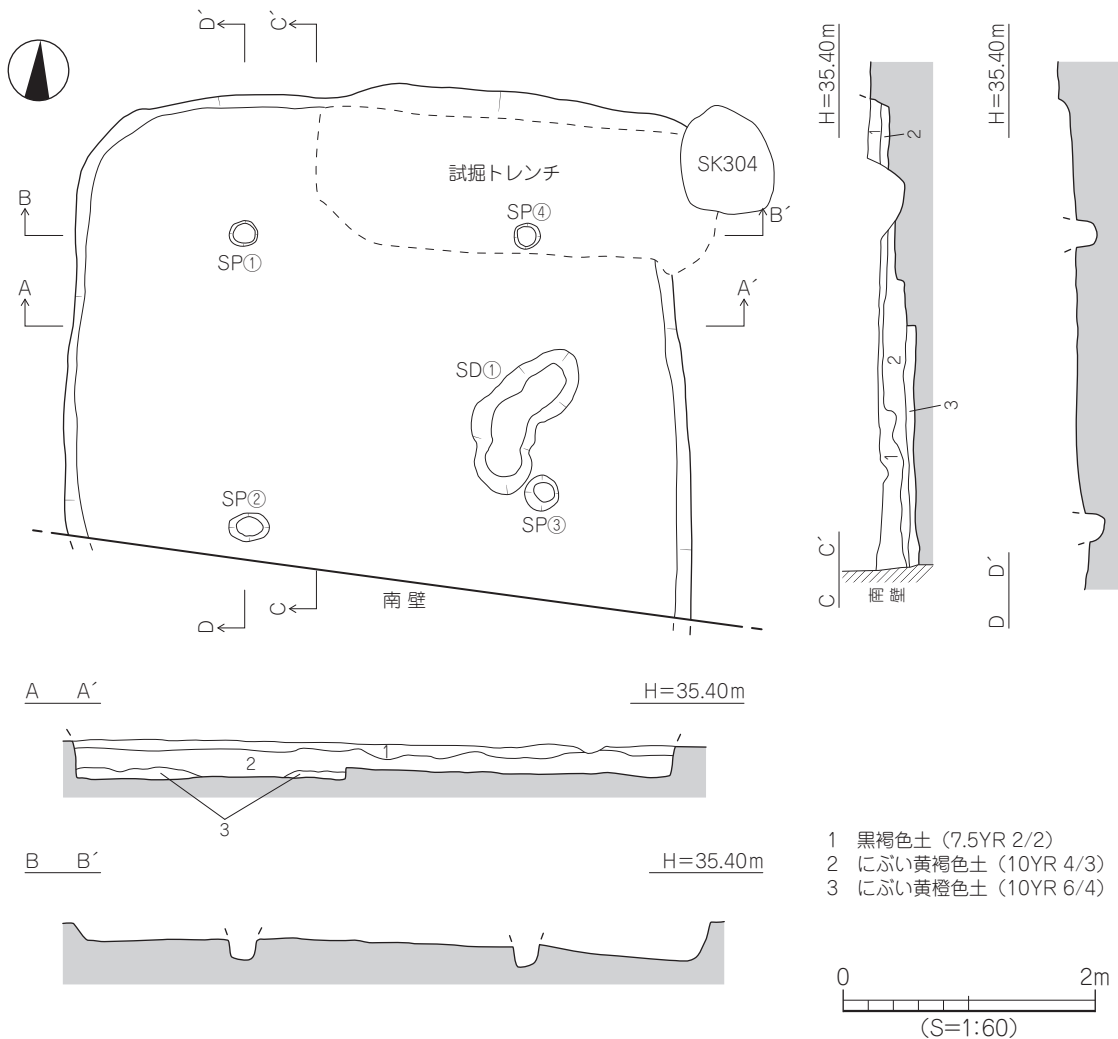
1) 竪穴建物

3区では、3棟の竪穴建物を検出した。SB301とSB303は古墳時代中期後半、SB302は古墳時代中期末の建物である。

SB301 (第52図、図版12)

3区中央部から南側I8～J9に位置する竪穴建物で、建物北東部は試掘トレンチにより一部削平され、南側は調査区外に続く。第Ⅷ①層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。平面形態は隅丸方形をなすものと思われ、規模は東西長5.00m、南北検出長3.95m、壁高は34cmである。埋土は3種類に分層され、上位から1層黒褐色土(7.5YR 2/2)、2層にぶい黄褐色土(10YR 4/3)、3層にぶい黄橙色土(10YR 6/4)である。堆積状況から、3層は建物床面を修復する貼床土の可能性が高い。また、建物の床面は南側にくらべ北側が高くなっており、部分的なベッド(屋内高床部)が存在した可能性が高い(発掘調査時は確認できず)。

建物床面からは、4基の柱穴(SP①～④)と溝状遺構1条(SD①)を検出した。4基の柱穴は配置状況からSB301の主柱穴と考えられ、各柱穴の掘り方規模は径18～26cm、深さ13～18cm、埋土は黒褐色土(7.5YR 2/2)に明黄褐色土(10YR 6/8)がブロック状に混入するものである。また、



第52図 SB301 測量図

SD①は長さ1.25m、幅0.55m、深さ30cmの溝状遺構で、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）単層である。SD①からは少量の土師器片が出土したが、SB301に伴う遺構かは判断できなかった。遺物は埋土中より土師器甕や甌、須恵器坏蓋、坏身の破片などが出土した。

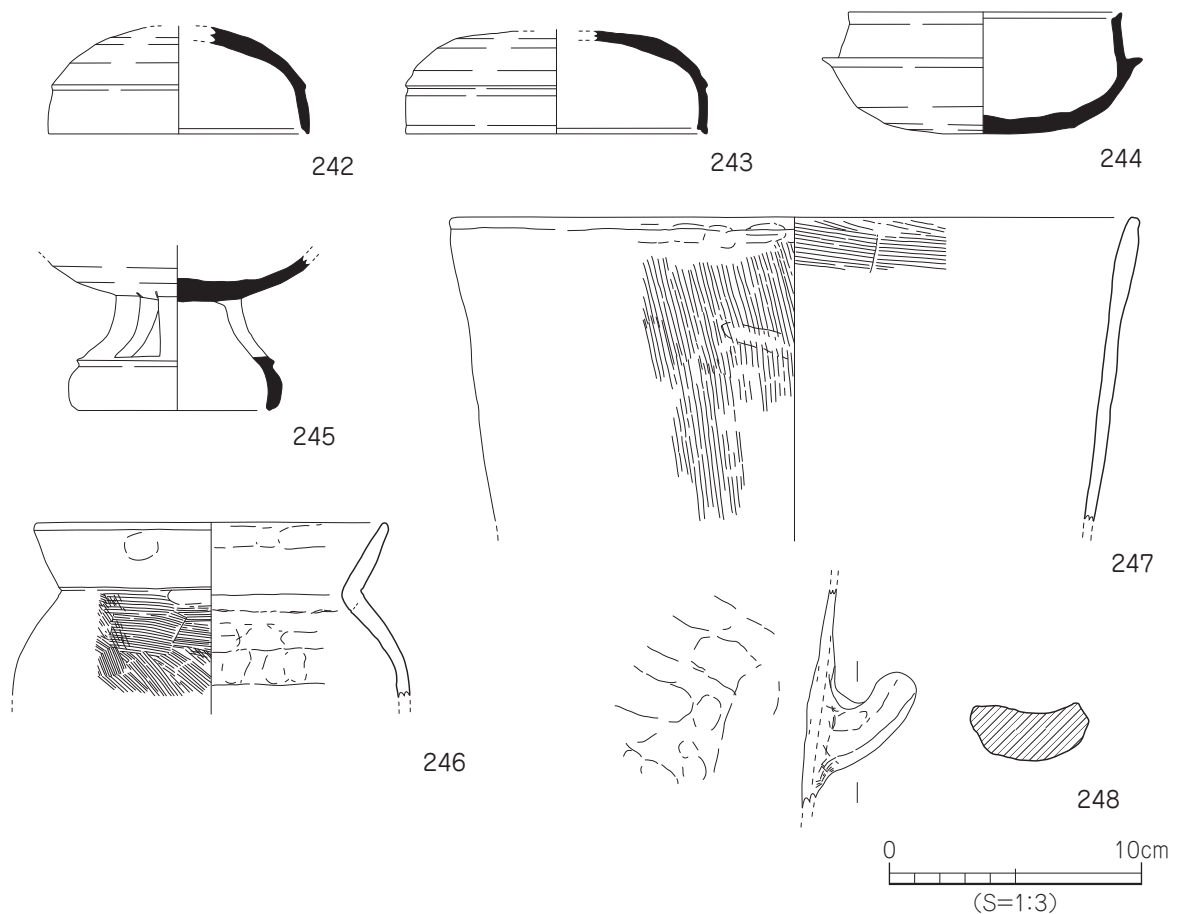
出土遺物（第53図、図版24）

242～245は須恵器。242・243は坏蓋で、口縁端部は内傾する。244は坏身で、たちあがり端部は内傾する。245は有蓋高坏の脚部。柱部には、台形状の透かしが3方向に施されている。246～248は土師器。246は甕で、口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。247・248は甌。247は口縁～胴部片で、口縁端部はナデにより凹む。248は舌状の把手をもち、外面にはハケメ調整がみられる。

時期：出土遺物の特徴より、SB301の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5世紀後半とする。

SB302（第54図、図版12）

3区北西隅J7・8区に位置する竪穴建物で、建物北側は消失し、西側は調査区外に続く。第Ⅷ①層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。平面形態は方形状をなすものと思われ、規模は東西検出長2.30m、南北検出長1.55m、壁高は20cmである。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）を基調とし、床面付近には部分的に灰褐色土（7.5YR 4/2）がみられた。内部施設は、柱穴1基（SP①）を検出した。柱穴掘り方



第53図 SB301出土遺物実測図

規模は径 25cm、深さ 16cm、掘り方埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に明黄褐色土（10YR 6/8）がブロック状に少量混入するものである。柱穴の配置より、SP①はSB302の主柱穴と考えられる。遺物は埋土中より、土師器や須恵器の小片が数点出土した。

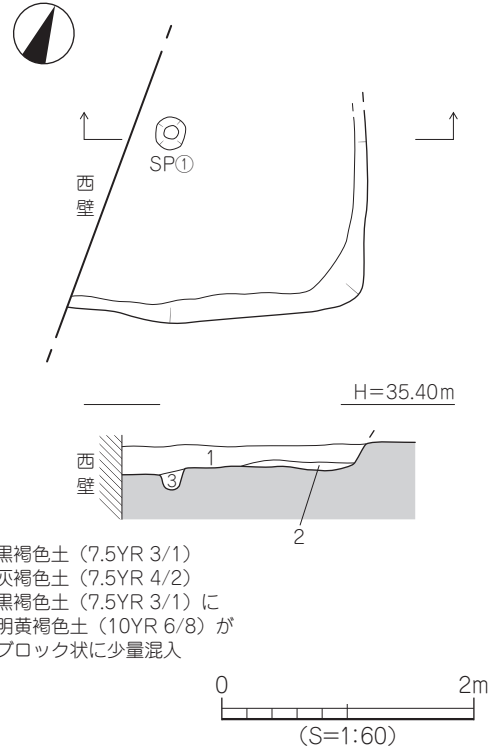
出土遺物（図版 24）

249～251は須恵器。249は坏蓋で、口縁端部は内傾する凹面をなす。250・251は坏身で、たちあがり端部は内傾する。252～254は土師器。252は甕で、口縁部は「S」字状をなし、口縁端部は僅かに内傾する不明瞭な面をもつ。253・254は甑。253は舌状の把手部、254は底部片であり、254には円孔が3個看取される。

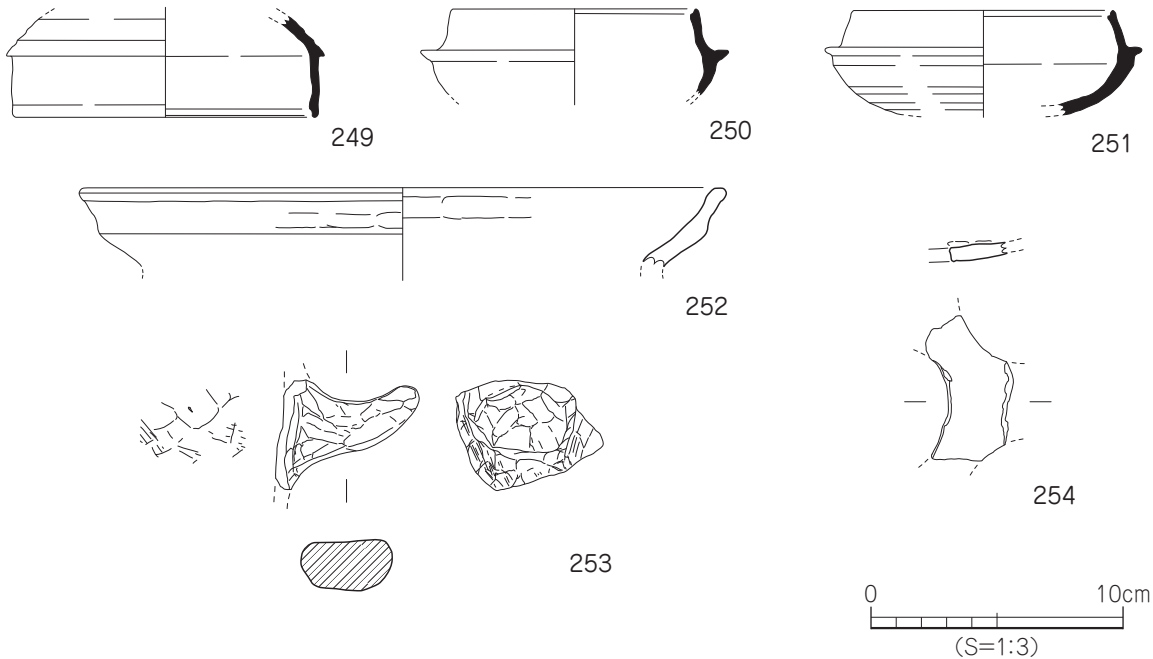
時期：出土遺物の特徴より、SB302の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5世紀末とする。

SB303（第55図、図版12）

3区北西部J8区に位置する竪穴建物で、建物西側は消失し、北側は調査区外に続く。第Ⅷ①層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。平面形態は方形状をなすものと思われ、規模は東西検出長 2.96 m、南北検出長 0.56m、壁高は 36cmである。埋土は、灰褐色土（7.5YR 4/2）単層である。建物床面は平坦で、内部施設は検出されな



- 1 黒褐色土 (7.5YR 3/1)
- 2 灰褐色土 (7.5YR 4/2)
- 3 黒褐色土 (7.5YR 3/1) に明黄褐色土 (10YR 6/8) がブロック状に少量混入



第54図 SB302 測量図・出土遺物実測図

かった。遺物は埋土中より、土師器や須恵器の破片が数点出土した。

出土遺物

255～257は須恵器。255は坏蓋で、口縁端部は内傾する凹面をなす。天井部外面には、ヘラ状工具による線刻（ヘラ記号）を施す。256・257は坏身で、256のたちあがり端部は内傾する。

時期：出土遺物の特徴より、SB303の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5世紀後半とする。

2) 土 坑

3区では、4基の土坑を検出した。第Ⅷ①層上面での検出であり、すべて古墳時代以降の土坑と考えられる。

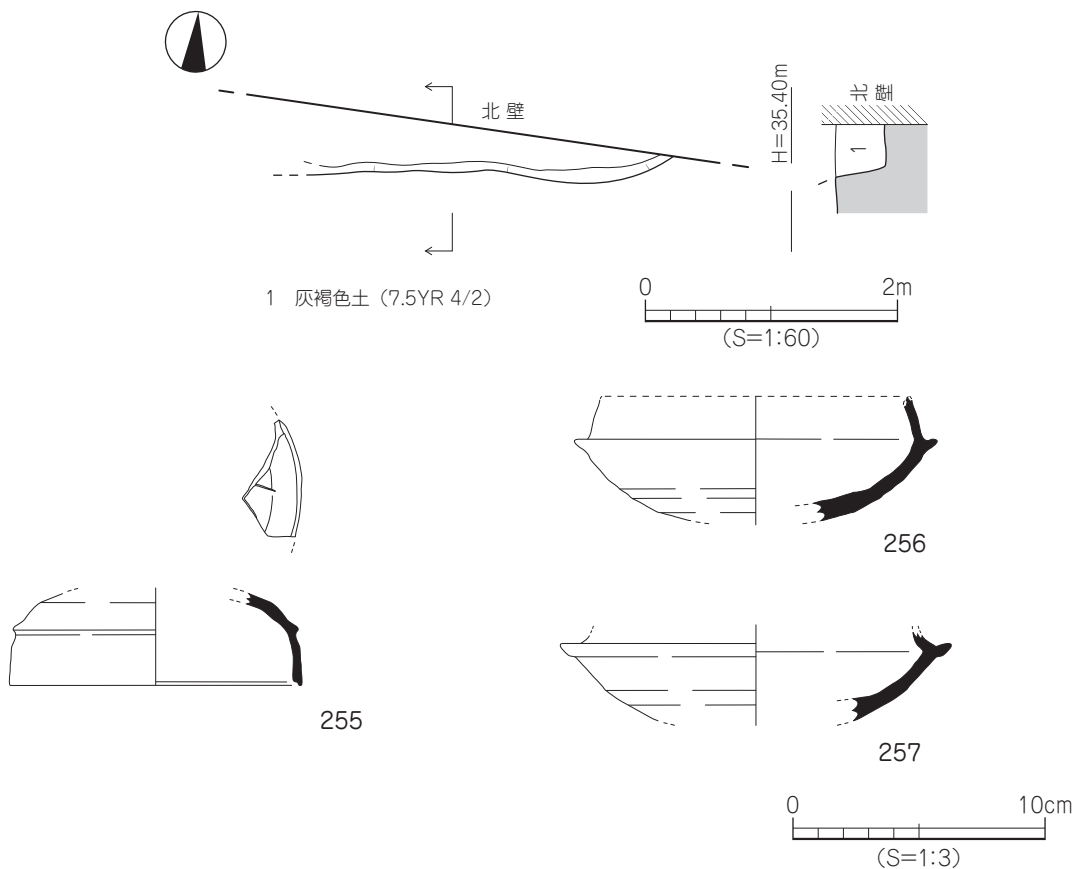
SK301 (第56図)

3区中央部北西寄り J8区に位置する土坑で、平面形態は円形をなし、規模は直径0.80m、深さは検出面下34cmである。断面形態は摺鉢状をなし、埋土は2種類に分層でき、上層は黒褐色土(7.5YR 3/1)、下層は褐灰色土(7.5YR 4/1)である。遺物は埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、土坑埋土より概ね古墳時代以降とする。

SK302 (第56図)

3区中央部南西寄り I8区に位置する土坑で、平面形態は楕円形をなし、規模は長径0.90m、短径0.80



第55図 SB303 測量図・出土遺物実測図

m、深さは検出面下 25cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土(7.5YR 4/1)単層である。遺物は埋土中より土師器片が数点出土したが、図化するものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、土坑埋土より概ね古墳時代以降とする。

SK303 (第 56 図)

3区西側 I7 区に位置する土坑で、土坑西側は調査区外に続く。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は東西検出長 0.66 m、南北長 1.00 m、深さは検出面下 42cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土(7.5YR 4/1)単層である。遺物は埋土中より、縄文土器や土師器の小片が数点出土した。

出土遺物 (図版 24)

258 は縄文土器。浅鉢の体部片で、外面には貝殻条痕がみられる。

時期：出土した土師器や土坑埋土より、概ね古墳時代以降とする。

SK304 (第 56 図)

3区中央部北東寄り J9 区に位置する土坑で、SB301 と重複し、SK304 が後出する。また、土坑西壁は試掘トレンチにより一部削平されている。平面形態は楕円形をなし、規模は長径 0.88 m、短径 0.72 m、深さは検出面下 40cmである。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色土(7.5YR 4/1)単層である。遺物は埋土中より、土師器や須恵器の小片が数点出土した。

出土遺物

259 は須恵器高坏。脚部片で、柱部に方形の透かしを看取する。

時期：出土した遺物の特徴や SB301 との先後関係より、SK304 は古墳時代中期、5 世紀末以降とする。

3) 包含層出土遺物 (第 57 図、図版 24)

3区では第 V 層中より、土師器や須恵器の破片が出土したほか、円筒埴輪の破片が出土している。

260 は土師器の甑。口縁端部は丸く仕上げ、把手部は水平にのびる。外面には、ハケメ調整がみられる。261 は土師質の円筒埴輪。口縁～胴部の破片で、内外面にはハケメ調整がみられる。色調は、内外面共に、にぶい赤褐色である。262・263 は須恵器。262 は坏身片で、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。263 は甕の胴部片で、外面には平行叩き、内面は円弧叩きがみられるが、内面の叩きは一部ナデ消されている。

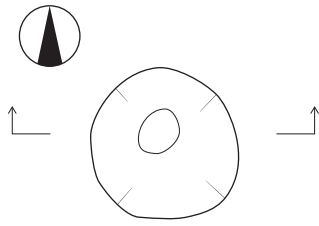
4. 4 区の調査

4区は調査地北東部に位置し、東西長 2.7 m、南北長 7.3 m、調査面積は約 19m²である。4区南壁沿いは地表下 1.5 mの地点まで開発が及んでおり、遺跡が存在していない。

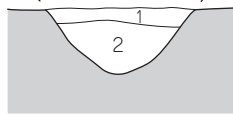
(1) 基本層位

4区では基本層位の第Ⅲ層、第Ⅴ層、及び第Ⅶ層を除く土層を検出した(第 58 図)。

第Ⅰ層：地表下 60cmの地点まで開発が行われているが、前述したとおり、4区南壁沿いは地表下 1.5

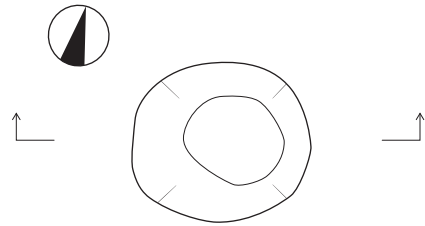


H=35.40m

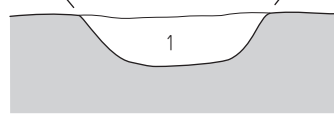


- 1 黒褐色土 (7.5YR 3/1)
- 2 褐灰色土 (7.5YR 4/1)

[SK301]

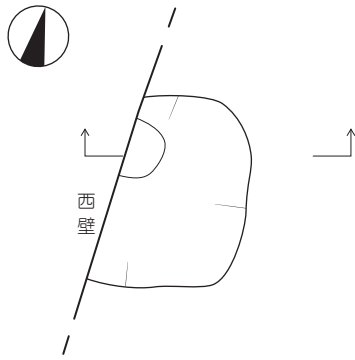


H=35.40m

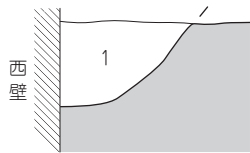


- 1 褐灰色土 (7.5YR 4/1)

[SK302]

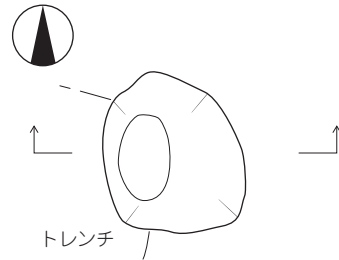


H=35.40m

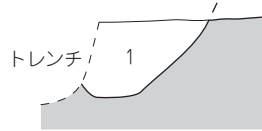


- 1 褐灰色土 (7.5YR 4/1)

[SK303]

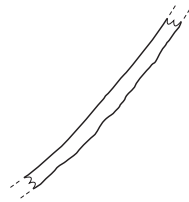
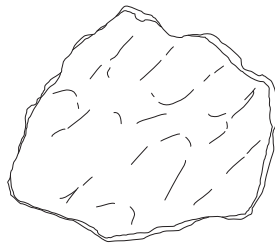
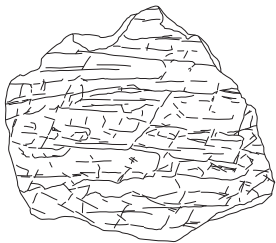
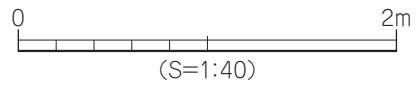


H=35.40m

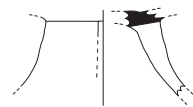


- 1 褐灰色土 (7.5YR 4/1)

[SK304]

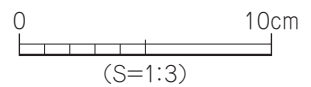


258

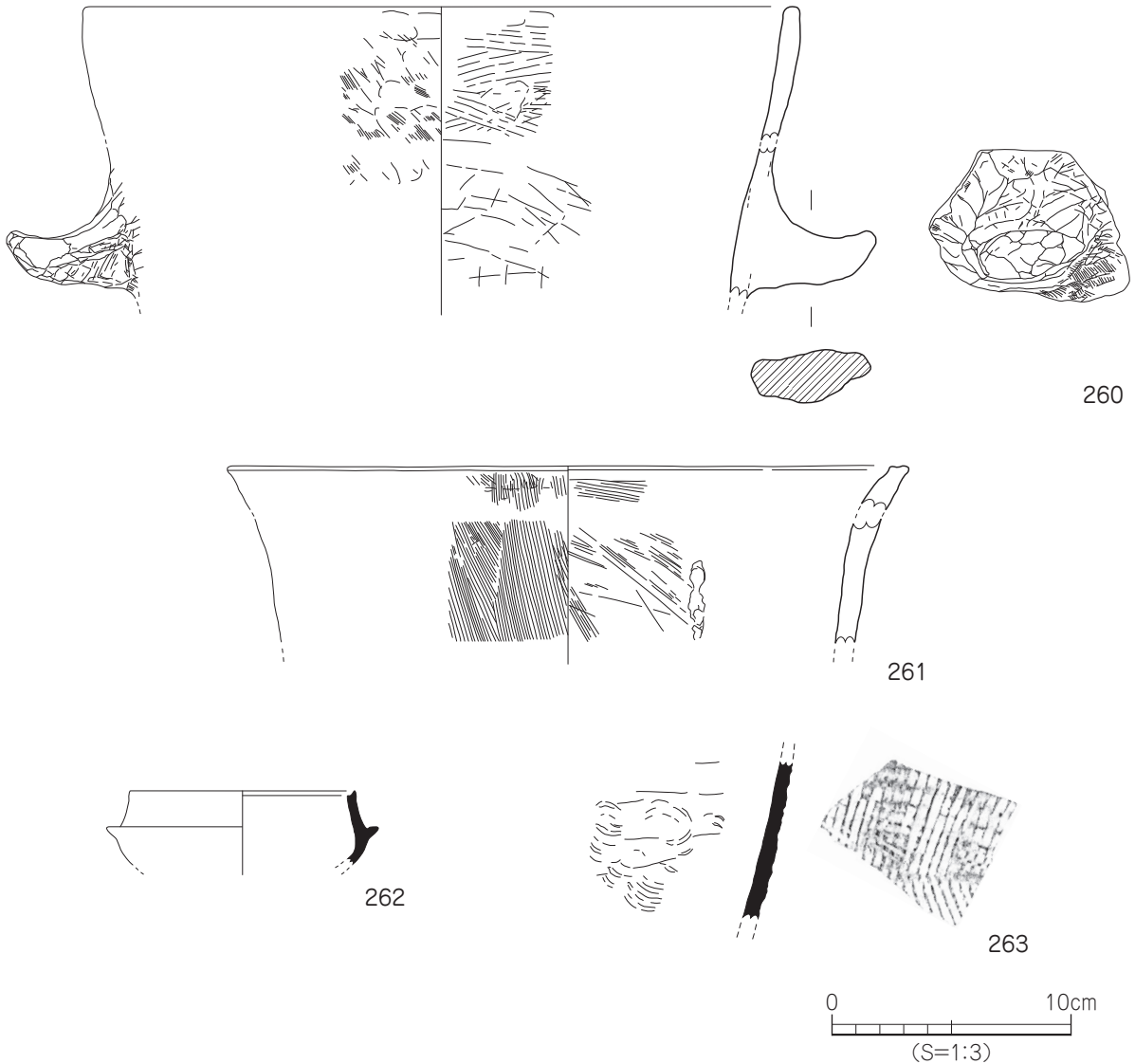


259

SK303 : 258
SK304 : 259



第 56 図 SK301 ~ 304 測量図・出土遺物実測図



第 57 図 3 区第 V 層出土遺物実測図

mの地点まで攪乱が及んでいる。

第Ⅱ層：4区では、第Ⅱ①層と第Ⅱ②層を検出した。

第Ⅱ①層－4区全域にみられ、層厚は10～35cmである。

第Ⅱ②層－4区全域にみられ、層厚は5～10cmである。

第Ⅳ層：4区北半部にみられ、層厚は5～25cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第Ⅵ層：4区ほぼ全域にみられ、層厚は15～50cmである。本層中からは、遺物の出土はない。

第Ⅷ層：4区では、南壁沿いの攪乱内にて第Ⅷ②層を確認した。

第Ⅷ①層－本層上面は、調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると4区北東部から南西部にかけて緩やかな傾斜をなし、北東部の標高は35.4 m、南西部では35.3 mを測る。

第Ⅷ②層－南壁沿いの攪乱にて検出した土層で、本層上面の標高を測量すると、約35 mである。

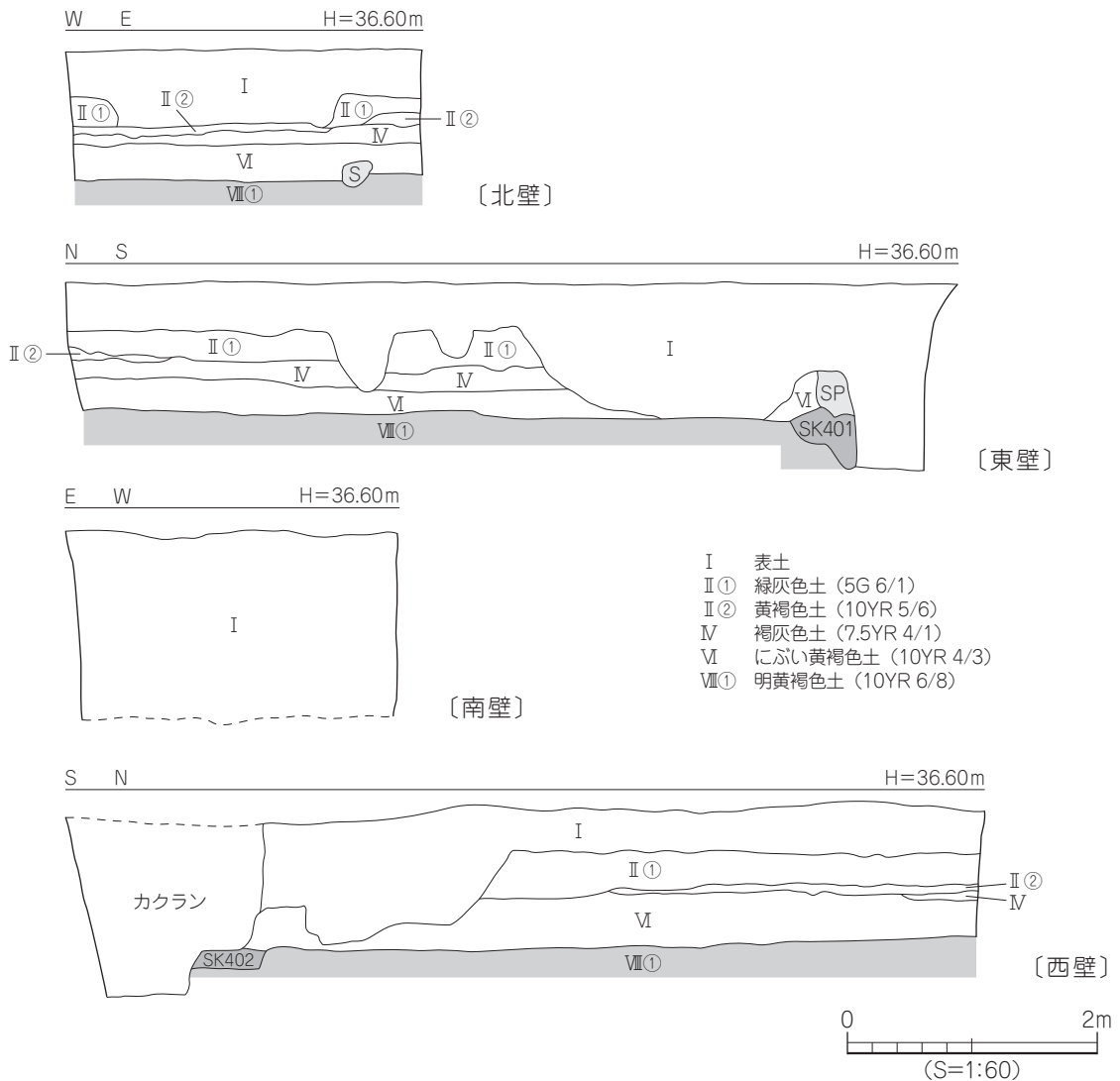
(2) 遺構と遺物

4区では、2基の土坑を検出した(第51図、図版2・11)。このうち、SK402は検出状況から土壙墓と考えられる。

1) 土坑

SK401 (第59図、図版13)

4区南隅I10区に位置する土坑で、土坑西側はSK402と重複し、SK401が先行する。土坑南側は攪乱により削平され、東側は調査区外に続く。第Ⅷ①層上面での検出であり、第Ⅵ層が遺構上面を覆う。平面形態は長形状をなすものと思われ、規模は東西検出長1.30m、南北検出長0.70m、深さは検出面下39cmである。断面形態は逆台形状をなすが、二段掘り構造となっている。埋土は2種類あり、上層はにぶい黄褐色土(10YR 5/4)に黄色土(2.5Y 8/6)がブロック状に少量混入するものであり、下層はにぶい黄橙色土(10YR 6/3)である。土坑内からは、遺物の出土はない。



第58図 4区土層図

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、後述する土坑 SK402 に先行することから、SK401 は概ね弥生時代前期後半以前の遺構とする。

SK402 (第 59 図、図版 13)

4 区南隅 I10 区に位置する土坑で、土坑東側は SK401 と重複し、SK402 が後出する。また、土坑西側は調査区外に続く。第Ⅷ①層上面での検出であり、遺構上面は第Ⅵ層が覆う。平面形態は楕円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.70 m、南北検出長 0.70 m、深さは検出面下 15cm である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土はにぶい黄色土 (2.5Y 6/3) 単層である。土坑基底面は平坦で、起伏は認められない。遺物は土坑中央部北壁沿いの埋土中より、口縁部を欠損した小型壺 (264) が出土した。遺物の出土状況や調査地南方にある持田町 3 丁目遺跡で検出した土壙墓と類似していることなどから、SK402 は土壙墓と考えられる。

出土遺物 (図版 24)

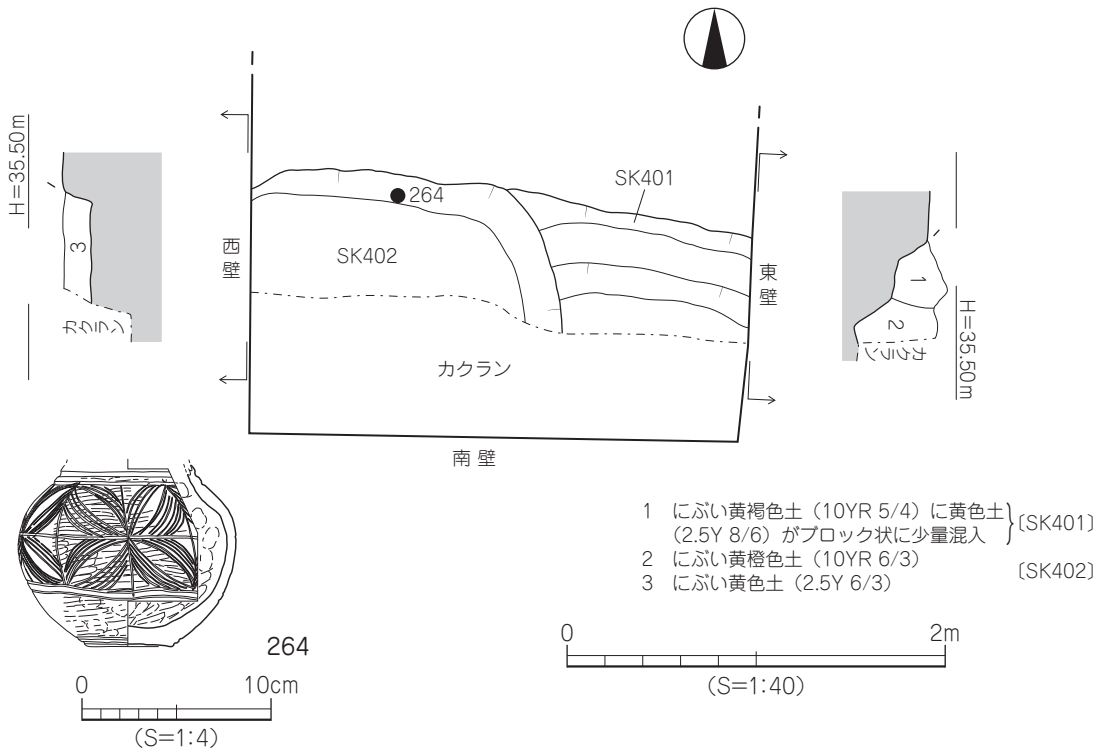
264 は弥生土器。小型壺で、肩部にヘラ描き沈線文 2 条、胴部にはヘラ描き沈線文と木葉文、底部にヘラ描き沈線文を施す。外面には、丁寧なヘラミガキ調整がみられる。

時期：出土した壺形土器の特徴より、SK402 は弥生時代前期後半とする。

2) 地点不明出土遺物 (第 60 図、図版 24)

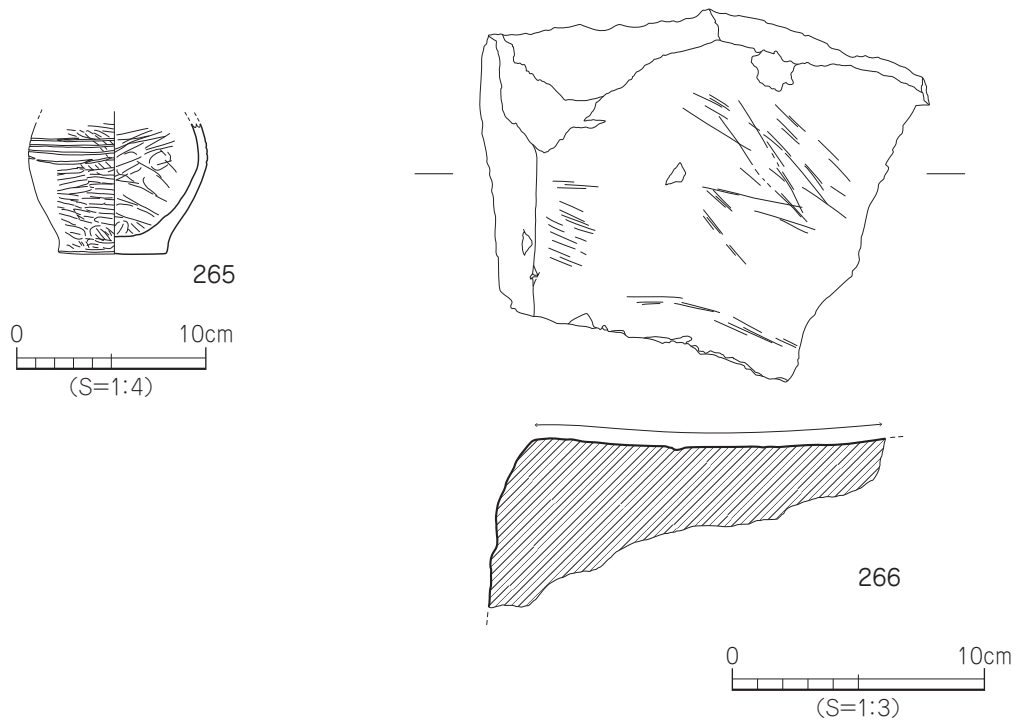
4 区では調査区南側部分の掘り下げ時に、攪乱内より少量の遺物が出土した。

265 は弥生土器。小型壺で、胴部中位にヘラ描き沈線文 4 条を施す。底部は平底で、外面には丁寧なヘラミガキ調整がみられる。なお、出土地点は不明であるが、土坑 SK401 が位置する場所付近か



第 59 図 SK401・SK402 測量図・SK402 出土遺物実測図

ら出土したことから、本来はSK401に伴う可能性が高い遺物である。266は大型の砥石。長さ14.0cm、幅17.7cm、厚さは6.1cmで、1面の砥面をもつ。安山岩製。



第60図 4区地点不明出土遺物実測図

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄 グリッド名を記載。

平面形欄 []: 推定形

規模欄 () は現存値を示す。

埋土欄 複数の土層がある場合には、「黒褐色土 他」と記載。

出土遺物欄 遺物名称を略記した。

例) 縄→縄文土器、弥→弥生土器、土→土師器、須→須恵器、陶→陶磁器、石→石器

(2) 遺物観察表

法量欄 (): 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 天→天井部、つ→つまみ、口→口縁部、た→たちあがり、坏→坏部、体→体部、胴→胴部、脚→脚部、底→底部

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒、黒→黒色酸化土粒 () の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→良好、○→良

調査の概要

表2 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	区	地 区	平面形	規 模 長さ×幅×壁高 (m)	埋 土	出土遺物	時 期
201	2	F3	〔隅丸方形〕	3.20 × (2.80) × 0.18	黒色砂質土	弥・土・須・石	5世紀末
202	2	E1・2	〔隅丸方形〕	(3.50) × (2.55) × 0.20	黒褐色土	縄・弥・土・須・石	5世紀後半
203	2	E1	〔方形〕	(2.50) × (1.45) × 0.16 ~ 0.20	灰黄褐色土	弥・土・須	5世紀末
301	3	I8 ~ J9	〔隅丸方形〕	5.00 × (3.95) × 0.34	黒褐色土 他	土・須	5世紀後半
302	3	J7・8	〔方形〕	(2.40) × (1.55) × 0.20	黒褐色土 他	土・須	5世紀末
303	3	J8	〔方形〕	(2.96) × (0.56) × 0.36	灰褐色土	土・須	5世紀後半

表3 溝一覧

溝 (SD)	区	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	A1 ~ B2	逆台形状	(4.55) × 3.40 × 1.30	灰褐色土 他	縄・弥・土・須・陶	江戸時代前期
201	2	D2 ~ F2	逆台形状	(11.80) × 2.76 × 1.30	灰褐色土 他	縄・弥・土・陶	江戸時代初頭
202	2	D1 ~ E2	レンズ状	(3.38) × 1.70 × 0.30	にぶい黄褐色土 他	弥	弥生時代後期後半
203	2	D・E3	レンズ状	(3.34) × 0.94 × 0.26	にぶい黄褐色土	土・須	5世紀後半
204	2	D2・3 ~ E2	〔U〕字状	(3.82) × 1.66 × 0.70	黒色土 他	縄・弥・石	弥生時代前期後半
205	2	E1・2	〔U〕字状	(1.15) × 1.50 × 0.20	黒褐色土	縄・弥	弥生時代前期後半

表4 自然流路一覧

流路 (SR)	区	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
201	2	E2 ~ F3	レンズ状	(7.00) × (6.00) × 0.40	灰白色粗砂 他	—	縄文時代

表5 土坑一覧

土坑 (SK)	区	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
101	1	A1	〔不整楕円形〕	舟底状	(2.25) × 1.28 × 0.68	黒褐色土 他	縄・石	縄文時代晩期中葉
102	1	A1	〔不整楕円形〕	逆台形状	(1.04) × (0.96) × 0.28	灰黄褐色土 (明黄褐色土混入)	縄・石	縄文時代晩期中葉
103	1	A2	〔円形〕	逆台形状	1.51 × (1.31) × 0.56	黒褐色土 (明黄褐色土混入)	縄・石	縄文時代晩期中葉
104	1	A3	〔楕円形〕	逆台形状	(1.24) × 0.85 × 0.42	灰黄褐色土 (明黄褐色土混入)	縄・石	縄文時代晩期中葉
105	1	A1	〔楕円形〕	逆台形状	0.94 × (0.40) × 0.32	黒褐色土	縄・石	縄文時代晩期中葉
106	1	A3	〔楕円形〕	逆台形状	1.06 × (0.66) × 0.32	暗灰黄色土	縄・石	縄文時代晩期中葉
201	2	D3	〔不整円形〕	逆台形状	1.04 × (0.64) × 0.26	黒褐色土 (明黄褐色土混入)	縄・石	縄文時代晩期中葉
202	2	E2	〔楕円形〕	逆台形状	0.80 × (0.55) × 0.10	黒褐色土	縄	縄文時代晩期中葉
203	2	E3	楕円形	逆台形状	1.50 × 0.60 × 0.18	灰褐色土	土・須	古墳時代以降
204	2	F1・2	楕円形	掘鉢状	0.82 × 0.70 × 0.20	黒褐色土	土	古墳時代以降
205	2	F1	〔円形〕	逆台形状	(0.82) × (0.43) × 0.25	灰褐色土	土	古墳時代以降
301	3	J8	円形	掘鉢状	0.80 × 0.80 × 0.34	黒褐色土 他	土	古墳時代以降
302	3	I8	楕円形	逆台形状	0.90 × 0.80 × 0.25	褐灰色土	土	古墳時代以降
303	3	I7	〔方形〕	逆台形状	1.00 × (0.66) × 0.42	褐灰色土	縄・土	古墳時代以降
304	3	J9	楕円形	逆台形状	0.88 × 0.72 × 0.40	褐灰色土	土・須	5世紀末以降
401	4	I10	〔長方形〕	逆台形状	(1.30) × (0.70) × 0.39	にぶい黄褐色土 他		弥生時代前期後半以前
402	4	I10	〔楕円形〕	逆台形状	(1.70) × (0.70) × 0.15	にぶい黄色土	弥	弥生時代前期後半

遺物観察表

表6 柱穴一覧

柱穴 (SP)	区	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
201	2	D1	円形	0.21 × 0.19 × 0.12	灰褐色土		
202	2	D1	楕円形	0.21 × 0.17 × 0.22	灰褐色土		
203	欠番						
204	2	E2	円形	0.20 × 0.20 × 0.12	灰褐色土	土	
205	2	E2	楕円形	0.30 × 0.27 × 0.17	灰褐色土	土	
206	2	E2	円形	0.26 × 0.25 × 0.18	灰褐色土		
207	2	D1	円形	0.26 × 0.25 × 0.11	灰褐色土		
208	2	D1	楕円形	0.25 × 0.18 × 0.12	灰褐色土		
209	2	E1	円形	0.20 × 0.20 × 0.16	灰褐色土		
210	2	F1	円形	0.23 × 0.22 × 0.28	灰褐色土		
211	2	F1	[楕円形]	0.46 × (0.17) × 0.07	黒褐色土		
212	2	E1	円形	0.20 × 0.19 × 0.09	灰褐色土	土・須	
213	2	D1	楕円形	0.25 × 0.18 × 0.10	灰褐色土		
214	2	E2	楕円形	0.30 × 0.27 × 0.14	灰褐色土	土	
215	2	E3	円形	0.22 × 0.20 × 0.17	灰褐色土		
216	2	E3	円形	0.25 × 0.23 × 0.12	灰褐色土		
217	2	F2	円形	0.30 × 0.28 × 0.20	灰褐色土	須	
218	2	F2	楕円形	0.30 × 0.24 × 0.18	灰褐色土		
219	2	F2	楕円形	0.34 × 0.30 × 0.13	灰褐色土		
220	2	F2・3	楕円形	0.33 × 0.26 × 0.17	灰褐色土		
221	2	F2	楕円形	0.30 × 0.26 × 0.15	灰褐色土		
222	2	F1	楕円形	0.27 × 0.20 × 0.11	灰褐色土		
223	2	F1	円形	0.44 × 0.44 × 0.67	黒褐色土	土	
224	2	F1	円形	0.20 × 0.20 × 0.56	灰褐色砂質土		
225	2	F1	円形	0.25 × 0.24 × 0.21	灰褐色土		
226	2	E1	円形	0.13 × 0.13 × 0.09	黒褐色土	土・須	
227	2	E1	円形	0.30 × 0.30 × 0.25	黒褐色土		SB202 主柱穴

表7 SD101 出土遺物観察表 陶磁器

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	釉調		胎土(色) 焼成	備考	図版
				外面	内面			
1	碗	口径 (16.4) 底径 5.6 器高 6.8	唐津焼。復元完形品。体部下半と底部外面及び高台は無釉。1/2の残存。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	赤褐色 ◎		14
2	碗	口径 (10.4) 底径 5.0 器高 6.6	唐津焼。体部外面に鉄釉による文様あり。体部下半と底部外面及び高台は無釉。三日月状高台。1/3の残存。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	にぶい赤褐色 ◎		14
3	碗	口径 (10.6) 底径 5.2 器高 7.5	美濃焼。体部外面に鉄釉による文様あり。体部下半と底部外面及び高台は無釉。底部完形。口縁部1/8の残存。	灰白色	灰白色	にぶい黄色 ◎		14
4	碗	口径 (11.2) 残高 3.5	肥前系。口縁部外面に圏線2条あり。小片。	緑灰色	緑灰色	灰色 ◎		

調査の概要

SD101 出土遺物観察表 陶磁器

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	釉 調		胎土 (色) 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
5	皿	口径 12.6 底径 3.8 器高 5.0	唐津焼。四方皿。復元完形品。内面及び口縁部外面に鉄釉による文様あり。底部外面及び高台は無釉。	オリーブ灰色	オリーブ灰色	にぶい橙色 ◎		14
6	皿	口径 12.4 底径 4.4 器高 4.0	唐津焼。輪花皿。復元完形品 (2/3 の残存)。底部内面に重ね焼きによる痕跡 3箇所あり。体部下半と底部外面及び高台は無釉。	暗オリーブ灰色	暗オリーブ灰色	灰白色 ◎		14
7	皿	口径 (10.0) 底径 3.8 器高 3.1	唐津焼。体部下半と底部外面及び高台は無釉。1/5 の残存。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	にぶい赤褐色 ◎		
8	向付	残高 3.7	肥前系。1/4 の残存。	褐色・灰色	褐色・灰色	にぶい橙色 ◎		15
9	瓶	残高 3.6	胴部小片。外面は全面施釉、内面は部分的に釉薬がみられる。	暗オリーブ褐色	褐色 (一部)	褐色 ◎		15
10	瓶	残高 4.2	胴部小片。外面は全面施釉、内面は線状に釉薬がみられる。	暗オリーブ褐色	灰色	褐色 ◎		15
11	徳利	残高 7.8	頸部片。内面は全面施釉、外面は部分的に釉薬がみられる。	暗オリーブ褐色 (一部)	暗オリーブ褐色	灰色 ◎		15
12	碗	口径 (9.3) 底径 4.0 器高 3.8	白磁。丸味のある高台。全面施釉 (高台畳付は無釉)。1/3 の残存。	透明	透明	白色 ◎		15
13	皿	残高 3.0	白磁。小片。内外面は全面施釉。	透明	透明	白色 ◎		

表 8 SD101 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
14	坏	口径 9.6 残高 3.4	内外面に溶解物が付着。口縁部 3/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) 金 ◎		15
15	坏	底径 (4.6) 残高 1.8	底部 1/3 の残存。外面に回転糸切り痕あり。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長 (1) ◎		
16	高坏	残高 4.5	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は凹む。天井部と口縁部の境に稜あり。1/3 の残存。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ ㊨回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 黒 ◎		
17	坏	底径 (7.6) 残高 1.5	高台は体底部境界より内側に付き、「ハ」の字状をなす。1/4 の残存。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
18	深鉢	残高 1.9	口縁部小片。口唇部に刻目あり。	㊩ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・ナデ	にぶい黄橙色 黒褐色	石・長 (1) 金 ◎		15
19	深鉢	残高 4.1	肩部小片。外面に斜格子目状の沈線あり。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 黒褐色	石・長 (1) 金 ◎		15
20	浅鉢	口径 (27.2) 残高 3.0	胴部は強く張り出し、口縁部は外反、口縁部内面は粘土紐を貼り付け肥厚する。	ミガキ	ミガキ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1) ◎		15
21	浅鉢	残高 5.0	口縁～肩部片。口縁部は強く外反し、肩部に 2 列の刺突文あり。	ケズリ	ナデ	にぶい黄褐色 黒褐色	石・長 (1) ◎		15
22	浅鉢	残高 3.5	口縁部は長く緩やかに外反し、口縁部内面は丸味のある断面三角形の粘土紐を貼り付け肥厚する。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 褐灰色	密 ◎		15
23	浅鉢	残高 3.9	口縁部は内湾し、口縁部内面に沈線あり。	ミガキ	ミガキ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1) 金 ◎		15
24	浅鉢	残高 3.5	口縁部内面はカマボコ状に肥厚し、沈線あり。	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1) ◎	黒斑	15

遺物観察表

SD101 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)		形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
					外面	内面				
25	浅鉢	残高	2.1	三角形の突起を貼付け、口縁部内面に沈線あり。	ミガキ	ミガキ	褐灰色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎		15
26	浅鉢	残高	4.9	口縁部は僅かに外反し、鱗状の突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		15
27	浅鉢	残高	2.5	鱗状の突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1) ◎		15
28	浅鉢	残高	2.4	鱗状の突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1) ◎		15
29	深鉢	底径 残高	4.5 3.0	上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長 (1) 金◎		15
30	深鉢	底径 残高	4.8 2.3	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 褐灰色	石・長 (1) ◎		15
31	壺	残高	3.3	頸部内面に凸帯を貼り付ける。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎		

表9 SK101 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)		形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
					外面	内面				
32	深鉢	残高	3.5	外反口縁。無文。	ナデ	ケズリ→ナデ	橙色 黒色	石・長 (1) ◎	黒斑	16
33	深鉢	残高	4.3	外反口縁。無文。	ナデ	条痕	褐色 黒色	石・長 (1) ◎	黒斑	16
34	深鉢	残高	2.8	外反口縁。無文。	ケズリ	マメツ	黒色 黒色	石・長 (1) ◎		16
35	深鉢	口径 (33.4) 残高	3.4	外反口縁。口唇部に刻目あり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		16
36	深鉢	残高	2.0	外反口縁。口唇部に刻目あり。	条痕	ナデ	黒色 黒色	石・長 (1) 金◎		16
37	深鉢	残高	3.3	外反口縁。口唇部に刻目、口縁部内面に刺突文あり。	条痕	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		16
38	深鉢	口径 (38.7) 残高	5.3	外反口縁。口唇部に刻目、口縁部内面に刺突文2列あり。	条痕	ミガキ	褐灰色 黒色	石・長 (1) 金◎	黒斑	16
39	深鉢	残高	3.7	外反口縁。口唇部に刻目、口縁部外面に沈線1条、内面に刺突文と沈線1条あり。	ケズリ	ナデ	にぶい褐色 黒色	石・長 (1) 金◎	黒斑	16
40	深鉢	残高	2.8	外反口縁。外面に斜格子目状の沈線あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 黒色	石・長 (1) 金◎	黒斑	16
41	深鉢	残高	3.9	外反口縁。口唇部に刻目、外面に斜格子目状の沈線あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 黒色	石・長 (1) 金◎	黒斑	16
42	深鉢	残高	4.3	外反口縁。鱗形の突起を貼り付ける。	ケズリ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		16
43	深鉢	残高	4.0	頸～肩部片。	ナデ	ナデ	褐色 黒色	石・長 (1) 角閃石◎		16
44	深鉢	残高	2.8	頸部片。外面にナナム方向の沈線あり。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 黒色	石・長 (1) ◎		16

調査の概要

SK101 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
45	深鉢	残高 3.7	頸部片。外面にヨコ方向の沈線文1条とナナメ方向の平行沈線3条あり。	ケズリ	ナデ	にぶい橙色 黒色	石・長 (1) 金 ◎		16
46	深鉢	残高 2.6	頸部片。外面にヨコ方向の平行沈線3条と斜線文あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黒褐色	石・長 (1) ◎		16
47	深鉢	残高 3.1	頸部片。外面に「ハ」の字状の沈線あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黒褐色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	16
48	深鉢	残高 1.6	頸部片。外面に斜格子目状の沈線あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黒褐色	石・長 (1) ◎		16
49	深鉢	残高 4.2	頸部片。外面にヨコ方向の凹線1条と、「X」字状の沈線あり。	ケズリ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) 金 ◎		16
50	深鉢	残高 2.4	肩部片。外面に刺突文あり。	ケズリ	ナデ	褐色 黒色	石・長 (1) ◎		16
51	深鉢	残高 4.6	肩部片。外面にタテ方向の平行沈線3条と刺突文1列あり。	ケズリ	条痕	にぶい褐色 黒色	石・長 (1) 金 ◎		16
52	深鉢	残高 2.0	肩部片。外面に沈線1条あり。	ミガキ	ミガキ	褐灰色 灰褐色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	16
53	浅鉢	残高 1.4	外反口縁。口唇部に刻目あり。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	石・長 (1) 金 ◎		16
54	浅鉢	残高 1.5	外反口縁。口縁部外面に刻目、内面に刺突文あり。	ナデ	ミガキ	にぶい橙色 褐色	石・長 (1) ◎		16
55	浅鉢	残高 1.8	口縁部は短く外反、内面に刺突文2列あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 黒色	石・長 (1) ◎	黒斑	16
56	浅鉢	残高 1.5	口縁部は内方へ肥厚する。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		16
57	浅鉢	残高 2.2	口縁部は僅かに外反し、口縁端部は内方へ肥厚する。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		16
58	浅鉢	残高 1.8	口縁部は外反し、口縁端部は内方へ肥厚する。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		16
59	浅鉢	残高 1.6	口縁部は外反し、口縁端部は内方へ肥厚する。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		16
60	浅鉢	残高 2.3	口縁部は外反し、口縁端部は内方へ肥厚、口縁部内面に刺突文あり。	ミガキ	ミガキ	黒褐色 黒色	石・長 (1) 金 ◎		16
61	浅鉢	残高 1.0	口縁部内面に丸味のある断面三角形の粘土紐を貼り付ける。小片。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		17
62	浅鉢	残高 2.0	外反口縁。口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1) 金 ◎		17
63	浅鉢	残高 2.2	外反口縁。口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付ける。口縁部外面に刻目あり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒色	石・長 (1) ◎		17
64	浅鉢	口径 (36.2) 残高 2.4	口縁部は内方へ肥厚し、鱗状の突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1) ◎		17
65	浅鉢	残高 2.1	口縁部は内方へ肥厚し、鱗状の突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		17
66	浅鉢	残高 1.5	口縁部内面に扁平な粘土紐を貼り付け、沈線を施す。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) 金 ◎		17

遺物観察表

SK101 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
67	浅鉢	残高 2.2	口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、口縁部は波状をなす。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		17
68	浅鉢	残高 2.1	胴部小片。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1) ◎		17
69	浅鉢	残高 2.0	胴部に屈曲部あり。器壁は薄い。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒色	石・長 (1) ◎		17
70	浅鉢	残高 3.0	胴部に屈曲部あり。	ミガキ	ミガキ	黒褐色 黒褐色	石・長 (1) ◎		17
71	浅鉢	残高 2.0	胴部に屈曲部あり。	ケズリ	ナデ	にぶい橙色 黒色	石・長 (1) ◎		17
72	深鉢	底径 (7.0) 残高 3.6	上げ底。1/5 の残存。	ケズリ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1) ◎		17
73	深鉢	残高 4.2	底部片。1/6 の残存。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		17

表 10 SK101 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
74	磨石	完形	安山岩	6.4	4.9	3.0	122.61		17
75	不明品	ほぼ完形	砂岩	15.5	7.3	2.8	385.86		17
76	スクレイパー	ほぼ完形	黒曜石	3.8	2.7	0.5	4.68		17
77	スクレイパー	完形	黒曜石	2.5	1.1	0.3	0.77		17
78	軽石	2/3		3.6	3.6	1.2	8.48	凹打痕あり	17

表 11 SK101 出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)		
79	白玉	完形	碧玉	0.7	0.2	0.34	0.24		17

表 12 SK102 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
80	深鉢	残高 2.6	肩部片。外面に平行沈線あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 黒褐色	石・長 (1) 金◎		17
81	深鉢	残高 2.6	肩部片。外面にナナメ方向の沈線あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1) 金◎		17
82	深鉢	残高 2.5	肩部片。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 黒褐色	石・長 (1) ◎		17
83	浅鉢	残高 2.5	緩やかに外反する口縁部。内面に沈線状の凹みあり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1) 金◎		17
84	浅鉢	残高 3.9	緩やかに外反する口縁部。口縁部内面に丸味のある断面三角形の粘土紐を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1) 金◎	黒斑	17
85	浅鉢	残高 1.2	口縁部内面に小さな断面三角形の粘土紐を貼り付ける。小片。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		17

調査の概要

SK102 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
86	浅鉢	残高 3.1	口縁部内面に小さな断面三角形の粘土紐を貼り付け、鱗状突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1) ◎		17
87	浅鉢	残高 1.7	屈曲部上位に刻目あり。小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1) ◎		17
88	深鉢	底径 (5.0) 残高 2.3	上げ底。	板ナデ(マメツ)	ナデ (マメツ)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		17

表 13 SK102 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
89	スクレイパー	ほぼ完形	サヌカイト	3.3	3.4	0.7	9.67		17
90	スクレイパー	一部欠損	サヌカイト	2.5	3.6	0.8	5.84		17

表 14 SK103 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
91	深鉢	残高 3.2	口唇部に刻目あり。小片。	板状工具による ナデ	板状工具による ナデ	黒色 黒色	石・長 (1) ◎		18
92	深鉢	残高 1.8	口唇部に刻目あり。小片。	板状工具による ナデ	板状工具による ナデ	黒色 黒色	石・長 (1) ◎		18
93	深鉢	残高 2.2	口唇部に刻目、口縁部内面に刺突文1列あり。小片。	板状工具による ナデ	板状工具による ナデ	にぶい褐色 黒色	石・長 (1) ◎		18
94	深鉢	残高 3.8	口唇部に刻目、口縁部内外面に沈線あり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎	黒斑	18
95	深鉢	残高 4.8	外面に削出しによる段あり。	ケズリ	ナデ	にぶい橙色 黒色	石・長 (1) 金 ◎		18
96	深鉢	残高 6.5	外面に沈線によるモチーフあり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1) ◎		18
97	深鉢	残高 2.5	外面に「X」字状の沈線あり。小片。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		18
98	深鉢	残高 3.5	小片。	条痕	ナデ	褐色 黒色	石・長 (1) ◎		18
99	浅鉢	残高 1.9	口縁部は屈曲部で短く外反し、内面にカマボコ状の粘土紐を貼り付ける。小片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		18
100	浅鉢	残高 1.2	口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付ける。小片。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		18
101	浅鉢	残高 2.3	口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、口縁部に刻目あり。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		18
102	浅鉢	残高 3.0	口縁部内面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、口唇部に三角形の突起あり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1) ◎		18
103	浅鉢	残高 1.8	口縁部は内方に肥厚し、鱗状突起を貼り付ける。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	石・長 (1) ◎		18
104	浅鉢	残高 3.4	口縁部は内方に肥厚し、鱗状突起を貼り付ける。	ミガキ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎	黒斑	18

遺物観察表

SK103 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
105	浅鉢	残高 2.9	口縁部は、屈曲部で外反する。	ミガキ	ミガキ	にぶい 橙色 にぶい 橙色	石・長 (1) ◎		18
106	浅鉢	残高 1.5	胴部小片。屈曲は強い。小片。	ミガキ	ミガキ	黒色 黒色	石・長 (1) ◎		18
107	深鉢	底径 (4.8) 残高 2.2	上げ底。	ケズリ	ミガキ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	18

表 15 SK104 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
108	深鉢	残高 2.5	口唇部に刻目、口縁部内面に刺突文1列あり。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1) ◎	黒斑	18
109	深鉢	残高 2.6	口唇部に刻目、口縁部外面に沈線あり。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1) ◎	黒斑	18
110	深鉢	残高 2.0	外面に沈線3条と沈線2条を格子目状に施文。	ナデ	ナデ	褐灰色 黒色	石・長 (1) ◎	黒斑	18
111	深鉢	残高 3.3	外面に斜線文2条あり。	ケズリ	ナデ	にぶい 橙色 褐灰色	石・長 (1) ◎		18
112	浅鉢	口径 (9.8) 残高 2.8	口縁部は内湾し、外面に沈線と弧文あり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	密金 ◎		18
113	浅鉢	残高 2.1	口縁部に丸味のある断面三角形の粘土紐を貼り付け、鱗状突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	にぶい 橙色 にぶい 橙色	密金 ◎	黒斑	18
114	浅鉢	残高 2.8	口縁部は肥厚し、鱗状突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒色	石・長 (1) ◎		18
115	浅鉢	残高 2.4	底部片。外面に赤色顔料が付着する。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1) ◎	赤色顔料	18

表 16 SK104 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
116	スクレイパー	ほぼ完形	サヌカイト	2.5	3.1	0.4	3.99		

表 17 SK105 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
117	深鉢	残高 3.7	口縁部は内方に肥厚し、内面に刺突文2列あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 黒色	石・長 (1) ◎		19
118	深鉢	残高 3.4	頸部片。外面に斜格子目状の沈線あり。	ミガキ	ミガキ	にぶい 黄橙色 にぶい 黄橙色	石・長 (1) ◎		19
119	浅鉢	残高 2.4	口縁部は内方に肥厚する。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		19
120	浅鉢	残高 2.9	口縁部は内方に肥厚する。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒色	石・長 (1) ◎	黒斑	19
121	浅鉢	残高 2.8	口縁部は内方へ肥厚し、口唇部に鱗状突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		19

調査の概要

SK105 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
122	浅鉢	残高 2.1	口縁部は短く屈曲し、内面にカマボコ状の粘土紐を貼り付け、沈線1条あり。	ミガキ	ミガキ	黒色 黒色	石・長 (1) ◎		19
123	浅鉢	底径 2.6 残高 1.7	上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1) ◎		19

表 18 SK106 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
124	深鉢	残高 3.7	頸部片。外面に格子目状の沈線あり。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		19
125	深鉢	残高 3.4	頸部片。外面に斜格子目状の沈線あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰白色	石・長 (1) 金◎		19
126	浅鉢	残高 1.5	口縁部は内方へ肥厚する。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		19
127	浅鉢	残高 2.0	外反口縁。口縁部は内方へ肥厚する。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒色	石・長 (1) 金◎	黒斑	19
128	浅鉢	残高 2.0	胴部片。屈曲部あり。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 黒褐色	石・長 (1) 金・赤◎		19
129	浅鉢	底径 (5.3) 残高 1.7	平底。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		19

表 19 1区包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
130	深鉢	残高 5.1	外反口縁。口唇部に刻目あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 黒色	石・長 (1) 金◎	黒斑	
131	深鉢	残高 4.0	外反口縁。口縁部に円孔あり。外面にモチーフ状の沈線、内面に沈線状の凹みあり。	ナデ	ナデ	灰褐色 黒褐色	石・長 (1) ◎		19
132	深鉢	残高 3.3	外反口縁。無文。	ケズリ	条痕	灰褐色 黒色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	
133	深鉢	残高 4.3	頸部片。外面に斜格子目状の沈線あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 黒色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	19
134	深鉢	残高 4.4	頸部片。外面に3条1組の平行沈線を格子目状に施文する。	ケズリ	ナデ	にぶい橙色 黒色	石・長 (1) 金◎	黒斑	19
135	深鉢	残高 8.5	頸~肩部片。頸部に径0.5cm大の円孔1ヶあり。	条痕	条痕	褐色 黒色	石・長 (1) 金◎		
136	浅鉢	口径 (34.0) 残高 5.3	大きく緩やかに外反する口縁部。口縁部内面に粘土紐を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1) 金◎		
137	浅鉢	残高 2.6	外反する口縁部。口縁部内面に粘土紐を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 黒褐色	石 (1) ◎		
138	浅鉢	残高 3.9	外反する口縁部。口縁部内面に粘土紐を貼り付け、口唇部に鱗状突起を貼り付ける。	ケズリ	ナデ	灰褐色 黒色	石・長 (1) 角閃石◎		
139	浅鉢	残高 2.2	外反する口縁部。口縁部内面は肥厚し、突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		
140	浅鉢	残高 3.9	外反する口縁部。口縁部内面は肥厚し、沈線状の凹みあり。突起を貼り付ける。	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎	黒斑	

遺物観察表

1区包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
141	浅鉢	残高 3.9	口縁部は、上方へ屈曲する。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) 金◎		
142	紡錘車	直径 4.5 厚さ 1.1	転用品。側面を打ち欠き成形している。	ナデ	ナデ	橙色 黒色	石・長 (1~2) ◎		19
143	甕	口径 (28.4) 残高 5.4	内湾口縁。口縁部中位が凹む。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(5本/cm)	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) ◎		

表 20 1区包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
144	石庖丁	完存品	サヌカイト	5.6	9.4	1.0	66.53	打製	19
145	石鋸	ほぼ完形品	緑色片岩	5.6	12.6	1.3	207.16		19
146	石鋸	先端部を欠損	サヌカイト	2.4	1.8	0.4	2.41	打製	19
147	石鋸	1/2	サヌカイト	1.4	1.6	0.2	0.55	打製	19

表 21 SB201 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
148	甕	口径 (16.2) 残高 2.9	内湾口縁。口縁端部は内傾する面をもつ。1/4の残存。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	褐色 にぶい褐色	石・長 (1~4) ◎		21
149	甕	口径 (20.1) 残高 3.2	外反口縁。口縁端部は丸い。1/5の残存。	ヘラミガキ→ナデ	ハケ (7本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1~2) 金◎		
150	壺	口径 (17.6) 残高 2.1	外反口縁。口縁端部は「コ」字状をなす。小片。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
151	鉢	口径 (19.6) 残高 9.2	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	にぶい赤褐色 褐灰色	石・長 (1~2) ◎		

表 22 SB201 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
152	敲石	ほぼ完形	安山岩	11.0	6.3	5.2	445.90		21
153	スクレイパー	ほぼ完形	サヌカイト	4.7	6.4	0.9	34.00		21
154	袖石	ほぼ完形	安山岩	32.5	11.3	8.7	4,850.00	カマドに付設	21

表 23 SB202 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
155	甕	口径 (18.4) 残高 6.1	内湾口縁。口縁部中位に稜あり。口縁端部は内傾する。1/3の残存。	ハケ→ナデ	㊦ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1~3) 金◎		21
156	椀	口径 (11.9) 残高 4.0	口縁端部は丸く仕上げる。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1~3) 金◎		21
157	高坏	口径 (16.2) 残高 3.5	坏部小片。口縁部は短く外反する。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1) ◎		

調査の概要

SB202 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
158	高坏	残高 3.5	坏部片。坏脚部の接合は充填技法による。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	密 ◎		
159	高坏	残高 6.6	円錐状の柱部。柱裾部境界内面に明瞭な稜あり。充填技法。	ナデ	ヘラケズリ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~2) ◎		
160	坏蓋	口径 (12.2) 残高 3.9	扁平な天井部。口縁端部は内傾する。1/2の残存。	㊦回轉ヘラケズリ1/2 ㊧回轉ナデ	回轉ナデ	灰色 灰色	密 ◎		21
161	高坏	残高 2.5	脚部小片。半截竹管文2列あり。	ヘラミガキ	マメツ	灰褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ◎		
162	深鉢	残高 4.3	口縁端部に刻目、外面に斜格子目状の線刻あり。小片。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 金 ◎		
163	浅鉢	口径 (31.4) 残高 3.4	口縁部は内方に肥厚し、胴部に稜をもつ。小片。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1) 金 ◎		

表 24 SB202 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
164	台石	一部欠損	花崗岩	13.4	11.9	5.5	1,122.09		

表 25 SB203 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
165	坏蓋	残高 2.2	天井部小片。	回轉ヘラケズリ	回轉ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
166	高坏	残高 2.1	脚部片。刺突文2列と、その間に刻目あり。円孔を看取する。	ヘラミガキ	ハケ→ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~2) ◎		

表 26 SD201 出土遺物観察表 陶磁器

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	釉 調		胎土 (色) 焼成	備考	図版
				外面	内面			
167	碗	口径 10.9 底径 5.1 器高 6.8	唐津焼。復元完形品 (4/5の残存)。体部下半と底部外面及び高台は無釉。	灰オリーブ色 (透明)	暗オリーブ色	にぶい赤褐色 ◎		20
168	碗	口径 (9.5) 底径 3.4 器高 5.5	唐津焼。体部下半と底部外面及び高台は無釉。1/2の残存。	灰オリーブ色 (透明)	灰オリーブ色 (透明)	にぶい赤褐色 ◎		
169	碗	口径 (12.1) 残高 3.2	口縁部小片。内外面は全面施釉。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	灰色 ◎		
170	碗	底径 (3.8) 残高 2.3	唐津焼。体部下半と底部外面及び高台は無釉。1/3の残存。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	にぶい赤褐色 ◎		
171	皿	口径 (14.5) 底径 5.1 器高 4.0	唐津焼。復元完形品。体部下半と底部外面及び高台は無釉。2/3の残存。	灰白色	灰白色	灰黄色 ◎		20
172	皿	口径 (13.0) 底径 (4.5) 器高 3.6	唐津焼。体部上位に稜をもつ。内外面に白褐色の釉が部分的に残る。1/3の残存。	灰白色	灰白色	にぶい赤褐色 ◎		
173	皿	口径 (12.9) 底径 5.0 器高 4.7	唐津焼。輪花皿。体部下半と底部外面及び高台は無釉。1/4の残存。	灰赤色	灰赤色	にぶい赤褐色 ◎		20
174	皿	口径 (11.8) 底径 5.2 器高 3.2	輪花皿。体部下半と底部外面及び高台は無釉。1/2の残存。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	にぶい橙色 ◎		20

遺物観察表

SD201 出土遺物観察表 陶磁器

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	釉 調		胎土 (色) 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
175	皿	口径 (11.7) 底径 4.9 器高 3.9	唐津焼。輪花皿。体部下半と底部外面及び高台は無釉。1/3の残存。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	にぶい橙色 ◎		
176	皿	口径 (12.2) 残高 3.2	輪花皿。内外面は全面施釉。小片。	黄褐色	黄褐色	にぶい橙色 ◎		
177	皿	口径 (12.0) 残高 2.1	輪花皿。内外面は全面施釉。小片。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	灰色 ◎		
178	皿	口径 (13.7) 残高 2.5	輪花皿。体部外面に重ね焼きによる別個体が付着。内外面は全面施釉。小片。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	灰色 ◎		20
179	皿	口径 (13.9) 器高 4.0	輪花皿。内外面は全面施釉。小片。	浅黄色	浅黄色	灰色 ◎		
180	皿	口径 (11.4) 底径 (6.2) 器高 2.2	志野焼。菊形皿。丸味のある小さな高台をもち、底部外面に重ね焼きの痕跡あり。高台畳付部分は無釉。1/2の残存。	灰白色	灰白色	灰白色 ◎		20
181	皿	口径 (13.0) 残高 3.1	体部中位に稜をもつ。内外面は全面施釉。小片。	灰色	灰色	灰色 ◎		
182	皿	口径 (24.8) 残高 2.1	口縁部は僅かに内湾する。内外面は全面施釉。小片。	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	灰色 ◎		20
183	皿	口径 (33.8) 残高 1.0	口縁部小片。全面施釉。	灰色→褐色	灰色	灰色 ◎		
184	皿	底径 4.7 残高 1.9	底部内面に重ね焼きの痕跡が二箇所あり。体部下半と底部外面及び高台は無釉。	にぶい黄色	にぶい黄色	浅黄色 ◎		20
185	皿	底径 3.2 残高 1.1	小さな高台。外面は無釉。	無釉	灰色	浅黄色 ◎		
186	土瓶	口径 (9.9) 残高 2.0	京焼。口縁部は短く外反。肩部に段をもつ。口唇部の内外面は無釉。1/6の残存。	オリーブ灰色	オリーブ灰色	浅黄色 ◎		
187	土瓶	底径 (7.6) 残高 1.9	上げ底。1/4の残存。	無釉	オリーブ黄色	灰色 ◎		
188	壺	残高 5.1	肩部に屈曲部あり。内面には部分的に釉薬あり。小片。	暗オリーブ褐色	暗オリーブ褐色 (一部)	にぶい橙色 ◎		20
189	壺	残高 4.3	小片。内面には部分的に釉薬あり。	暗オリーブ褐色	暗オリーブ褐色 (一部)	青灰色 ◎		20
190	壺	底径 (6.1) 残高 5.7	やや上げ底。体部下半と底部外面、及び内面は無釉。1/3の残存。	灰色	無釉	にぶい橙色 ◎		20
191	壺	底径 (13.0) 残高 1.8	上げ底。内面には釉薬が部分的にあり。小片。	無釉	灰オリーブ色 (一部)	灰色 ○		
192	甕	口径 (20.0) 残高 4.6	唐津焼。口縁部は下方に垂下し、胴上部に稜あり。1/6の残存。	灰色	灰色	赤褐色 ◎		21
193	皿	口径 (10.2) 底径 (6.0) 器高 2.6	輪花皿。内面に染付文様あり。全面施釉 (高台畳付は無釉)。1/2の残存。	透明	透明	白色 ◎		21
194	皿	口径 (25.4) 残高 4.3	大型品。内外面は全面施釉。小片。	灰白色	灰白色	灰白色 ◎		
195	坏	口径 (5.6) 底径 (2.2) 器高 3.4	1/2の残存。全面施釉 (高台畳付は無釉)。	透明	透明	白色 ◎		
196	碗	口径 (10.6) 残高 4.1	白磁。外面に染付文様あり。小片。	透明	透明	白色 ◎		21

調査の概要

表 27 SD201 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
197	坏	底径 5.3 残高 0.8	底部片。外面に回転糸切り痕あり。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石 (1) 金・赤 ◎		
198	焙烙	口径 (29.0) 残高 5.0	蓋。天井部と口縁部の境界に僅かに稜あり。1/8の残存。	ナデ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長 (1~4) ◎		
199	焙烙	口径 (33.0) 残高 5.7	蓋。口縁部は長方形に肥厚する。1/8の残存。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~3) ◎		21
200	壺	底径 (9.1) 残高 6.5	厚みのある平底。1/3の残存。	ハケ (4本/cm) →ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1~2) 金 ◎		
201	深鉢	残高 3.7	口縁部は内方に肥厚。小片。	ミガキ	ミガキ	暗灰色 暗灰色	密 金 ◎		
202	浅鉢	残高 2.6	口縁部内面に凹線状の凹みあり。小片。	ミガキ	ミガキ	褐色 褐色	石・長 (1) ◎		

表 28 SD202 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
203	壺	口径 11.7 底径 2.2 残高 13.2	ほぼ完形品(口縁部を一部打ち欠き)。小さな平底。	ヘラミガキ	㊶ヘラミガキ ㊷ハケ(6本/cm) ㊸ハケ(6本/cm)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		22
204	鉢	口径 (21.1) 底径 4.5 器高 9.7	外反口縁。突出する上げ底。1/2の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ→ヘラミガキ ㊸ナデ	㊶ヘラミガキ ㊷ハケ ㊸ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) 金 ◎		22
205	高坏	残高 2.5	半截竹管文2列と円孔を看取。脚部小片。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ◎		22
206	器台	口径 (34.7) 残高 1.7	口縁部を上下方に拡張し、半截竹管文2列と円形浮文あり。円形浮文上に竹管文あり。小片。	マメツ	ヘラミガキ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~3) ◎		22

表 29 SD203 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
207	甕	口径 (18.2) 残高 4.7	内湾口縁。口縁端部は内方へと肥厚する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) ◎		
208	高坏	残高 5.2	円錐状の柱部。	マメツ	マメツ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	密 ◎		
209	坏身	口径 (11.0) 器高 4.4	たちあがり端部は内傾する面をもつ。1/2の残存。	㊶回転ナデ ㊷回転ヘラケズリ23	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表 30 SD204 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
210	壺	口径 (15.4) 底径 7.5 器高 28.8	大頸壺。頸部にヘラ描き沈線文5条、胴部にタテ方向の沈線文6条あり。	㊶ヨコナデ ㊷ヘラミガキ ㊸ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	黒斑	22
211	深鉢	口径 (29.0) 残高 5.7	口唇部に刻目、口縁部内面に刺突文あり。小片。	条痕	条痕	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~2) 金 ◎		22
212	深鉢	残高 4.5	口唇部に刻目あり。小片。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 黒色	石・長 (1~2) 金 ◎	黒斑	22
213	深鉢	残高 4.0	口唇部に刻目、口縁部外面に未貫通の孔(径0.4cm)あり。口縁部内面に沈線1条あり。小片。	ナデ	ミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) 金 ◎		22

遺物観察表

SD204 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
214	深鉢	残高 3.0	沈線文3条あり。小片。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 褐色	密金・角閃石 ◎		22
215	深鉢	残高 4.2	ヨコ方向の沈線文2条とタテ方向の沈線文1条あり。小片。	ミガキ	ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) 密金◎		22
216	浅鉢	口径 (29.6) 残高 4.8	口縁部は二段に屈曲し、鱗状突起を貼り付ける。小片。	ミガキ	ミガキ	褐灰色 褐灰色	密金◎		22
217	浅鉢	残高 1.3	口縁部は段をなして屈曲する。小片。	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	長 (1) ◎		22
218	浅鉢	残高 3.7	口縁部は内方に肥厚し、鱗状突起を貼り付ける。口縁部下位に円孔 (径0.1cm) あり。小片。	ミガキ	ミガキ	褐色 褐色	石 (1) ◎		22
219	浅鉢	口径 (38.0) 残高 2.1	口縁部は内方に肥厚する。小片。	ミガキ	ミガキ	褐色 黒色	石 (1) ◎		22
220	浅鉢	残高 2.9	口縁部は内方に肥厚し、口唇部に刻目、口縁部内面に沈線1条あり。小片。	ミガキ	ミガキ	褐色 黒色	石 (1) 密金◎		22
221	浅鉢	口径 (28.2) 残高 3.3	皿状の口縁部。小片。	条痕→ナデ	条痕→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1~2) 密金◎		22

表 31 SD204 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
222	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.0	1.7	0.4	2.88		23
223	スクレイパー	完形	サヌカイト	2.1	4.1	0.6	5.65		23
224	スクレイパー	完形	サヌカイト	2.4	5.1	0.5	6.55		23
225	スクレイパー	完形	サヌカイト	4.0	6.8	1.4	47.37		23

表 32 SK201 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
226	深鉢	残高 4.0	口縁部小片。山形状のヘラ描き沈線文あり。	ケズリ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1~2) 密金◎		23
227	浅鉢	口径 (32.2) 残高 4.0	口縁部は内方に肥厚し、体部に稜をもつ。小片。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1) ◎		23

表 33 SK202 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
228	深鉢	底径 (4.0) 残高 2.9	厚みのある底部片で、底部中央部は凹む。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石 (1) 密金◎		

表 34 2区第IV層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
229	坏蓋	口径 (14.7) 残高 1.1	扁平な天井部。口縁部は下方に垂下する。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密◎		
230	坏	口径 (13.2) 底径 (10.0) 器高 4.3	体部は内湾気味に立ち上がり、高台は体底部境界付近に付く。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密◎		

調査の概要

2区第IV層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
231	坏	口径 (13.5) 器高 3.6	体部内面に放射状の暗文あり。内外面に赤色塗彩あり。1/3の残存。	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ ㊨ヘラミガキ(指頭痕)	㊦ヨコナデ ㊧ヘラミガキ ㊨ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長 (1~5) ◎		23
232	坏	底径 (8.2) 残高 2.6	底部小片。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		
233	皿	口径 (25.4) 残高 2.1	口縁端部は上方に肥厚し、体部内面に放射状の暗文あり。1/6の残存。高台は剥離。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) 金・赤 ◎		23

表 35 2区第V層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
234	壺	口径 9.8 底径 1.7 器高 14.8	直口壺。底部は突出する小さな平底。	㊦ヨコナデ ㊩マメツ	ヘラ (5本/cm) →ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 密金 ◎		23
235	壺	口径 8.6 残高 7.6	複合口縁壺。口縁端部は内傾し、口縁拡張部にクシ描き波状文あり。	㊦ヨコナデ ㊩ヘラミガキ	㊦ハケ (6本/cm)→ヨコナデ ㊩ハケ (10本/cm)	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	密金 ◎		23
236	壺	口径 (8.7) 残高 4.8	無頸壺。口縁端部は内傾する面をもつ。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~2) ◎		
237	製塩土器	口径 (5.0) 残高 1.6	小片。	タタキ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	密 ◎		
238	壺	口径 (16.5) 残高 3.6	口縁端部は面をなし、頸部に凸帯をもつ。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		23

表 36 2区地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
239	仏飯器	口径 (7.2) 底径 (5.3) 器高 7.1	脚柱部には竹節状の凸部あり。底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	施釉	施釉	白色・橙色 白色	密 ◎		23
240	土瓶	口径 (7.8) 残高 3.6	瓦質土器。肩部に沈線と竹管文あり。小片。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		23
241	火鉢	口径 (22.4) 残高 8.4	瓦質土器。口縁端部は面をもつ。小片。	タタキ	ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎		23

表 37 SB301 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
242	坏蓋	口径 (10.2) 残高 4.2	丸味のある天井部。口縁端部は内傾する。1/2の残存。	㊦回転ヘラケズリ1/2 ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		24
243	坏蓋	口径 (12.0) 残高 4.1	扁平な天井部。口縁端部は内傾する。1/2の残存。	㊦回転ヘラケズリ2/3 ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
244	坏身	口径 (10.8) 器高 4.8	たちあがり端部は内傾し、受部は短く水平にのびる。2/3の残存。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ1/2	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		24
245	高坏	底径 7.6 残高 6.2	脚柱部に3方向の台形状透かしあり。脚部完形品。	㊦回転ヘラケズリ ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		24
246	甕	口径 (13.8) 残高 7.9	内湾口縁。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。1/4の残存。	㊦ヨコナデ ㊩ハケ (6本/cm)	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		

遺物観察表

SB301 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
247	甌	口径 (26.7) 残高 12.1	口縁～胴部片。口縁端部はナデにより凹む。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ(4～5本/cm)	㊸ハケ(5～6本/cm) ㊹マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1～5) ◎		
248	甌	残高 8.1	舌状の把手。完形品。	ハケ (6本/cm)	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1～5) ◎		24

表 38 SB302 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
249	坏蓋	口径 (11.8) 残高 4.0	丸味のある天井部。口縁端部は内傾する凹面をなす。小片。	㊺回転ヘラケズリ ㊻回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		24
250	坏身	口径 (9.7) 残高 3.4	たちあがり端部は内傾する。1/3の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		24
251	坏身	口径 (10.2) 残高 4.2	たちあがり端部は内傾する。1/4の残存。	㊼回転ナデ ㊽回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
252	甕	口径 (25.4) 残高 3.1	「S」字状口縁。口縁端部は僅かに内傾する面をもつ。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1～2) ◎		
253	甌	残高 4.3	舌状の把手部。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1～2) ◎		24
254	甌	残高 0.7	円孔を3箇所看取。底部1/4の残存。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1～2) 金 ◎		

表 39 SB303 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
255	坏蓋	口径 (11.6) 残高 3.7	丸味のある天井部。口縁端部は内傾する凹面をなす。天井部にヘラ記号あり。小片。	㊾回転ヘラケズリ1/2 ㊿回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
256	坏身	口径 (12.2) 残高 4.9	たちあがり端部は内傾する。小片。	㊽回転ナデ ㊾回転ヘラケズリ1/2	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
257	坏身	残高 3.6	たちあがりは欠損。小片。	㊿回転ヘラケズリ1/2 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

表 40 SK303 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
258	浅鉢	残高 6.8	体部片。	条痕	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1～2) 金 ◎		24

表 41 SK304 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
259	高坏	残高 3.4	脚部片。方形の透かしを看取。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 42 3区第V層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
260	甌	口径 (29.8) 残高 12.2	口縁端部は丸く仕上げる。水平にのびる把手部。	ハケ(10本/cm) →ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1～2) 金・赤 ◎		

調査の概要

3区第V層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
261	埴輪	口径 (28.6) 残高 6.9	円筒埴輪。土師質。口縁端部はナデ凹む。小片。	ハケ (6～8本/cm)	ハケ (6～8本/cm)	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石 (1) ◎		24
262	坏身	口径 (9.4) 残高 3.1	たちあがり端部は、内傾する凹面をなす。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
263	甕	残高 6.6	胴部小片。	平行叩き	円弧叩き →ナデ消し	灰色 灰色	密 ◎		

表 43 SK402 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
264	壺	底径 4.3 残高 9.6	肩部にヘラ描き沈線文2条、胴部にヘラ描き沈線文と木葉文、底部にヘラ描き沈線文あり。	ヘラミガキ	ナデ (指頭痕)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1～2) 金 ◎		24

表 44 4区地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
265	壺	底径 5.7 残高 7.0	胴部中位にヘラ描き沈線文4条あり。底部は平底。	ヘラミガキ	ナデ (指頭痕)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1～2) ◎		24

表 45 4区地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
266	砥石	1/3	安山岩	14.0	17.7	6.1	1,500.83	砥面：1面	

第4章 調査の成果と課題

持田本村遺跡からは、縄文時代から近世までの遺構・遺物を確認した。遺跡が所在する道後城北地区は松山市内でも有数の遺跡地帯として知られており、文京遺跡（愛媛大学構内）や松山大学構内遺跡をはじめ、数多くの集落遺跡が存在している。

ここでは、遺跡の概要を時代別にまとめ、さらに遺跡から出土した遺物の分析を試みる。

1. 遺跡の変遷

遺跡からは、縄文時代から江戸時代までの遺構・遺物を検出した（第61図）。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は、土坑8基と自然流路1条である。まず、土坑は1区で6基（SK101～106）、2区では2基（SK201・202）を確認した。このうち、SK101の基底面には直径10cm前後の小穴が数基検出されたことから、動物を捕獲するための「落とし穴」として機能していた可能性がある。なお、検出したすべての土坑からは縄文時代晩期中葉に時期比定される土器のほか、スクレイパーや石器製作に伴うチップや軽石などが出土している。これらの石材は主にサヌカイトが使用されているが、姫島産（大分県）や腰岳産（佐賀県）の黒曜石が含まれている。

調査地南方に隣接する持田町3丁目遺跡からも、該期の土坑24基が検出されており、竪穴建物は未検出ではあるが、調査地や近隣地域に縄文集落の存在を示す資料といえよう。土坑から出土した土器や石器は表46にまとめた。このほか、2区北東部では北西－南東方向の自然流路（SR201）を確認した。灰色粗砂を埋土とする流路で、第Ⅷ①層上面にて検出したものである。流路内から遺物の出土はないが、検出層位より概ね縄文時代の流路と判断される。

表46 縄文時代晩期の土坑出土品一覧

遺構名	縄文土器			石器		
	深鉢	浅鉢	計	スクレイパー	剥片	計
SK101	23	19	42	1(サ)、2(黒)	29(サ)、5(黒)	37
SK102	4	5	9	2(サ)	5(サ)、2(黒)	9
SK103	9	8	17			0
SK104	4	4	8	1(サ)		1
SK105	2	5	7		6(サ)、4(黒)	10
SK106	2	4	6		1(サ)	1
SK201	1	1	2		3(サ)	3
SK202	1	0	1			0
計	46	46	92	6	55	61

※(サ)：サヌカイト、(黒)：黒曜石

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構は、溝状遺構と土坑、及び土壙墓を検出した。2区検出のSD204は北西－南東方向に延びる深さ60cm、検出長3.82mの溝状遺構で、遺構西端は江戸時代の溝SD201に削平されている。なお、SD204の延長線上にSD205が存在しており、埋土や検出状況からSD204とSD205は同一遺構と考えられる。SD204は遺構上位に径20～30cm大の円礫が直線上に並べられ、円礫の下面からは完形の壺形土器が出土した。出土品は、弥生時代前期後半の所産と考えられる。遺構の性格や用途は不明であるが、円礫や出土した壺形土器などから、墓として利用された可能性がある。このほか、2区からは後期後半の溝1条を検出した。SD202は東西方向の溝で、溝内からは口縁部を打ち欠いた壺形土器が出土している。なお、2区の第V層中からは製塩土器の口縁部小片(237)が出土している。

次に、4区からは土坑1基と土壙墓1基を検出した。このうち、SK402は東西方向に長い楕円形状の土坑で、南半部は近現代の造成により削平されている。土坑基底面からは木葉文の描かれた小型の壺が1点出土した。前述した持田町3丁目遺跡からは前期後半から末の土壙墓17基が検出されている。それらは、主軸を北東－南西方向にとり、一直線上に配置されている。本遺跡検出のSK402は、その延長線上にあることから、一連の遺構と考えられる。

松山市内では持田遺跡をはじめ、古くから弥生前期集落の存在が知られており、近年では調査地の東方にある岩崎遺跡から、前期末から中期前半の大溝や貯蔵穴群が検出されている。

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴建物6棟、溝1条、土坑7基を検出した。竪穴建物は古墳時代中期に時期比定され、2区と3区で各3棟が検出されている。2区検出のSB201は一辺3.2mの隅丸方形建物で、東壁にカマドを付設している。出土品の特徴より古墳時代中期、5世紀末の建物と考えられる。また、2区からはSB201のほかに2棟の建物が検出されている。出土品の特徴より、SB202は5世紀後半、SB203は5世紀末の建物と考えられる。一方、3区からは3棟の建物が検出されている。SB301は一辺5mの隅丸方形建物で、4本の支柱穴で構築されている。出土遺物より、SB301は5世紀後半、SB302は5世紀末、SB303は5世紀後半の建物と考えられる。

出土品では、2区検出の第V層中より、市場系の須恵器壺(238)が出土している。このほか、3区からは第V層中より土師質の円筒埴輪片(261)が出土している。

(4) 古代・中世

古代や中世の遺構は未検出であるが、検出した遺構や包含層中より飛鳥時代や奈良時代の遺物が出土している。2区検出の第IV層中からは、高台を伴う須恵器坏B(230)が出土している。形態の特徴から飛鳥編年V期、7世紀後半から末の所産と考えられる。また、2区の第IV層中からは暗文を施した土師器坏(231)や皿(233)が出土した。231は内面に放射状暗文を施し、内外面には赤色塗彩がみられる。色調は橙色をなし、内外面にはヘラミガキを施す。また、233は形状より高台を伴う皿で、口縁端部はわずかに肥厚しており、口縁部内面に放射状の暗文を施している。形態の特徴より、両者は平城編年I・II期、8世紀前半の所産と考えられる。

調査地東方にある岩崎遺跡からは8世紀前半の溝が検出されており、溝からは暗文を施した土師器坏や皿などが数点出土している。現在までに、この溝の全容は把握できていないが、本調査出土の暗



第 61 図 持田本村遺跡変遷図

文土師器をはじめ該期の遺構・遺物の検出は、来住台地に存在する回廊状遺構や官衙関連施設に匹敵するような施設が道後地区にも存在した可能性が高いと推測される。

(5) 近世

近世の遺構は、1区と2区で検出した溝 SD101 と SD201 が挙げられる。両者は同一溝と思われ、検出幅 2.7～3.4m、検出長約 29m を測る南北方向の溝で、深さは最深部で 1.3m である。溝の方位は、ほぼ真北方向である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は灰褐色土や褐灰色土を基調とし、第 V 層（黒褐色土）や第Ⅷ①層（明黄褐色土）、オリーブ黄色砂等で埋没している。溝基底面付近には少量の砂がみられたことから、多少の水流があったと推測される。なお、溝基底面は北から南へ緩傾斜をなし、比高差は約 10cm である。また、SD201 の基底面中央部には幅 50～60cm、深さ 8～10cm を測る溝状の凹みを検出している。遺物は溝の埋土中位から下位にて、土師器のほかに数多くの陶磁器が出土した。調査時は破片ばかりであったが、復元すると完形品になるものが多く、おそらくは溝の廃棄時に一括廃棄されたものと推測される。なお、陶磁器には唐津焼の碗や皿、京焼の土瓶などが含まれている。出土品の特徴より溝は江戸時代初頭、17 世紀前半頃に埋没したものと考えられる。この時期は松山城築造期にあたり、性格や用途は断定しえないが、湯築城と松山城との所轄領域の境界を示すための溝ではないかと推測される。

2. 出土品の分析

(1) 溝出土品

江戸時代前期の溝 SD101 と SD201 からは、比較的多くの陶磁器が出土した。この中には唐津焼や美濃焼、京焼、志野焼など日本各地で生産されたものが含まれており、唐津焼は 13 点、美濃焼と京焼、志野焼は各 1 点、肥前系が 2 点である（表 47）。本書で掲載した出土品のうち、最も出土数の多い陶磁器は唐津焼であり、その内訳は碗が 5 点、皿が 7 点、甕が 1 点である。ここでは、唐津焼の碗と皿について、法量や形態・施文の特徴と胎土・釉調等について、まとめを行う（表 48）。

1) 唐津焼 碗

<法量・形態>

出土した碗の法量をみると、口径 9.5cm～16.4cm、器高は 5.5～6.8cm である。このうち、口径が最大の碗〔SD101:1〕は体部が内湾し、口縁部は外反する形態をなす。一方、口径が 10cm 前後の碗〔SD101:2、SD201:167・168〕は体部が直立気味に立ち上がり、口縁部は直立する形態をなす。高台は直径 3.4～5.6cm、高さは 0.4～1.0cm であり、最も高さのある高台は SD201 出土品（167）である。

このように、碗には口径が 16cm を超えるやや大型品と、口径が 10cm 前後の小型品が存在することがわかる。

<施文>

前述した小型品のうち、SD101 出土品（2）には、体部外面に鉄釉による文様が描かれている。

<胎土・釉調>

胎土は赤褐色・にぶい赤褐色で、釉調は灰オリーブ色を基調とし、SD201 出土品（167）は内面に

暗オリーブ色釉が施される。なお、掲載した碗は全て、体部下半部から底部外面、及び高台は無釉である。

2) 皿

<形態・法量>

出土した皿の法量をみると、口径 10.0～14.5cm、器高は 3.1～5.0cm である。このうち、口径が最大の皿〔SD201:171〕は体部が内湾し、口縁部は外反する形態をなす。また、体部が内湾し、口縁部が直立する皿〔SD101:7、SD201:172〕は口径 10.0～13.0cm、器高 3.1～3.6cm である。このほか、口縁部が波状をなす、いわゆる「輪花皿」は 3 点あり、口径 11.7～12.9cm、器高 3.9～4.7cm となる。なお、SD101 出土の四方皿 (5) は口径 12.6cm、器高 5.0cm である。出土した皿の高台は直径 3.8～5.1cm、高さは 0.3～0.6cm であり、最大高は SD201 (175) である。

碗と同様、皿には口径が 14cm を超えるやや大型品と、口径 10～13cm 程度の小型品が存在する。

<施文>

大型・小型の皿は、共に基本的には無文である。なお、四方皿には体部内面及び口縁部内外面に鉄

表 47 SD101・201 出土の陶磁器

出土地点	唐津焼			美濃焼	京焼	志野焼	肥前系		計
	碗	皿	甕	碗	土瓶	皿	碗	向付	
SD101	2	3	0	1	0	0	1	1	8
SD201	3	4	1	0	1	1	0	0	10
計	5	7	1	1	1	1	1	1	18

表 48 SD101・201 出土の唐津焼

出土地点	掲載番号	器種	法量 (cm)				胎土	釉調	備考
			口径	器高	高台径	高台高			
SD101	1	碗	(16.4)	6.8	5.6	0.7	赤褐色	灰オリーブ色	
	2	碗	(10.4)	6.6	5.0	0.4	にぶい赤褐色	灰オリーブ色	
	5	四方皿	12.6	5.0	3.8	0.3	にぶい橙色	オリーブ灰色	接合完形・鉄絵
	6	輪花皿	12.4	4.0	4.4	0.4	灰白色	暗オリーブ灰色	
	7	皿	(10.0)	3.1	3.8	0.5	にぶい赤褐色	灰オリーブ色	
SD201	167	碗	10.9	6.8	5.1	1.0	にぶい赤褐色	(外面) 灰オリーブ色 (内面) 暗オリーブ色	
	168	碗	(9.5)	5.5	(3.4)	0.6	にぶい赤褐色	灰オリーブ色	
	170	碗	—	—	(3.8)	0.5	にぶい赤褐色	灰オリーブ色	
	171	皿	(14.5)	4.0	5.1	0.5	灰黄色	灰白色	
	172	皿	(13.0)	3.6	(4.5)	0.5	にぶい赤褐色	灰白色	
	173	輪花皿	(12.9)	4.7	5.0	0.3	にぶい赤褐色	灰赤色	
	175	輪花皿	(11.7)	3.9	(4.9)	0.6	にぶい橙色	灰オリーブ色	

釉による文様が描かれている。

＜胎土・釉調＞

胎土は、にぶい赤褐色、にぶい橙色、灰白色、灰黄色があり、釉調は灰オリーブ色を基調とし、灰白色や灰赤色がある。なお、碗と同様、体部下半部から底部外面、及び高台は無釉である。

(2) 持田本村遺跡出土の縄文土器

本遺跡からは土坑内や時期の異なる遺構及び包含層中より、縄文土器の破片や石器が比較的多く出土した。縄文土器は深鉢や浅鉢が主体で、本書では133点を掲載している(表49を参照)。形態や調整の特徴より、これらは縄文時代晩期中葉の所産である。ここでは、出土した縄文土器について分析を試みる。

表49 持田本村遺跡出土の縄文土器一覧

出土地点	深鉢					浅鉢				合計
	口縁部	肩部	胴部	底部	小計	口縁部	頸部	底部	小計	
SK101	11	10	0	2	23	15	4	0	19	42
SK102	0	3	0	1	4	4	1	0	5	9
SK103	4	4	0	1	9	6	2	0	8	17
SK104	2	2	0	0	4	3	0	1	4	8
SK105	1	1	0	0	2	4	0	1	5	7
SK106	0	2	0	0	2	2	1	1	4	6
SK201	1	0	0	0	1	1	0	0	1	2
SK202	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1
SK303	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
SB202	1	0	0	0	1	1	0	0	1	2
SD101	1	1	0	2	4	8	1	0	9	13
SD201	1	0	0	0	1	1	0	0	1	2
SD204	3	2	0	0	5	5	1	0	6	11
1区包含層	3	3	0	0	6	6	0	0	6	12
合計	28	28	0	7	63	56	11	3	70	133

1) 深鉢

深鉢は63点を掲載しており、内訳は口縁部片28点、肩部片28点、底部片が7点である。口縁部の形態はすべて外反し、肩部は内方へ屈曲する。施文は口縁部や肩部外面に、沈線や刺突文を施すものがみられる(表50)。このうち、沈線は単独のものや、2本ないし3本1組の平行沈線により斜格子目状や「ハ」の字状、「X」字状、モチーフ状に描かれている。このほか、SK103出土品(95)には削り出しによる段をもつものがある。また、SK101出土品(42)は口唇部に鱗状の突起を持つ。内面は沈線や刺突文のほかに、両者が組み合うものが1点ある。口縁部片には、口唇部に刻目をもつものが18点ある。次に、口縁部と肩部(56点)の器面調整をみると、外面調整はナデ調整24点、ケズリ調整13点、ミガキ調整11点、条痕調整7点、不明1点となり、内面調整はナデ調整35点、ケズリ調整1点、ミガキ調整13点、条痕調整5点、不明2点となる(表52)。このほか、底部片は7点あり、内訳は上げ底4点、平底1点、不明2点である。器面調整は外面にケズリを施すものが2点、内面にミガキを施すものが1点あるが、その他は内外面共にナデ調整にて仕上げている。

2) 浅鉢

浅鉢は70点を掲載しており、口縁部片56点、頸部片11点、底部片が3点である。口縁部の形態は様々であり、以下の6種類(①~⑥)に分類される(表51)。

- ① 口縁部が外反(4点)
- ② 肩部で屈曲し、口縁部が短く外反(5点)
- ③ 口縁部が長く緩やかに外反(18点)
- ④ 口縁部が内湾(1点)
- ⑤ 口縁部が長く内湾(20点)
- ⑥ 口縁部が上方へ屈曲(8点)

このうち、②・③・⑤の内面には全て粘土紐を貼り付け、肥厚している。なお、⑥には肥厚するものが6点含まれている(内面肥厚:53点)。施文をみると、外面は刻目(3点)と沈線(2点)があり、内面には沈線(5点)と刺突文(3点)がみられる。とりわけ、④の外面には弧状の沈線と縦沈線とが組み合っている。また、②・③・④・⑥の口唇部には鱗状の突起をもつものが14点ある。なお、口唇部に刻目をもつものは2点ある。次に、口縁部と頸部(67点)の器面調整をみると、外面はミガキ調整が57点中52点あり、全体の約9割を占める。底部片は上げ底と平底が各々1点ずつあり、器面はナデ調整により仕上げている(残りの1点は形状不明)(表53)。

3) まとめ

出土した深鉢は肩部で屈曲し、口縁部が外反するものであり、口縁~肩部外面には沈線(平行・格子・モチーフ状)や刺突文を施している。一方、浅鉢は肩部で屈曲し、口縁部が外反または内湾する形状のもので、口縁部内面の肥厚するものが全体の9割を占めている。なお、小型品1点が含まれている。

表50 深鉢の施文一覧

深鉢	外 面							内 面				小計
	沈線	沈線+刺突文	刺突文	刻目	突起	段	無文	沈線	沈線+刺突文	刺突文	無文	
口縁部	10	0	0	0	1	0	17	3	1	6	18	28
肩部	21	1	1	0	0	1	4	0	0	0	28	28
小計	31	1	1	0	1	1	21	3	1	6	46	56

表51 浅鉢の口縁部形態と施文

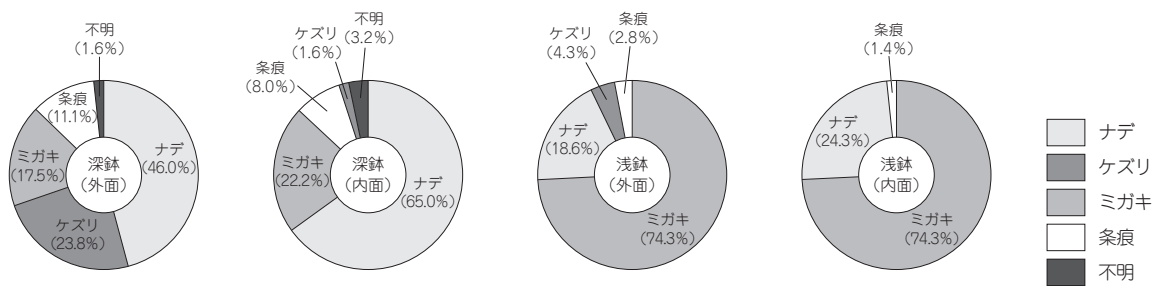
形 態		外反	短く外反	長く外反	内湾	長く内湾	屈曲	小計	
施 文	外 面	刻目	1	0	2	0	0	3	
		沈線	0	0	0	1	1	2	
		突起	0	2	2	0	10	2	16
		無文	3	3	14	0	9	6	35
	内 面	沈線	1	2	1	0	0	1	5
		刺突文	1	1	0	0	0	1	3
		無文	2	2	17	1	20	6	48
小 計		4	5	18	1	20	8	56	
分 類		①	②	③	④	⑤	⑥		

表 52 深鉢の器面調整一覧

深鉢	外 面					内 面					小計
	ナデ	ケズリ	ミガキ	条痕	不明	ナデ	ケズリ	ミガキ	条痕	不明	
口縁部	12	6	5	5	0	15	1	8	3	1	28
肩部	12	7	6	2	1	20	0	5	2	1	28
底部	5	2	0	0	0	6	0	1	0	0	7
小計	29	15	11	7	1	41	1	14	5	2	63

表 53 浅鉢の器面調整一覧

浅鉢	外 面					内 面					小計
	ナデ	ケズリ	ミガキ	条痕	不明	ナデ	ケズリ	ミガキ	条痕	不明	
口縁部	8	1	46	1	0	9	0	46	1	0	56
頸部	2	2	6	1	0	5	0	6	0	0	11
底部	3	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
小計	13	3	52	2	0	17	0	52	1	0	70



第 62 図 深鉢・浅鉢の器面調整

施文は口縁部に突起をもつものが全体の3割あり、内面は刻目や沈線、刺突文を施すものが1割程度みられる。深鉢や浅鉢の形状や施文の特徴より、出土した縄文土器は晩期中葉の特徴を示すものである。とりわけ、土坑出土品は一括性の高い資料であり、該期の土器様相が知れる良好な資料といえよう。

今回の調査では縄文時代の土坑や弥生時代の土壙墓、古墳時代の竪穴建物の検出により、以前に実施した持田町3丁目遺跡で確認された縄文遺跡の存在や弥生時代前期の墓域、古墳時代集落の広がりが知れる貴重な成果をあげることができた。特筆すべきは、これまで検出されていない江戸時代初頭の溝を検出したことである。SD101とSD201からは唐津焼をはじめ、京焼や美濃焼など高級な陶磁器がまとまって出土しているが、用途や性格等は断定しえなかった。今後、江戸期における道後地区の集落様相を解明するうえで重要な資料であり、溝の実態解明が急務となる。

写真図版



1. 1区検出状況（北東より）



2. 1・2区検出状況（北より）



1. 3・4区検出状況（西より）



2. 1区攪乱除去状況（北西より）



1. 1区遺構完掘状況（北より）



2. SD101 検出状況（北より）



1. SK101 検出状況（西より）



2. SK103・104・106 検出状況（北西より）



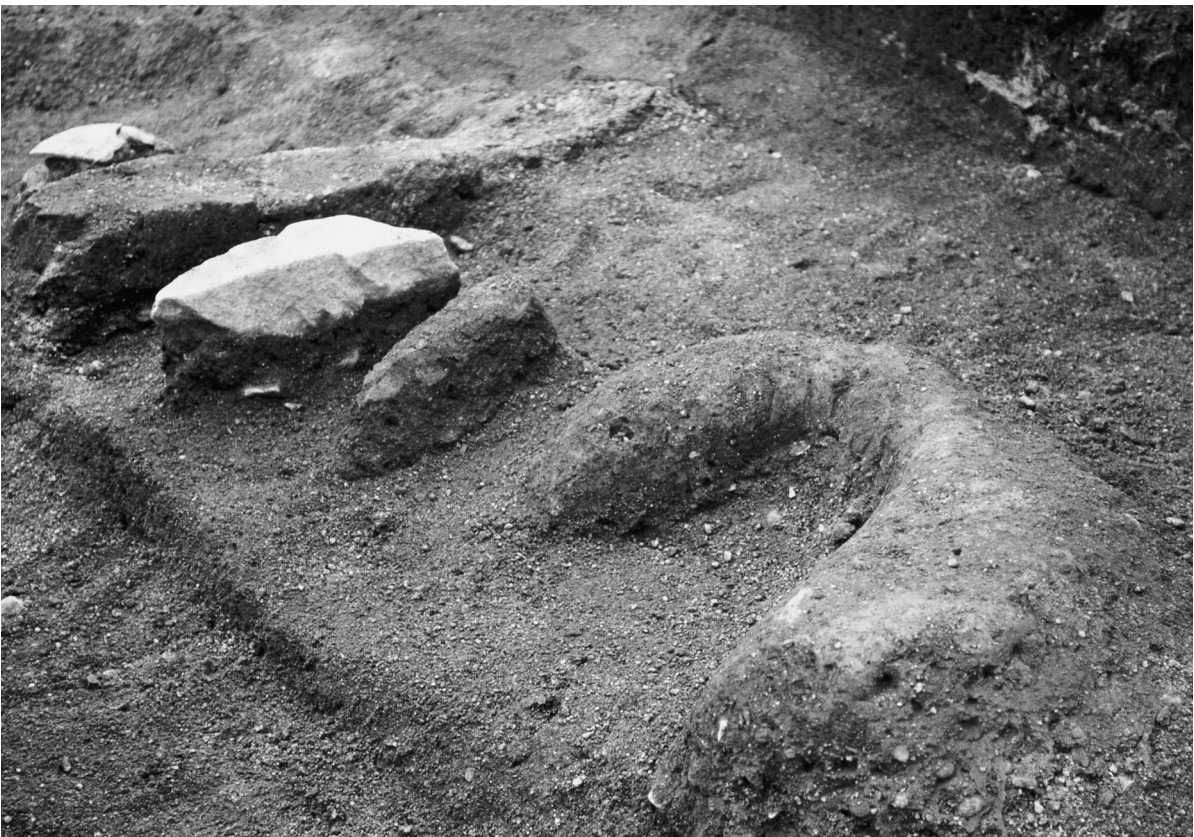
1. 2区遺構検出状況（東より）



2. 2区遺構完掘状況（北より）



1. SB201 検出状況（北西より）



2. SB201 カマド検出状況（南西より）



1. SB202・203 検出状況（北東より）



2. SD201 完掘状況（北より）



1. SD201 断面（北より）



2. SD202 断面（西より）



1. SD204 検出状況（南西より）



2. SD204 遺物出土状況（南西より）



1. SD204・205 検出状況（北西より）



2. SK201 検出状況（北より）



1. 3区・4区遺構完
掘状況（西より）



2. 3区東壁土層（西より）



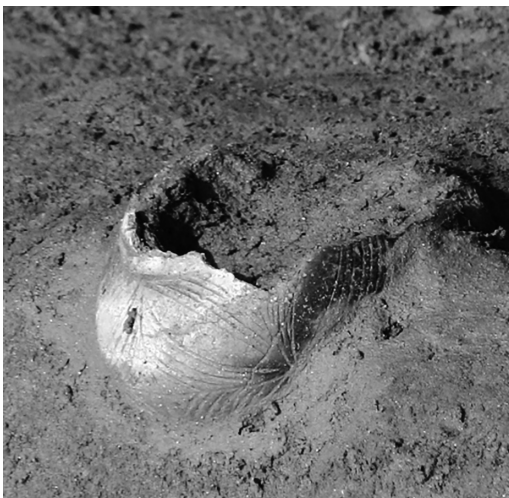
1. SB301 検出状況（西より）



2. SB302・303 検出状況（南より）



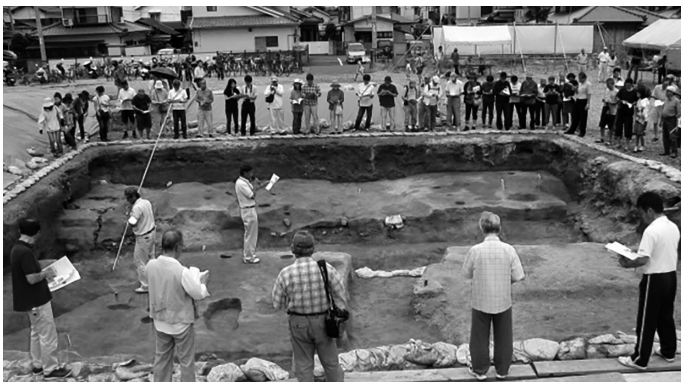
1. SK401・402 検出状況（北西より）



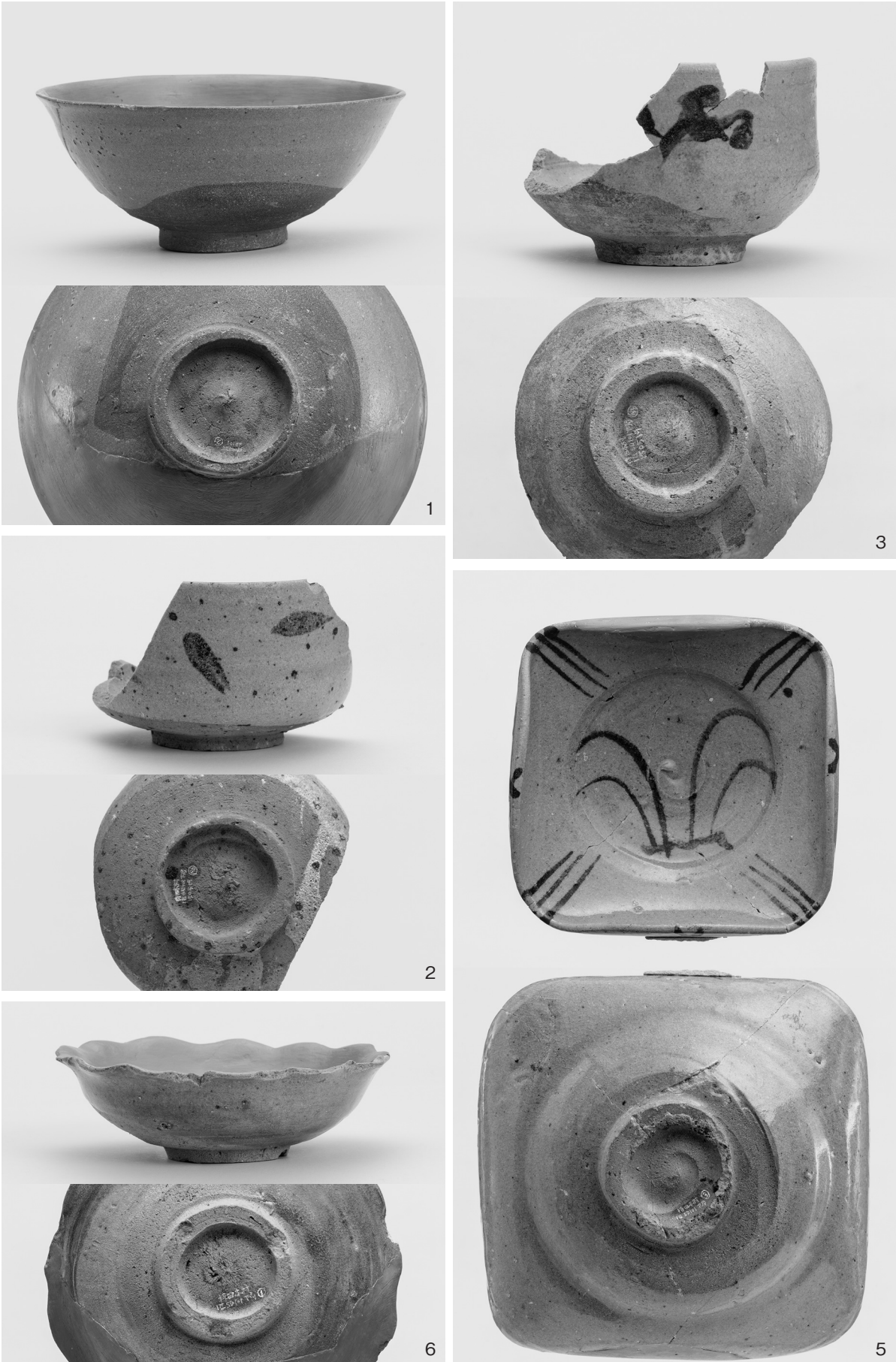
2. SK402 遺物出土状況（北西より）



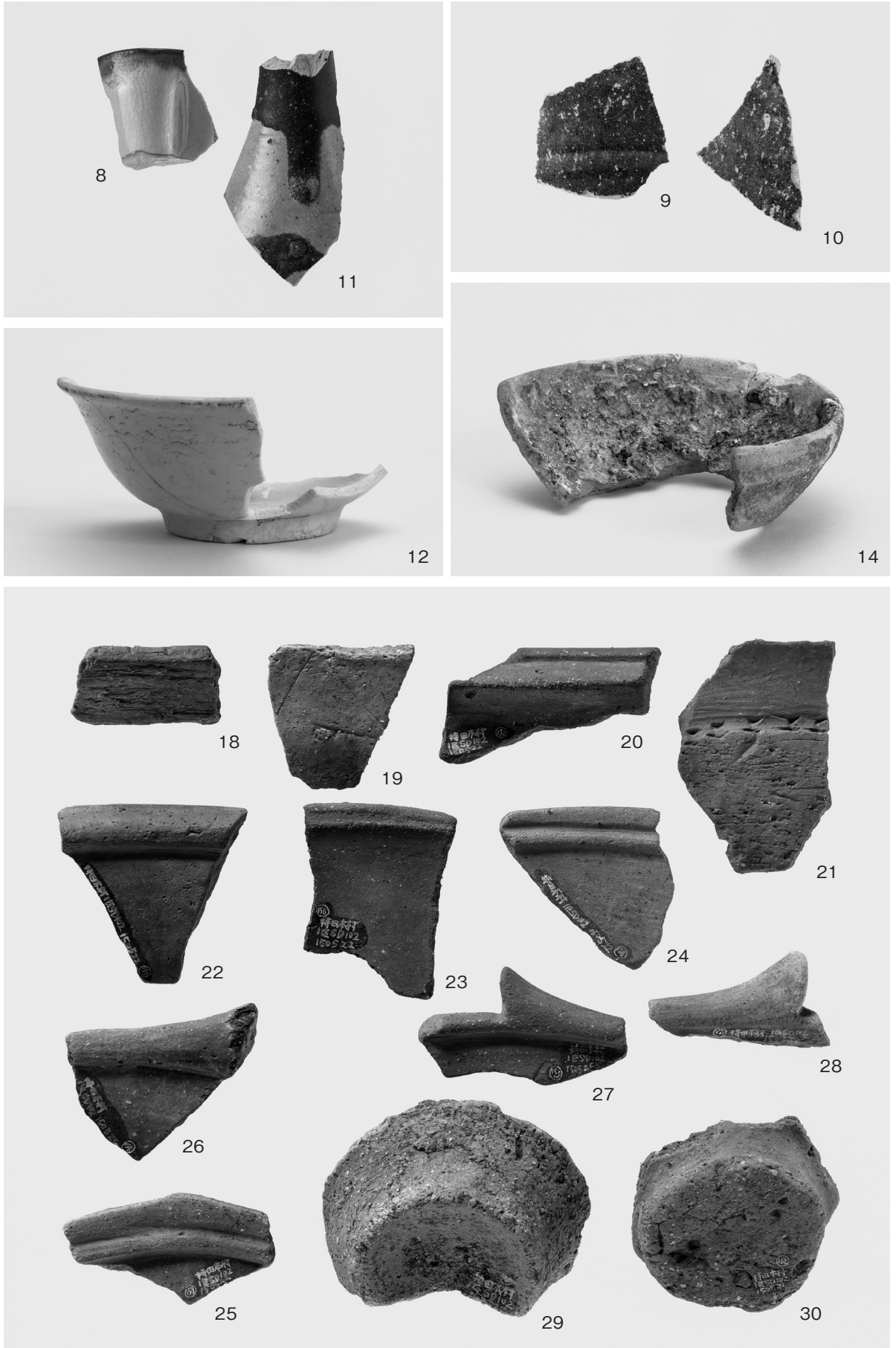
3. 作業風景（西より）



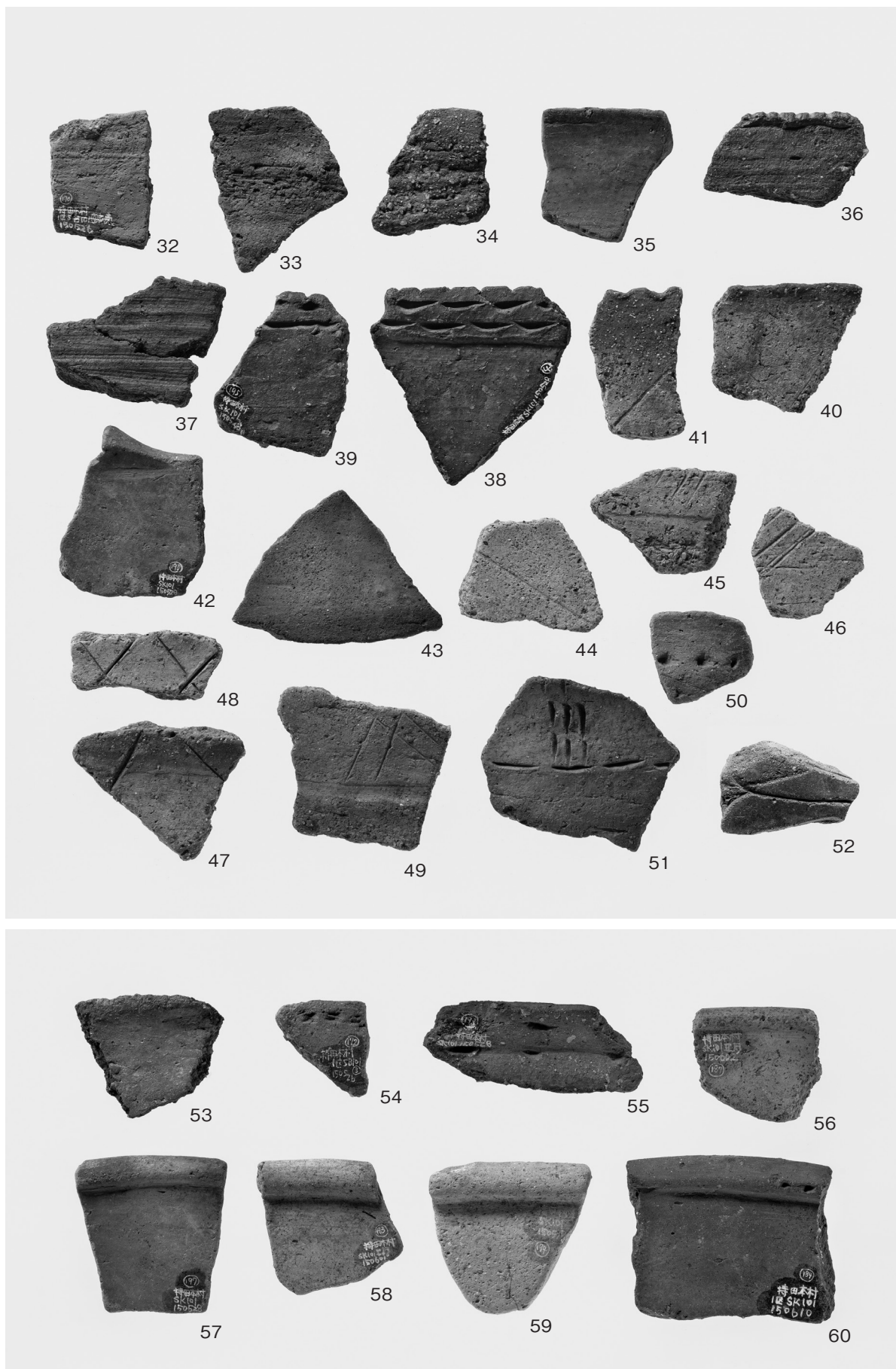
4. 現地説明会風景（東より）



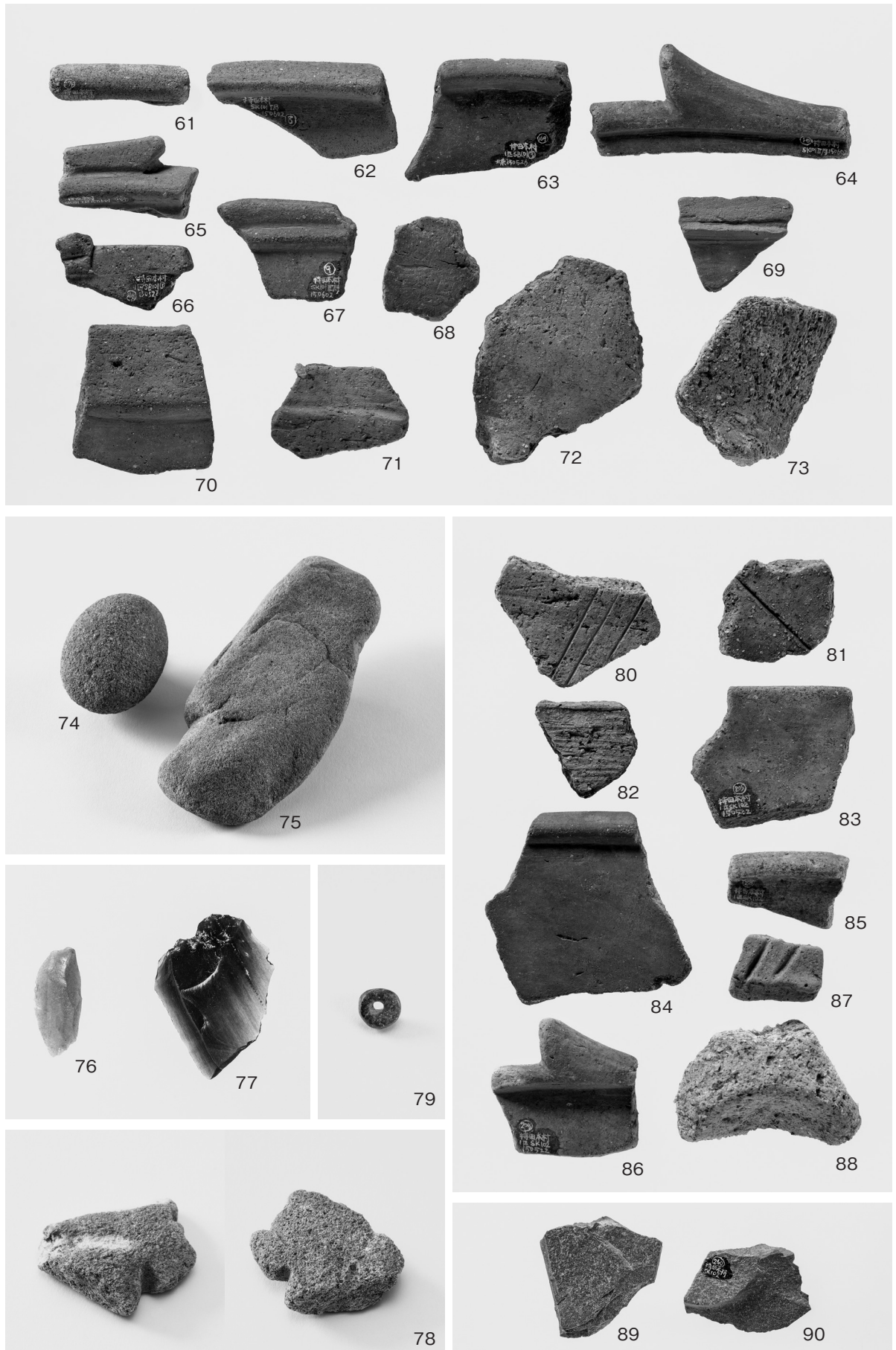
1. SD101 出土遺物①



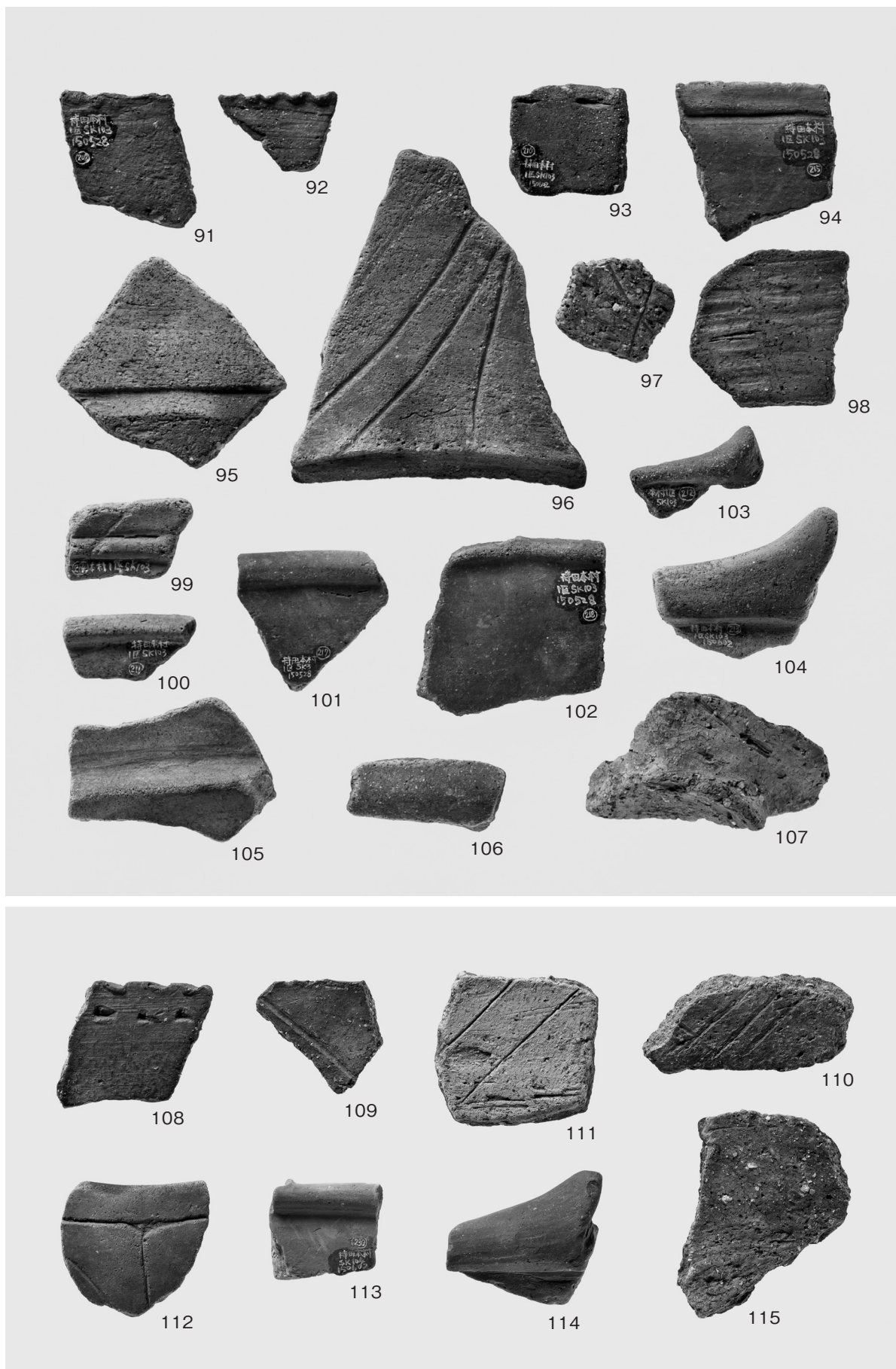
1. SD101 出土遺物②



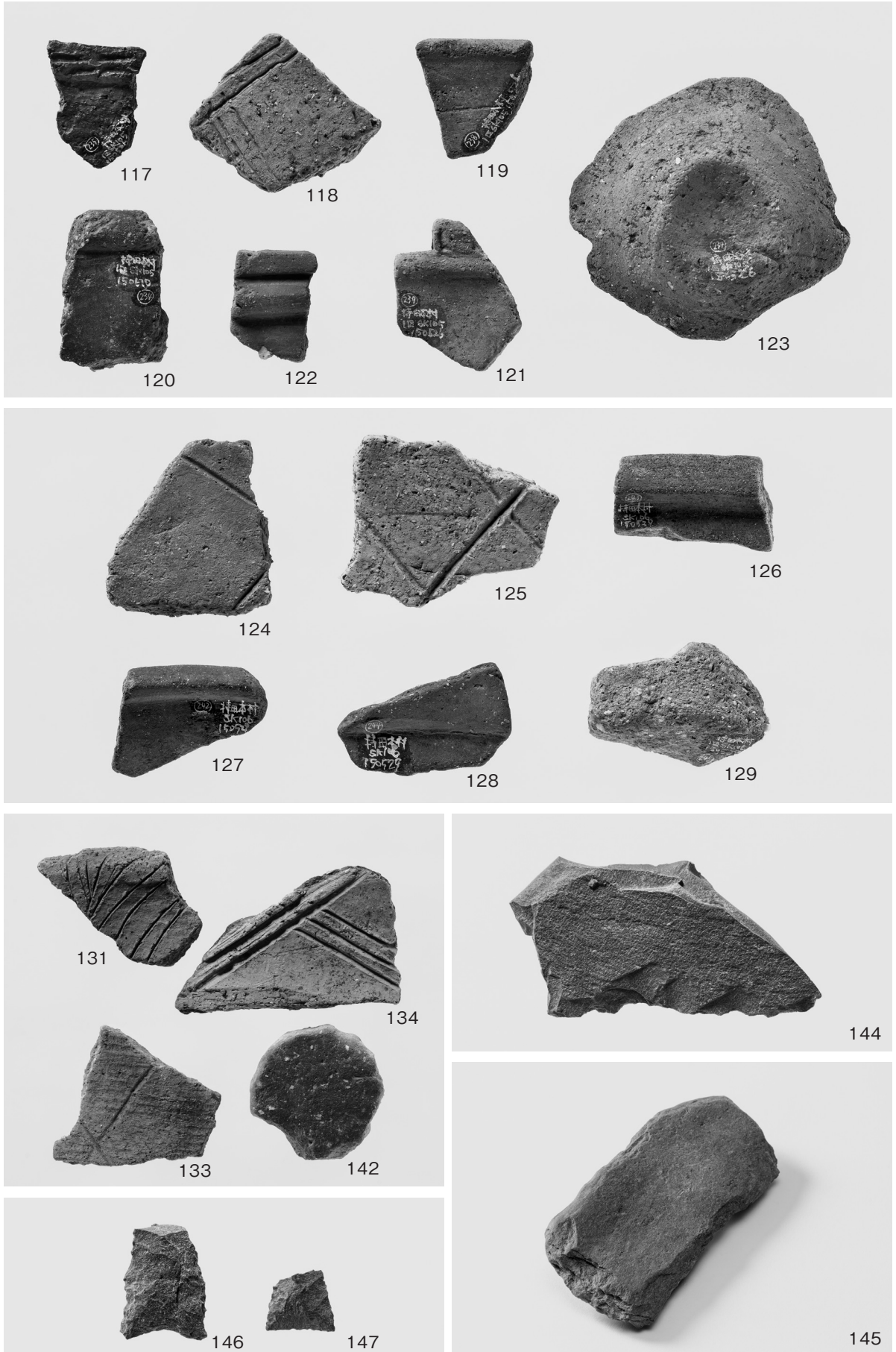
1. SK101 出土遺物①



1. 出土遺物 (SK101 ② : 61 ~ 79、SK102 : 80 ~ 90)



1. 出土遺物 (SK103 : 91 ~ 107、SK104 : 108 ~ 115)



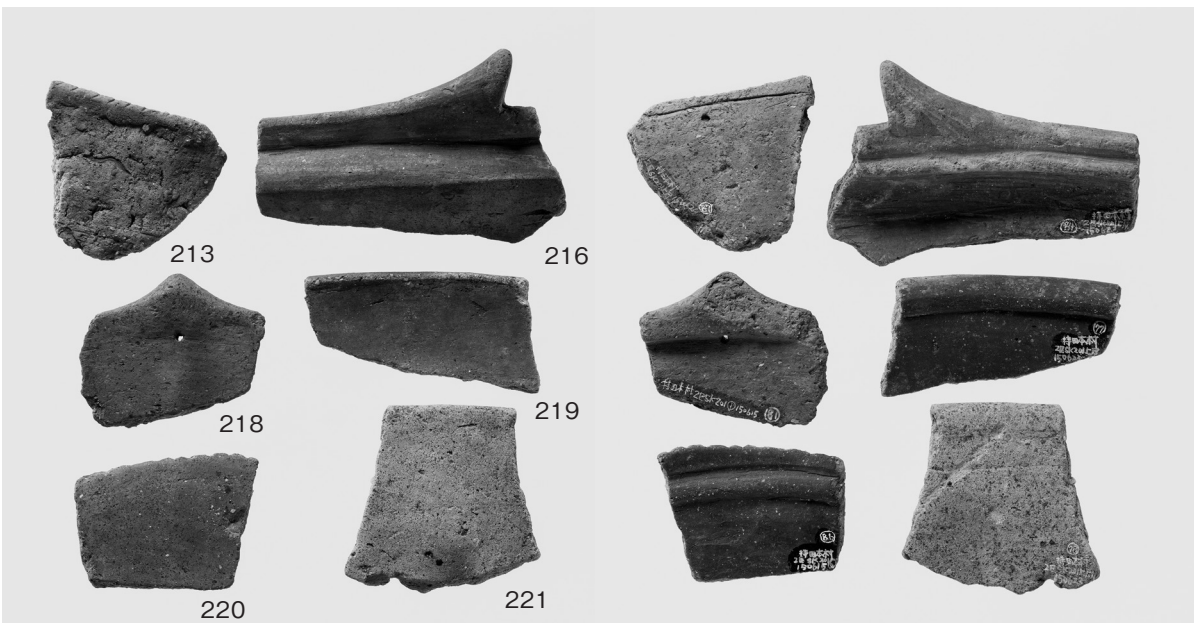
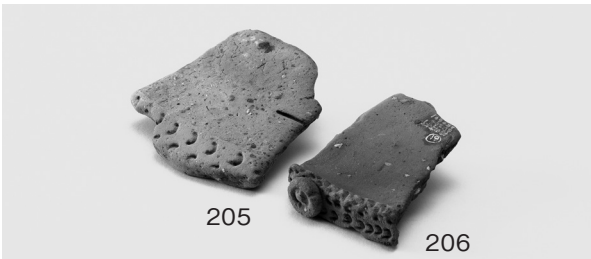
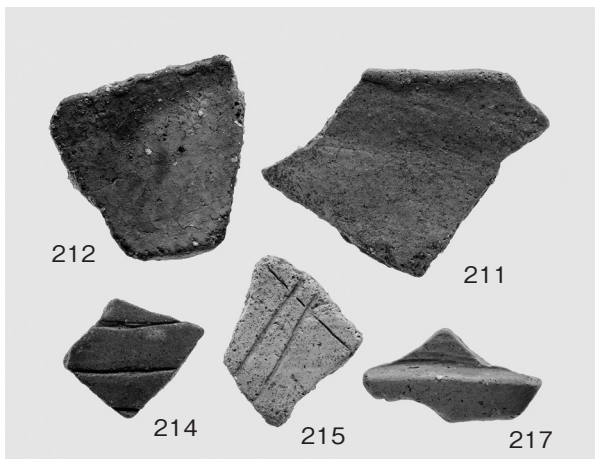
1. 出土遺物 (SK105 : 117 ~ 123、SK106 : 124 ~ 129、1区包含層 : 131・133・134・142・144 ~ 147)



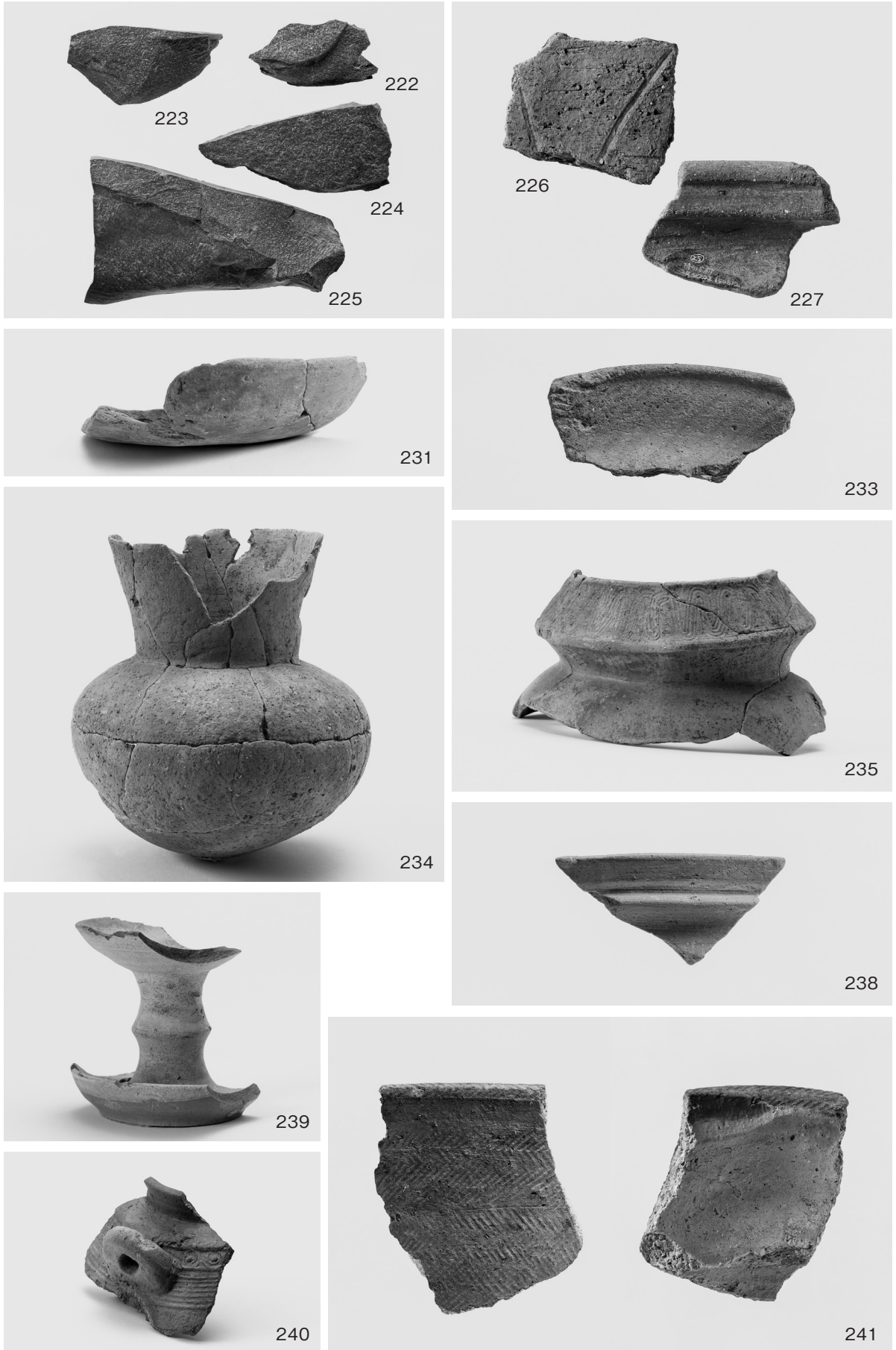
1. SD201 出土遺物①



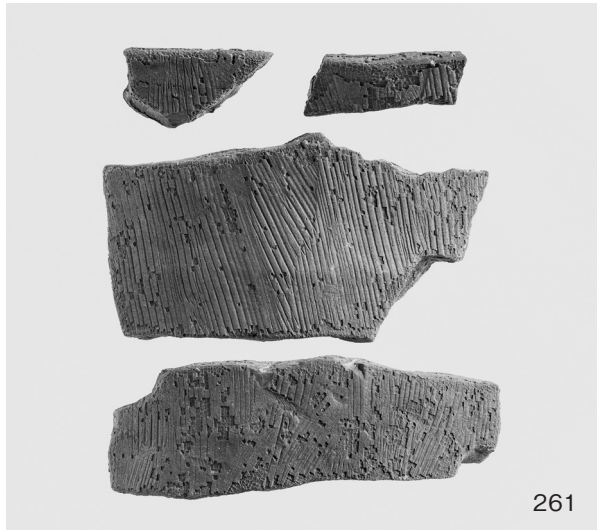
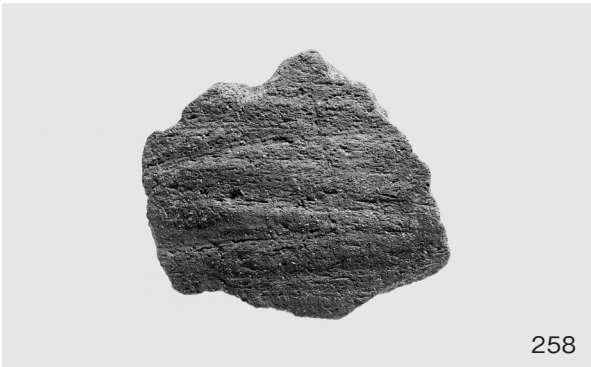
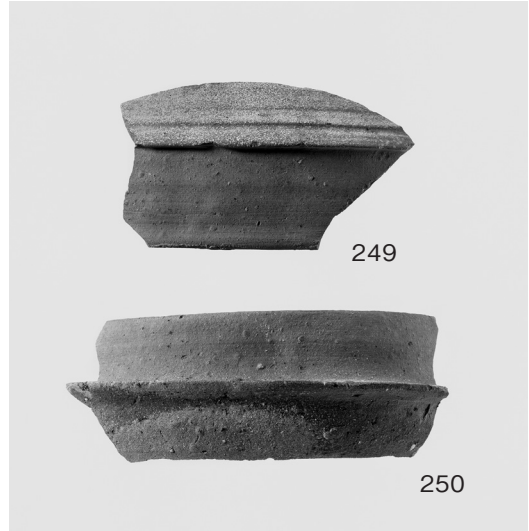
1. 出土遺物 (SD201 ② : 192・193・196・199、SB201 : 148・152～154、SB202 : 155・156・160)



1. 出土遺物 (SD202 : 203 ~ 206、SD204 ① : 210 ~ 221)



1. 出土遺物 (SD204 ② : 222 ~ 225、SK201 : 226・227、2区第IV層 : 231・233、2区第V層 : 234・235・238、2区地点不明 : 239 ~ 241)



1. 出土遺物 (SB301 : 242・244・245・248、SB302 : 249・250・253、SK303 : 258、3区第V層 : 261、SK402 : 264、4区地点不明 : 265)

報 告 書 抄 録

ふりがな	もちだほんむらいせき
書名	持田本村遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第210集
編著者名	宮内 慎一・大西 朋子
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2023（令和5）年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もちだほんむら 持田本村遺跡	まつやましみなみまち 松山市南町	38201		33° 50' 46"	132° 46' 54"	20150416) 20150630	約380	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
持田本村遺跡	集落	縄文 弥生 古墳 近世	土坑・自然流路 溝・土坑・土壇墓 堅穴・溝・土坑・柱穴 溝		縄文・石・玉 弥生・石 土師・須恵・石 陶磁器		江戸前期の溝を検出	
要約	<p>持田本村遺跡からは、縄文時代から江戸時代までの遺構・遺物を確認した。縄文時代は晩期中葉の土坑8基が検出され、土器片やチップが数多く出土した。弥生時代では土坑内から木葉文が描かれた弥生時代前期後半の小型壺が出土した。近隣の持田町3丁目遺跡からも同様の土壇墓が複数基検出されており、形状や出土遺物より本遺跡検出の土坑も一連の土壇墓と考えられる。また、同時期の溝からは径20～30cm大の河原石が列状に出土し、その下面にて完形の壺が出土している。</p> <p>古墳時代では、6棟の堅穴建物を検出した。これらは中期後半から後期の建物で、カマドを付設する建物が1棟ある。古代から中世の遺構は未検出であるが、包含層中より8世紀前半の暗文を施した土師器皿が出土している。近世では、南北方向に延びる溝が目される。幅2.7～3.4m、深さ1.3mの溝で、溝からは江戸時代初頭、17世紀前半頃の陶磁器（唐津焼・志野焼等）が出土している。出土状況から溝の廃棄に伴い、これらの遺物を投棄したものと推測される。</p> <p>今回の調査により、遺跡や周辺地域における縄文時代集落の存在が明らかになり、江戸時代の始まり前後における当地一帯の状況が一部明らかとなった。今後は資料の増加に伴い、当地や周辺地域における集落様相や変遷の更なる解明を期待する。</p>							

松山市文化財調査報告書 第210集

持田本村遺跡

令和5年3月15日 発行

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発行 埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印刷 平和印刷工業株式会社
〒790-0921 松山市福音寺町728番地
TEL (089) 947-9155